

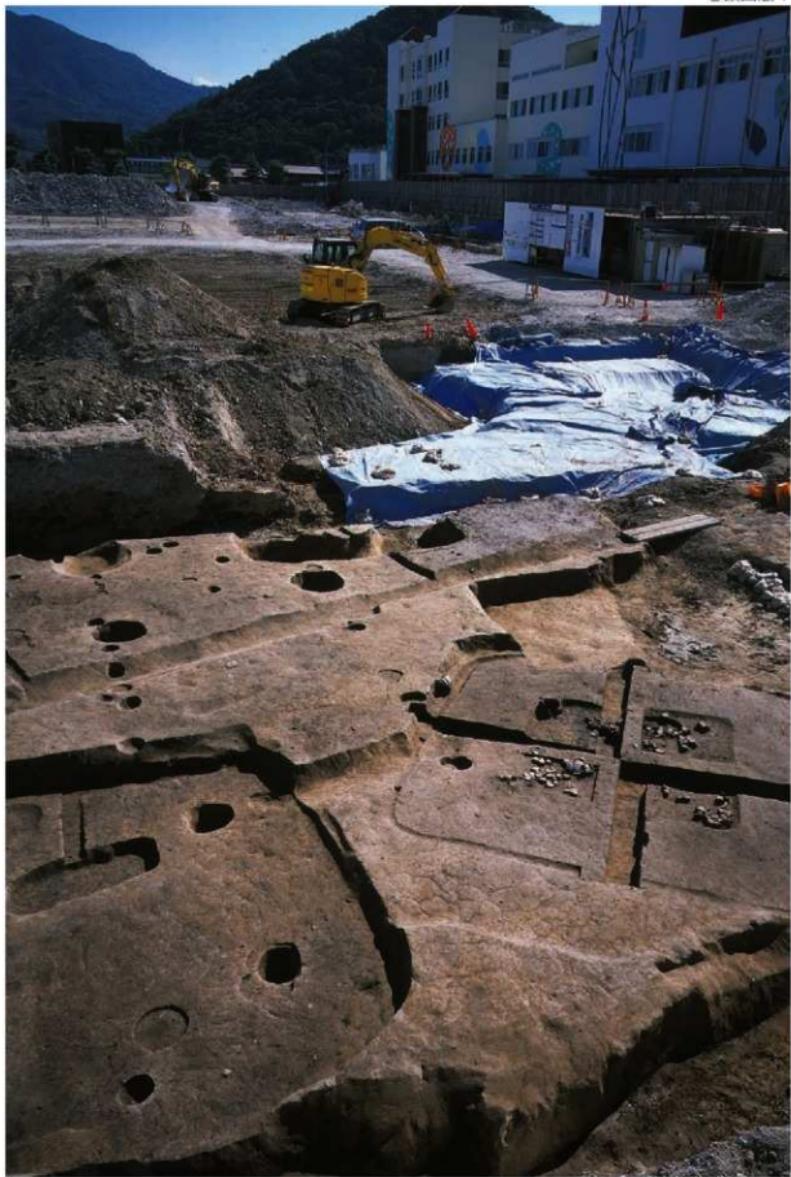
独立行政法人国立病院機構善通寺病院
統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第7冊

旧練兵場遺跡VII

2016.3

香川県教育委員会
独立行政法人国立病院機構善通寺病院
四国こどもとおとの医療センター



5区2面全景（北から）

巻頭図版2



5区2面全景（東から）



5区2面全景（北から）

巻頭図版 4



2区 SR2002 2層下位 土器出土状況（西から）



2区②全景（北から）



4 区① SD4006 (西から)

巻頭図版 6



4 区① SD4006 (東から)



4 区② SR4001 中層土器出土状況 (南から)



2区① SR2002 2層土器群

卷頭図版 8



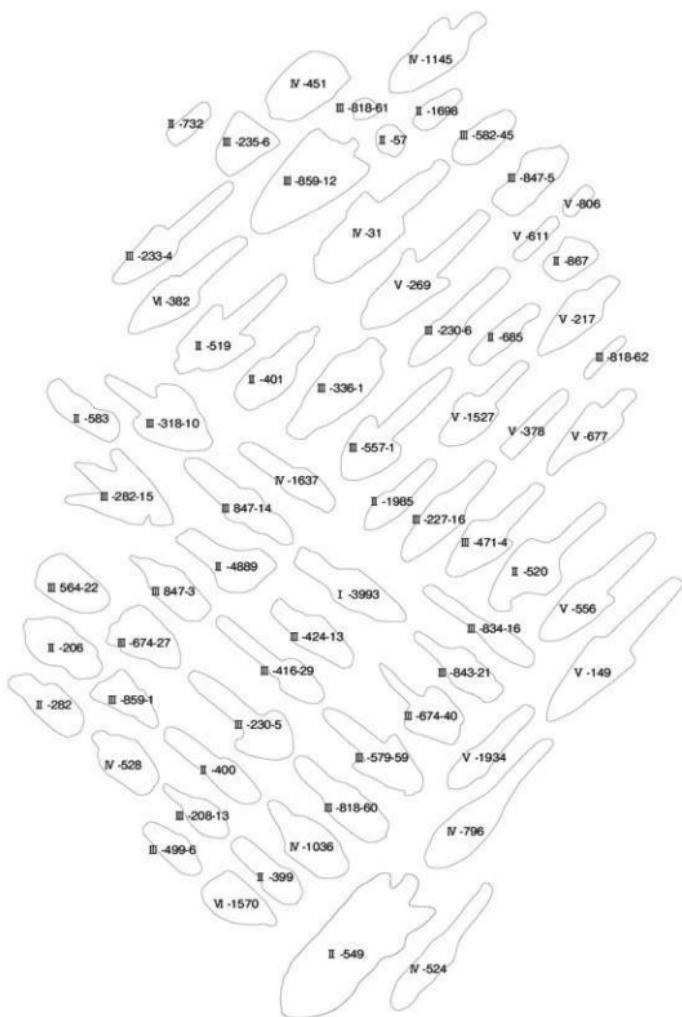
1 区 SR1003 2層土器群



5 区 SH5003a 土器群



旧練兵場遺跡出土銅鎗





鉄製品・銅製品

序 文

旧練兵場遺跡は、県内で最大規模を誇る弥生時代集落遺跡として知られています。今回、独立行政法人国立病院機構善通寺病院の統合事業に伴い、平成8年より断続的に行われた調査によって、数多くの重要な知見が得られています。本書は、平成25年度及び平成27年度に行った当該事業に伴う調査についての報告です。

当該事業に伴う発掘調査は、これまで善通寺病院の西側を中心としたものでしたが、今回の発掘調査は同院東側で行いました。その結果、西側同様に弥生時代中期から近現代にわたる数多くの遺構と遺物を確認し、地下遺構の広がりが広範囲に及ぶことが明らかとなりました。また、これまで断片的であった旧河道を検出し、旧地形の復原において貴重な資料が加わりました。本報告書が香川県はもとより全国の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとの医療センター（旧善通寺病院）をはじめとした関係機関並びに地元関係者各位には、多大な援助と協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、埋蔵文化財の保護について今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

香川県埋蔵文化財センター
所長 真鍋 昌宏

例　　言

1. 本書は、香川県普通寺市仙遊町に所在する旧練兵場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとの医療センターから委託され、香川県教育委員会を調査主体とし、香川県埋蔵文化財センターを調査担当として実施した。調査・報告書作成に伴う費用は、全て独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとの医療センターが負担した。
3. 現地調査及び報告書作成に当たって、下記の関係機関や多くの方々の協力や教示を賜った。記して謝意を表したい。

独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとの医療センター　普通寺市教育委員会　地元自治会
4. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

執筆分担は本文目次に記した。動物遺存体の同定にあたっては広島大学博物館石丸恵利子氏の鑑定をいただいた。
5. 本報告書の遺構名は、現地での調査時に使用したものの踏襲を原則とした。したがって、遺構検出時に土坑と認識したものが、調査の進捗によって墓と確定した場合でも、土坑の遺構番号が付されたままとなっている。なお、報告書作成作業で欠番になったものや、新たに追加したものが含まれる。
6. 本報告書の測地系は、世界測地系を使用した。既往調査区の報告では旧来の日本測地系を使用していたが、今回平成8年度以後の調査平面図をすべて変換し、本書付図の全体平面図に反映させた。なお、平面直角座標は第Ⅳ系を使用している。
7. 本報告書の実測図は、以下の縮尺を基本としている。

土器（1/4）・石器（1/2・1/3・1/4）・金属器（1/2）・土製品（1/2）・玉類（1/1）
8. 実測遺物に、赤色顔料や磨滅痕等の特徴が認められるものについては、実測図中にアミ掛けで表現し、個別に凡例を付した。
9. 土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
10. 本報告書における弥生土器および古墳時代初頭の土師器の型式および所属時期については、信里芳紀「弥生中期後半から古墳時代初頭の土器編年」（香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構普通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡II（第19次調査）』、

2011年)に扱ったが、細片の遺物で特定作業を行うことが多かったことから、所属時期に幅をもたせて表現している。

11. 本報告書においては、出土位置を記録して取り上げた遺物の地点を、参考のために近接する遺構断面図に投影して表記している場合がある。

12. 本報告に当たって、実測の一部・分析・保存処理等を下記の機関に業務委託した。

土器実測・トレース(株式会社イビソク)

石器実測・トレース(株式会社文化財サービス)

土壤分析(株式会社古環境研究所)

鍛冶関連遺物の金属学的分析(日鉄住金テクノロジー株式会社)

金属製品の保存処理及び金属学的分析(株式会社イビソク)

赤色顔料分析(株式会社パレオラボ)

ガラス玉の鉛同位体分析(日鉄住金テクノロジー株式会社)

遺物写真撮影(岡村印刷工業株式会社)

13. 調査で作成した記録類及び出土遺物は、香川県埋蔵文化財センターで一括して保管しているので、活用されたい。

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯・経過	(森下)	1
第2節 整理作業の経過	(森下)	3
第3節 調査区の設定	(森下)	4

第2章 調査成果

第1節 土層と微地形	(真鍋)	11
第2節 1区の調査	(真鍋)	33
第3節 2区の調査	(真鍋)	81
第4節 3区の調査	(森下)	130
第5節 4区の調査	(真鍋)	135
第6節 5区の調査	(森下)	158

第3章 自然科学分析

第1節 旧練兵場遺跡における自然科学分析報告	(株式会社古環境研究所)	226
第2節 旧練兵場跡出土鉄冶関連遺物の分析調査	(日鉄住金テクノロジー株式会社)	246
第3節 旧練兵場遺跡出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析	(竹原弘展(パレオ・ラボ))	268
第4節 旧練兵場遺跡に係る金属製品の金属学的分析業務	(株式会社イビソク)	272
第5節 動物遺存体の同定	(広島大学 石丸恵利子)	280
第6節 ガラス玉の鉛同位体分析	(日鉄住金テクノロジー株式会社)	283

第4章まとめ

挿図目次

1 図 道路位置図	4	37 図 1 区 SR1003 上層 出土遺物実測図（2）	50
2 図 既往調査位置図	5	38 図 1 区 SR1003 上層 出土遺物実測図（3）	51
3 図 調査区位置図	6	39 図 1 区 SR1003 上層 出土遺物実測図（4）	52
4 図 調査時の調査区割	7	40 図 1 区 SR1003 上層 出土遺物実測図（5）	53
5 図 旧練兵場道路Ⅱ層下位の堆積状況の模式	11	41 図 1 区 SR1003 上層 出土遺物実測図（6）	54
6 図 1 区北壁①断面図	13・14	42 図 1 区 SR1003 上層 出土遺物実測図（7）	55
7 図 1 区東壁断面図	15	43 図 1 区 SR1003 中層 出土遺物実測図（1）	56
8 図 2 区①東壁断面図	16	44 図 1 区 SR1003 中層 出土遺物実測図（2）	57
9 図 2 区①西壁断面図	17	45 図 1 区 SR1003 下層 出土遺物実測図（1）	58
10 図 2 区②南壁断面図	18	46 図 1 区 SR1003 下層 出土遺物実測図（2）	59
11 図 2 区②西壁断面図（1）	18	47 図 1 区 SR1003 出土遺物実測図	60
12 図 2 区②西壁断面図（2）	19	48 図 1 区 SR1006 遺物出土状況図	62
13 図 3 区断面図	20	49 図 1 区流路①出土遺物実測図（1）	63
14 図 4 区①北壁断面図	21	50 図 1 区流路①出土遺物実測図（2）	64
15 図 5 区東壁断面図	22	51 図 1 区流路①出土遺物実測図（3）	65
16 図 5 区西壁断面図	23	52 図 1 区流路②出土遺物実測図（1）	66
17 図 5 区南壁断面図	23	53 図 1 区流路②出土遺物実測図（2）	67
18 図 A 地点・B 地点縦横変形図	26	54 図 1 区流路②出土遺物実測図（3）	69
19 図 C 地点・D 地点 縦横変形図	27	55 図 1 区 SX1002 平断面図	70
20 図 等高線図	29	56 図 1 区 SB1001 平断面図	71
21 図 地形復原図	30	57 図 1 区 SD1009 平断面図・出土遺物実測図	72
22 図 1 区全体図	31・32	58 図 1 区 SD7001 平断面図・出土遺物実測図	72
23 図 1 区 SH1001 平断面図・出土遺物実測図	34	59 図 1 区 SD1004 平断面図・出土遺物実測図	73
24 図 1 区 SH1003・SH1005 平断面図・出土遺物実測図	35	60 図 1 区 SD1601 平断面図・出土遺物実測図	74
25 図 1 区 SH1006 平断面図・出土遺物実測図	37	61 図 1 区 SR1002 平断面図・出土遺物実測図	75
26 図 1 区 SH1006 出土遺物実測図	38	62 国 1 区 SK1010 平断面図・出土遺物実測図	76
27 図 1 区 SB1002 平断面図・出土遺物実測図	39	63 国 1 区 SX1007 平断面図・出土遺物実測図	77
28 図 1 区 SB1003 平断面図・出土遺物実測図	40	64 国 1 区柱穴出土遺物実測図	77
29 図 1 区 SD1014 平断面図・出土遺物実測図	41	65 国 1 区包含層出土遺物実測図	78
30 図 1 区 SR1003 流路①・流路②平面図	42	66 国 2 区②全体図	79・80
31 図 1 区 SR1003 流路①・流路②断面図	43	67 国 2 区①全体図	81
32 図 1 区北壁②断面図	44	68 国 2 区② SH2001 平断面図・出土遺物実測図	82
33 図 1 区 SR1003 2 層 遺物出土状況図	45・46	69 国 2 区② SH2003 平断面図・出土遺物実測図	83
34 図 1 区 SR1003 3 层 遺物出土状況図	47	70 国 2 区② SH2004 平断面図	84
35 国 1 区 SR1003 4 层 遺物出土状況図	48	71 国 2 区② SH2004 出土遺物実測図	85
36 国 1 区 SR1003 最上層 出土遺物実測図（1）	49	72 国 2 区② SH2005 平断面図・出土遺物実測図	86

73 図 2 区② SH2006 平断面図・出土遺物実測図	87	107 図 2 区① SX2003 平断面図	128
74 図 2 区② SH2007 平断面図	89	108 図 2 区①・②柱穴出土遺物実測図	128
75 図 2 区② SH2007 断面図	90	109 図 2 区①・②包含層出土遺物実測図	129
76 図 2 区② SH2007 出土遺物実測図	91	110 図 3 区調査場位置図	130
77 図 2 区② SH2008 平断面図・出土遺物実測図	92	111 図 3 区① SH3001 平断面図・出土遺物実測図	132
78 図 2 区② SH2010 平断面図・出土遺物実測図	93	112 図 3 区② SH3003・SB3001 平断面図・出土遺物実測図	133
79 図 2 区② SH2011 平断面図・出土遺物実測図	94	113 図 3 区包含層出土遺物実測図	134
80 図 2 区② SB2001 平断面図・出土遺物実測図	95	114 図 4 区①全体図	135
81 図 2 区② SB2002 平断面図	96	115 図 4 区④ SH4001 平断面図・出土遺物実測図	136
82 国 2 区② SB2003 平断面図・出土遺物実測図	97	116 国 4 区③平断面図	137
83 国 2 区② SB2004 平断面図・出土遺物実測図	98	117 国 4 区③ SR4001 中層遺物出土状況図	138
84 国 2 区② SB2005 平断面図・出土遺物実測図	99	118 国 4 区③ SR4001 下層・中層出土遺物状況図	138
85 国 2 区① SD2004 平断面図・遺物出土状況図		119 国 4 区③ SR4001 上層・中層出土遺物実測図	140
出土遺物実測図	100	120 国 4 区③ SR4001 下層出土遺物実測図（1）	141
86 国 2 区② SK2004・SK2005 平断面図・遺物出土状況	102	121 国 4 区③ SR4001 下層出土遺物実測図（2）	142
87 国 2 区② SK2004・SK2005 出土遺物実測図	103	122 国 4 区③ SR4001 上層一下層 玉・石製品・鉄製品	
88 国 2 区② SK2006 平断面図・遺物出土状況図		遺物実測図（3）	143
出土遺物実測図	104	123 国 4 区③ SR4002 下層遺物出土状況図	144
89 国 2 区② SR2002 遺物出土状況図（1）	105	124 国 4 区③ SR4002 上層・中層・下層遺物実測図	145
90 国 2 区② SR2002 遺物出土状況図（2）	107	125 国 4 区④ SH4002 出土遺物実測図	146
91 国 2 区② SR2002 遺物出土状況図（3）	108	126 国 4 区① SH4004 平断面図・出土遺物実測図	147
92 国 2 区② SR2002 出土遺物実測図（1）	110	127 国 4 区⑤ SH4005 平断面図・出土遺物実測図	148
93 国 2 区② SR2002 出土遺物実測図（2）	111	128 国 4 区② SD4001 平断面図・遺物出土状況図	149
94 国 2 区② SR2002 出土遺物実測図（3）	112	129 国 4 区② SD4001 出土遺物実測図	150
95 国 2 区② SR2002 出土遺物実測図（4）	113	130 国 4 区① SD4006 平断面図	152
96 国 2 区② SR2002 出土遺物実測図（5）	114	131 国 4 区① SD4006 出土遺物実測図	153
97 国 2 区② SR2002 出土遺物実測図（6）	115	132 国 4 区① SX4004 平断面図	154
98 国 2 区② SR2002 出土遺物実測図（7）	116	133 国 4 区⑥ 断面図	155
99 国 2 区① SD2003・SD2005・SD2006 平断面図		134 国 4 区柱穴・ sondage 周辺・出土遺物実測図	156
出土遺物実測図	118	135 国 4 区包含層出土遺物実測図	157
100 国 2 区② SD2017・SD2020 平断面図	120	136 国 5 区第 2 遺構全体図	159・160
101 国 2 区② SD2017 出土遺物実測図	121	137 国 5 区 SH5001 平断面図	161
102 国 2 区② SD2020 出土遺物	122	138 国 5 区 SH5001 遺物出土状況図	162
103 国 1 区・2 区② SD2009・SD2012・SD6001 平断面図	124	139 国 5 区 SH5001 出土遺物実測図（1）	163
104 国 1 区・2 区② SD2009・SD2012・ SD6001 出土遺物実測図		140 国 5 区 SH5001 出土遺物実測図（2）	164
105 国 2 区① SD2001 平断面図・出土遺物実測図	126	142 国 5 区 SH5002 出土遺物実測図	166
106 国 2 区② SD2013 平断面図		127 143 国 5 区 SH5003A 平断面図	168

144 図 5 区 SH5003A 遺物出土状況図	169	182 図 5 区 SD5001 断面図・出土遺物実測図（1）	211
145 図 5 区 SH5003A 出土遺物実測図（1）	170	183 図 5 区 SD5001 出土遺物実測図（2）	212
146 図 5 区 SH5003A 出土遺物実測図（2）	171	184 図 5 区 SD5005 断面図・出土遺物実測図	212
147 図 5 区 SH5003B 平断面図	172	185 図 5 区 SD5008 平断面図及び遺物出土状況図	214
148 図 5 区 SH5003B 出土遺物実測図	173	186 図 5 区 SD5008 出土遺物実測図（1）	215
149 図 5 区 SH5003CD 平断面図	175	187 図 5 区 SD5008 出土遺物実測図（2）	216
150 図 5 区 SH5003CD 出土遺物実測図	176	188 図 5 区 SD5701 断面図	217
151 図 5 区 SH5005 上層・下層平断面図	177	189 図 5 区 SD5701 出土遺物実測図（1）	218
152 図 5 区 SH5005 上層建物遺物出土状況図	178	190 図 5 区 SD5701 出土遺物実測図（2）	219
153 図 5 区 SH5005 出土遺物実測図（1）	179	191 図 5 区 SD5701 出土遺物実測図（3）	220
154 図 5 区 SH5005 出土遺物実測図（2）	180	192 図 5 区 SD5702 断面図・出土遺物実測図	221
155 図 5 区 SH5009 平断面図・出土遺物実測図	181	193 図 5 区 SD5704 出土遺物実測図	222
156 図 5 区 SH5010 平断面図・出土遺物実測図	182	194 図 5 区 SD5705 断面図・出土遺物実測図	222
157 図 5 区 SH5011 平断面図・出土遺物実測図	183	195 図 5 区 SD5714 断面図・出土遺物実測図	222
158 図 5 区 SH5012 平断面図・出土遺物実測図	185	196 図 5 区柱穴出土遺物実測図（1）	223
159 図 5 区 SH5014 平断面図・出土遺物実測図	186	197 国 5 区柱穴出土遺物実測図（2）	224
160 国 5 区 SH5701 平断面図・出土遺物実測図	187	198 国 5 区包含層出土遺物実測図	225
161 国 5 区 SH5702 平断面図・出土遺物実測図	188	199 国 旧練兵場道路：層序と試料採取位置	237
162 国 5 区 SH5703 平断面図・出土遺物実測図	188	200 国 旧練兵場道路：試料（堆積物）粒度組成	238
163 国 5 区 SH5707 平断面図・出土遺物実測図	189	201 国 微細有機遺体含有量	239
164 国 5 区 SH5710 平断面図・出土遺物実測図	191	202 国 旧練兵場道路：A 地点における花粉ダイアグラム	240
165 国 5 区 SB5001 平断面図・出土遺物実測図	192	203 国 旧練兵場道路：B 地点における花粉ダイアグラム	241
166 国 5 区 SB5002 平断面図・出土遺物実測図	192	204 国 旧練兵場道路：C 地点における花粉ダイアグラム	242
167 国 5 区 SB5003 平断面図・出土遺物実測図	193	205 国 旧練兵場道路：D 地点における花粉ダイアグラム	243
168 国 5 区 SB5004 平断面図・出土遺物実測図	194	206 国 旧練兵場道路：E 地点における花粉ダイアグラム	243
169 国 5 区 SB5005 平断面図・出土遺物実測図	195	207 国 旧練兵場道路：II 地点における花粉ダイアグラム	243
170 国 5 区 SB5006 平断面図・出土遺物実測図	196	208 国 旧練兵場道路の花粉・孢子	244
171 国 5 区 SB5007 平断面図・出土遺物実測図	198	209 国 旧練兵場道路の種実	245
172 国 5 区 SK5010 平断面図・出土遺物実測図	199	210 国 花津の顕微鏡組織・EPMA 調査結果（1）	249
173 国 5 区 SD5703 断面図・出土遺物実測図	200	211 国 花津の顕微鏡組織・EPMA 調査結果（2）	251
174 国 5 区 SX5002 平断面図・出土遺物実測図（1）	201	212 国 花津の顕微鏡組織・EPMA 調査結果（3）	253
175 国 5 区 SX5002 出土遺物実測図（2）	202	213 国 花津の顕微鏡組織・EPMA 調査結果（4）	254
176 国 5 区 SX5005 平断面図・出土遺物実測図（1）	203	214 国 粒状率・鉄製品の顕微鏡組織・EPMA 調査結果	256
177 国 5 区 SX5005 出土遺物実測図（2）	204	215 国 鉄片・鍛冶津の顕微鏡組織・EPMA 調査結果	257
178 国 5 区 第1道構面全体図	205・206	216 国 ガラス質津・鉄片の顕微鏡組織	259
179 国 5 区 SB5101 平断面図	207	217 国 鉄片の顕微鏡組織・EPMA 調査結果	261
180 国 5 区 SB5101 出土遺物実測図	208	218 国 鉄片・鍛冶津の顕微鏡組織	263
181 国 5 区 SB5102 平断面図	209	219 国 ガラス質津・鉄片の顕微鏡組織・EPMA 調査結果	264

220 図 鉄片・鐵治津の鉄微鏡組織・EPMA 調査結果	265	243 図 弥生時代・古墳時代ガラスと本資料(4,5)との比較	
221 図 赤色顔料の蛍光 X 線分析結果	269	(A式図)	288
222 図 赤色顔料の生物顕微鏡写真	270	244 図 弥生時代・古墳時代ガラスと本資料(4,5)との比較	
223 図 試料採取位置	272	(B式図)	288
224 図 鉄紙の断面顕微鏡組織	275	245 図 試料1の蛍光X線分析結果(1)	290
225 図 鉄中非金属介在物のEPMA 調査結果:		246 図 試料1の蛍光X線分析結果(2)	291
反射電子像(COMP)および特性X線像	275	247 図 試料2の蛍光X線分析結果(1)	292
226 図 蛍光X線測定領域		248 図 試料2の蛍光X線分析結果(2)	293
(全体マッピング 走査幅: 11,264 × 11,264 mm)	276	249 図 試料3の蛍光X線分析結果(1)	294
227 国 蛍光X線測定領域		250 国 試料3の蛍光X線分析結果(2)	295
(部分マッピング 走査幅: 2,048 × 2,048 mm)	276	251 国 試料4の蛍光X線分析結果(1)	296
228 国 部分マッピング(1)	277	252 国 試料4の蛍光X線分析結果(2)	297
229 国 部分マッピング(2)	278	253 国 試料5の蛍光X線分析結果(1)	298
230 国 X線回折分析同定結果	279	254 国 試料5の蛍光X線分析結果(2)	299
231 国 X線回折分析同定結果(マッチングピークの表示)	279	255 国 試料6の蛍光X線分析結果(1)	300
232 国 各調査区出土の動物遺存体	282	256 国 試料6の蛍光X線分析結果(2)	301
233 国 香川県旧練兵場道路出土ガラスビーズ		257 国 微地形復元図	303
資料の No 1~5	283	258 国 1区道構変遷図	305
234 国 香川県西末町道路出土ガラスビーズ資料の No. 6	283	259 国 2区①道構変遷図	306
235 国 鉛同位体比を用いた産地推定の概念図		260 国 2区②道構変遷図	306
(A式図)	284	261 国 大溝の分布	310
236 国 鉛同位体比を用いた産地推定の概念図(B式図)	284	262 国 4区②SD4006・II-2区 SD2001 全体図	312
237 国 普通寺市旧練兵場道路で出土したガラスが示す		263 国 5区時期別変遷図1	313
鉛同位体比(A式図)	286	264 国 5区時期別変遷図2	314
238 国 普通寺市旧練兵場道路で出土したガラスが示す鉛同位体比		265 国 5区時期別変遷図3	315
(B式図)	286	266 国 銅鏡集成1	318
239 国 本資料(1)と沖縄出土ガラスとの比較(A式図)	287	267 国 銅鏡集成2	319
240 国 本資料(1)と沖縄出土ガラスとの比較(B式図)	287	268 国 銅鏡分布	320・321
241 国 本資料(2,3)と古墳時代ガラスとの比較(A式図)	287		
242 国 本資料(2,3)と古墳時代ガラスとの比較(B式図)	287		

表 目 次

表1 平成25年度 旧練兵場跡本発掘調査工程表	2	表8 分析結果一覧	271
表2 報告調査区名と旧調査区名の対照表	7	表9 鉄板状鉄製品の調査結果	274
表3 既往の調査一覧	8	表10 平成27年度 旧練兵場遺跡(NZR11・13)	
表4 旧練兵場道路における花粉分析結果	231・232	出土の動物遺存体一覧	280
表5 旧練兵場道路における種実同定結果	236	表11 資料の記載	283
表6 供試材の履歴と調査項目	247	表12 普通寺市の旧練兵場道路から出土したガラスの 鉛同位体比値	286
表7 供試材の化学組織	247		

表 13 銅鑼掲載一覧	316	表 16 石器觀察表	380
表 14 土器觀察表	322	表 17 金属觀察表	381
表 15 瓦觀察表	379	表 18 玉觀察表	382

写真図版目次

図版 1

- 1 区 SR1003 器出土状況（南から）
 図版 2
 1 区 SB1002 完掘状況（北から）
 1 区 SH1003・SH1005 検出状況（東から）
 1 区 SB1002 SP1069 半サイ（東から）
 1 区 SH1001 贊床直上 土器出土状況（北から）
 1 区 SH1003 贊床検出状況（南東から）
 1 区 SH1003 中央土坑 遺物出土状況（南から）

図版 3

- 1 区 SH1006・SB1002 検出状況（北から）
 1 区 SD1014 骸骨出土状況（南から）
 1 区 SX1001 土器出土状況（西から）
 1 区 SH1006 完掘状況（南から）
 1 区 SH1006・SD1012（北から）
 1 区 SD1014 完掘状況（南西から）
 1 区 SX1001 土器出土状況（東から）

図版 4

- 1 区路① SR1006 土器 出土状況（西から）
 1 区路① 完掘状況（西から）
 1 区路① 北壁断面
 1 区 SD1009 検出状況（西から）
 1 区壁断面 北壁

図版 5

- 1 区 SR1003 2 層下位 土器出土状況（北から）
 1 区 SR1003 西壁断面
 1 区 SR1003 2 層下位 土器出土状況（南から）
 1 区 SR1003 4 層 土器出土状況（北から）

図版 6

- 1 区 SR1002 北壁断面
 1 区 SD1601 周辺完掘状況（北から）
 1 区 SD1004 南北あぜ断面（西から）
 1 区 SD1601 東壁断面図

図版 7

- 2 区① 完掘全景（南から）
 2 区① SD2003 掘削状況（南東から）
 2 区① 東壁断面
 2 区① 濃群完掘状況（南東から）
 2 区① SD2006 断面（南東から）
 2 区① SD2004 遺物出土状況（南から） 2
 図版 8
 2 区① SR2002 2 層 遺物出土状況（南から）
 2 区① SR2002 2 層 土器出土状況（北西から）
 図版 9
 2 区① SR2002 2 層下位 土器出土状況（南から）
 2 区① SR2002 2 層下位 作業風景（南から）
 2 区① SR2002 2 層下位 支脚出土状況（北から）
 2 区① SR2002 2 層下位 遺物出土状況（西から）
 図版 10
 2 区① SR2002 断面（北から）

- 2 区① SR2002 4 層 遺物出土状況（北西から）
 2 区② 検出状況（北から）
 2 区② SH2004 検出状況（北から）
 2 区② SH2003 完掘状況（東から）
 図版 11

- 2 区② SH2001 完掘状況（南から）
 2 区② SH2007 土器出土状況（東から）
 2 区② SH2007 土器出土状況（西から）
 2 区② SH2007 完掘状況（北から）
 図版 12
 2 区② SB2001 検出状況（北東から）
 2 区② SP2011 掘方 石錐出土状況（南から）
 2 区② SH2008 石列 検出状況（東から）
 2 区② 完掘状況（北から）

- 図版 13
2 区② SD2017 断面（南から）
2 区② SD2020 断面（東から）
2 区② SD2012 遺物出土状況（東から）
2 区② SD2012・SD2009 西壁
2 区② 完掘状況（北東から）
2 区② SD2013 完掘状況（東から）
- 図版 14
2 区② SK2004・SK2005 土器出土状況（南から）
2 区② SK2006 遺物出土状況（南から）
2 区② SP2122 断面（南から）
2 区② SK2004 断面（南から）
2 区② SK2005 土器出土状況（北から）
2 区② SH2004 石錐出土状況（南から）
2 区② SP2055 断面（北から）
- 図版 15
3 区 SB3001 検出状況（北東から）
3 区 SH3001 上層面完掘状況（南から）
3 区 SH3001 上層貼床面検出状況（南から）
3 区 遺構完掘状況
3 区 SH3001 検出状況（南から）
3 区 SH3001 下層面壁溝立板痕跡検出状況（南から）
- 図版 16
3 区 SH3001 下層面検出状況（南から）
4 区 SD4006 路面検出状況（南から）
3 区 SH3001 下層面完掘状況（北から）
4 区 SD4006 路床検出状況（北東から）
4 区① 南壁断面
- 図版 17
4 区 SD4006 検出状況（北東から）
4 区 SD4001 あぜ（東から）
4 区 SD4001 土器出土状況（西から）
4 区 SH4004 あぜ（南から）
4 区① 東壁断面
4 区⑤ SH4005 検出状況（南西から）
4 区 SH4001 完掘状況（南から）
- 図版 18
4 区② SR4001 中層 鉄艇出土状況（南から）
4 区② SR4001 中層 管玉出土状況（北から）
4 区② SR4001 中層 土器出土状況（北から）
4 区② SR4002 下層 土器出土状況（南から）
4 区② SR4001 獣骨出土状況（南から）
4 区② SR4001 壁断面
4 区② SR4001・SR4002 底面断割状況（南から）
- 図版 19
5 区 SH5001
5 区 SH5001
5 区 SP5141 SH5002 主柱穴断面（南から）
5 区 SH5001
5 区 SH5002 完掘状況（南から）
5 区 SH5002 地床炉検出状況（南から）
- 図版 20
5 区 SH5003A 遺構検出状況（東から）
5 区 SH5003A 遺物出土状況（南から）
- 図版 21
5 区 SH5003B 床面検出状況（北から）
5 区 SH5003B 遺構検出状況（南から）
5 区 SH5003 張出部検出状況（北から）
5 区 SH5003B 銅錐出土状況（南から）
- 図版 22
5 区 SH5003CD 打製石包丁出土状況（南から）
5 区 SH5005 上層面遺物出土状況近接（北西から）
5 区 SH5005 上層面遺物出土状況（北から）
- 図版 23
5 区 SH5005 上層面炉跡 SK5006（東から）
5 区 SH5009 完掘状況（北から）
5 区 SH5010 完掘状況（東から）
5 区 SH5005 上層面炉跡 SK5006 断面（東から）
5 区 SH5010 検出状況（北から）
- 図版 24
5 区 SH5011 完掘状況（北から）
5 区 SH5012 壁溝断面（南から）
5 区 SH5701 土錐出土状況（北東から）
5 区 SH5703 壁溝検出状況（東から）
5 区 SH5012 完掘状況（東から）
5 区 SH5701 完掘状況（東から）

5区 SH5702 完掘状況（東から）	図版 30
5区 SH5707 完掘状況（東から）	5区 上層遺構 SD5008 遺物出土状況（北から）
図版 25	5区 上層遺構 SD5008 断面（東から）
5区 SH5707 炉跡 SK5702 検出状況（北から）	図版 31
5区 SX5002 完掘状況（東から）	5区 上層遺構 SD5701（東から）
5区 SX5002 砥石出土状況（東から）	5区 上層遺構 SD5701 下層検出状況（西から）
5区 SK5010 断面（南から）	5区 上層遺構 SD5701（北東から）
5区 SX5002 断面（東から）	5区 上層遺構分布（南から）
5区 SX5002 朱精製容器出土直後	5区 上層遺構分布（北から）
5区 SX5005 検出状況 1（東から）	図版 32
図版 26	2・3・4・6・9・8・7・11・14・16・12・474
5区 SX5005 埋土 1層除去後（東から）	図版 33
5区 SX5005 断面 3（南から）	17・19・27・254・255・62・84・26・257・58・
5区 SB5001 柱穴（SK5013）柱痕検出状況（東から）	87・90
5区 SB5002 柱穴 SP5313 断面（南から）	図版 34
5区 SX5005 検出状況 3（東から）	77・78・79・110・122・118・124・70・86・85・
5区 SB5001 柱穴（SP5186）断面（南から）	72
5区 SB5002 柱穴 SP5206 断面（南から）	図版 35
図版 27	88・115・194・168・202・203・133・150・205・
5区 SB5003 柱穴 SP5289 断面（西から）	204
5区 SB5004 柱穴 SP5762 断面（南から）	図版 36
5区 SB5003 柱穴 SP5312 断面（南から）	217・240・242・221・222・260・139・152・
5区 SB5006 柱穴 SP5794 断面（南から）	256・319・268・269
5区 SB5007 柱穴 SK5704 断面（北から）	図版 37
5区 SB5007 柱穴 SP5299（北西から）	305・491・349・338・432・473・418・409・424・
5区 SD5703（西から）	425・423・422・421・419・411・417・412・410・
図版 28	436・432・434・435
5区 SB5007 柱穴 SP5299 断面（西から）	図版 38
5区 SD5001 完掘状況（南から）	570・593・559・524・521・587・523・590・543・
図版 29	591
5区 SD5001 検出状況（東から）	図版 39
5区 上層遺構 SD5001 遺物出土状況（南から）	652・580・637・641・639・650・597・582・618・
5区 上層遺構 SD5001・SD5008（東から） 2	594
5区 SD5001 断面（西から）	図版 40
5区 上層遺構 SD5008 ガラス玉 1517 出土状況（北から）	620・626・595・600・675
5区 上層遺構 SD5008 遺物出土状況（東から）	図版 41
5区 上層遺構 SD5008 軒平瓦出土状況（南から）	688・766・784・763・739・709・701・702・787・ 776・731・546・283・492・1057・535・729

図版 42	図版 52
785・814・527・503・765・812・805・810・830・	1336・1371・1392・1364・1369・1425・1424・
885・852・883・884・995・980・966	1386・1415・1417・1404・1394・1412・1387
図版 43	図版 53
984・996・979・1033・1015・1037・1002・1004・	1354・1316・1407・1414・1398・1395・1437・
981・998	1441・1440・1443・1442・1450・1456・1445・
図版 44	1444・1447・1446・1455
896・897・898・913・904・934・911・899・900・	図版 54
905・903・910・912・895・907・908・920・918・	1431・1432・1436・1457・1463・1480・1458・
901・915・902・923・925・916・914・906・919・	1461・1460・1462・1459・1488・1485・1484・
917・922・940・932・938・939・935・933・936・	1489・1497・1495・1496・1482・1483・1481・
921・924・927・928・909・937・931・929・930・	1486・1491・1500
942・941・926・977・974・1060・1059・1058・	図版 55
1020・1019・1023・1042・1043・1040・1035・	1476・1472・1474・1468・1470・1471・1466・
1036・1018・1021・1001	1467・1469・1475・1473・1490・1519・1501・
図版 45	1527・1532・1533・1522・1544
1068・1082・1063・1071・1081・1083・1089・	図版 56
1104・1091・1118	1505・1546・1545・1552・1555・1548・1547・
図版 46	1550・1549・1551・1553・1554・1556・1644・
1119・1130・1140・1146・1149・1147・1148	1643・1655・1510・1514・1513・1512・1511・
図版 47	1507・1515・1509・1506・1508・1609・1559・
1161・1160・1162・1153・1154・1138・1204	1563・1564・1565・1524・1523・1525・1114・
図版 48	1226・1663・1272・1115・1191・1516・1245・
1151・1207・1205・1152・1178・1157・1179・	1225
1186・1194・1193・1192・1158	図版 57
図版 49	1135・1137・1134・1136・1517・1243・1662・
1217・1220・1246・1221・1232・1252・1250・	1382・1422・1418・1419・1420・1421・1418・
1238・1247・1249	1434・1433・1435・1297・1189・1224・1657・
図版 50	1283・1273・1314・1315・1658
1251・1266・1253・1265・1255・1300・1258・	図版 58
1264・1261	1602・1276・1646・1603・1393・1187
図版 51	400・788・789・1222・1223・732・733・1423・
1267・1281・1326・1270・1330・1328・1329・	893・1133・1304・1477・1439・1647・774・
1259・1363・1356・1370	1478・894

付 図

旧練兵場遺跡遺構平面（全時代）

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯・経過

(1) 調査に至る経緯

独立行政法人国立病院機構善通寺病院（以下、「病院」という）による病院統合事業と埋蔵文化財の保護については、独立行政法人化前の国立善通寺病院を含めると、平成13年度から継続的に協議を進めているところである。平成25年5月に統合病院「四国こどもとおとなの医療センター」が開所し、統合事業は完了しつつあるが、平成25年度に旧病院建物の解体及び駐車場造成工事等の工事が計画され、県教育委員会事務局生涯学習・文化財課（以下、「県教委」という）と病院との間で協議が行われた。その結果、平成25年6月から平成26年3月の期間で、本体の建築工事と併行して次のとおり本発掘調査を実施することで合意した。ただし、調査着手時に設計が完了していないかったため、調査を進めながら適宜協議を行い、最終的には平成25年度に1,009m²の本発掘調査を直営で実施した。

本調査範囲の決定に当たっては、遺構面高さと設計上の掘削深度を照合し、遺構面上部に30cmの保護層が維持できるか否かを判断基準とした。また、遺構面高さのデータが少ないエリアでは、旧建物解体時に立会を行い、適宜遺構面高さを確認しながら協議を進めた。

2-2-4区については、自転車置き場の基礎を除く床部については保護層が確保できることから本発掘調査は基礎部分のみとしたが、小刻みな調査区による本発掘調査は非効率であることから、建物範囲全体を遺構面まで掘り下げ、遺構検出まで行った上で、遺構面影響範囲のみ遺構を完掘し、保護砂で覆った後に工事に着手することとした。

整理作業を平成27年度に実施したが、その業務期間中に病院側から未だ残る旧建物の改築工事に伴う発掘調査の打診があり、整理業務に従事する職員が一時的に直営で本発掘調査を実施し、その成果を本報告に含めた。調査面積は52m²である。

発掘調査により出土した遺物は28リットル入りコンテナ210箱である。

整理作業は平成27年度に香川県埋蔵文化財センターが直営で実施した。作業に要した期間は延10月である。

(2) 発掘調査の経過

本発掘調査は駐車場造成等工事の工区区分に合わせて調査区を設定した。記録に使用した座標は基準点測量を委託して実施した上で、第4系国土座標（世界測地系）を使用した。また水準については平成13年度以後の調査で使い続けてきた水準を最新の水準と比較できるよう、今回新たに3等水準から引導した水準点を調査範囲の一角に設置した。

調査の測量記録はトータルステーション（Nikon Nivo5.sc）を使用してデジタル測量を実施し、PCに取り込んだ測量データを遺構実測支援ソフトウェア「遺構くん Cubic 2013」（Cubic 社製）上で図化したもの的基本とし、断面実測等については手実測とした。

写真記録はデジタル一眼レフカメラ Nikon D7000において4928×3264ピクセル（jpeg）の記録を基本とし、全景写真等については4×5判フィールドカメラ「トヨフィールド45A」を使用してカラーリバーサルフィルム（フジフィルム プロビア100F 45）及びモノクロネガフィルム（フジフィルム ア

クオス 100 45) に撮影し、前者については 2000dpi の解像度によるスキャニングにより、すべてのカットをデジタルデータ (tiff) として記録した。

詳細な調査工程は表のとおりである。

表 1 平成 25 年度 旧練兵場遺跡 本発掘調査工程表

調査区	調査面積 (m ²)	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備	—										
1区	274										
2区①	62										
2区②	241										
3区①	28										
3区②	4										
3区③	4										
3区④	1										
3区⑤	1										
4区①	63										
4区②	5										
4区③	2										
4区④	5										
4区⑤	7										
4区⑥	22										
5区	290										
基礎整理	—										
合計	1,009										

第2節 整理作業の経過

整理作業は香川県埋蔵文化財センターにおいて平成27年度に実施した。整理に要した延月数は10ヶ月で2名の専門職員と15名の整理作業員が従事した。

出土遺物の実測作業は土器及び石器・玉類の一部を委託して実施し、そのほかの実測を直営で行った。トレース作業は実測を委託したものについてはデジタルトレースをあわせて委託し、直営で実測した土器についてはアナログトレース、石器・玉類・金属器については直営でデジタルトレースを行った。デジタルトレースはAdobe社製illustratorCS6を使用し、アナログトレースは墨入後に600dpiの解像度でスキャニングしたtiffデータを1/2に縮小して使用した。

写真撮影は巻頭写真の撮影を委託して実施し、写真図版の撮影は直営で実施した。

このほか、出土した金属器の保存処理及び科学的分析、赤色顔料・鉛ガラスの分析を委託して実施した。

(1) 調査体制・整理体制

平成25年度の発掘調査体制及び平成27年度の整理業務体制を以下に示す。

平成25年度

■香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田宏、副課長 木虎淳

総務グループ 副主幹 松下由美子

文化財グループ 課長補佐 片桐孝浩、主任文化財専門員 山下平重、文化財専門員 松本和彦

■香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏、次長 前田和也

総務課 課長 前田和也（兼務）、主任 俟野英二・宮武ふみ代・中川美江・高木秀哉

調査課 課長 森格也、主任文化財専門員 森下英治、技師 真鍋貴匡

嘱託 井上加奈子・今井由佳・甲斐美智子

平成27年度

■香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田宏、副課長 小柳和代

総務グループ 副主幹 松下由美子

文化財グループ 課長補佐 片桐孝浩、主任文化財専門員 山下平重、文化財専門員 乗松真也

■香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏、次長 前田和也

総務課 課長 前田和也（兼務）、主任 寺岡仁美・中川美江・丸尾麻知子・高木秀哉・岩崎昌平

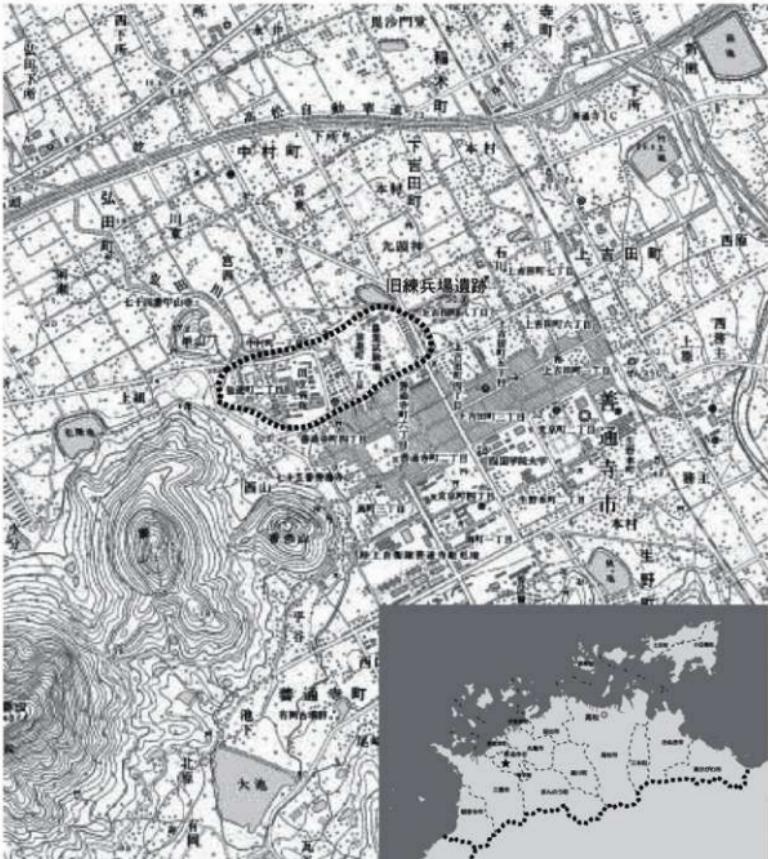
資料普及課 課長 森格也、主任文化財専門員 森下英治 技師 真鍋貴匡

嘱託 伊藤真紀・合田和子・佐々木博子・竹村恵子・森田愛子・井上加奈子・今井由佳・藤井菜穂子・岡本光代・加藤恵子・竹内悦子・西本智子・原節子・牧野香織・正本由希子

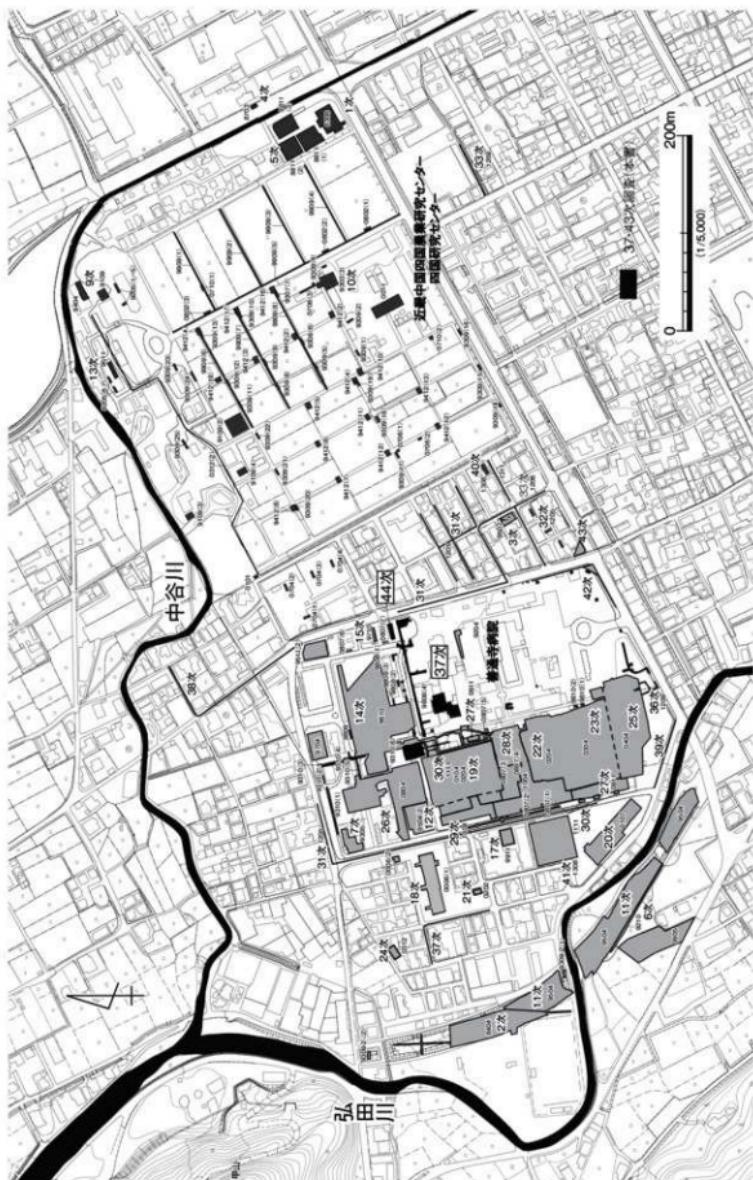
第3節 調査区の設定

既往調査については、位置図及び一覧表を示し、詳細な説明はすでに『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告されているので、割愛する。

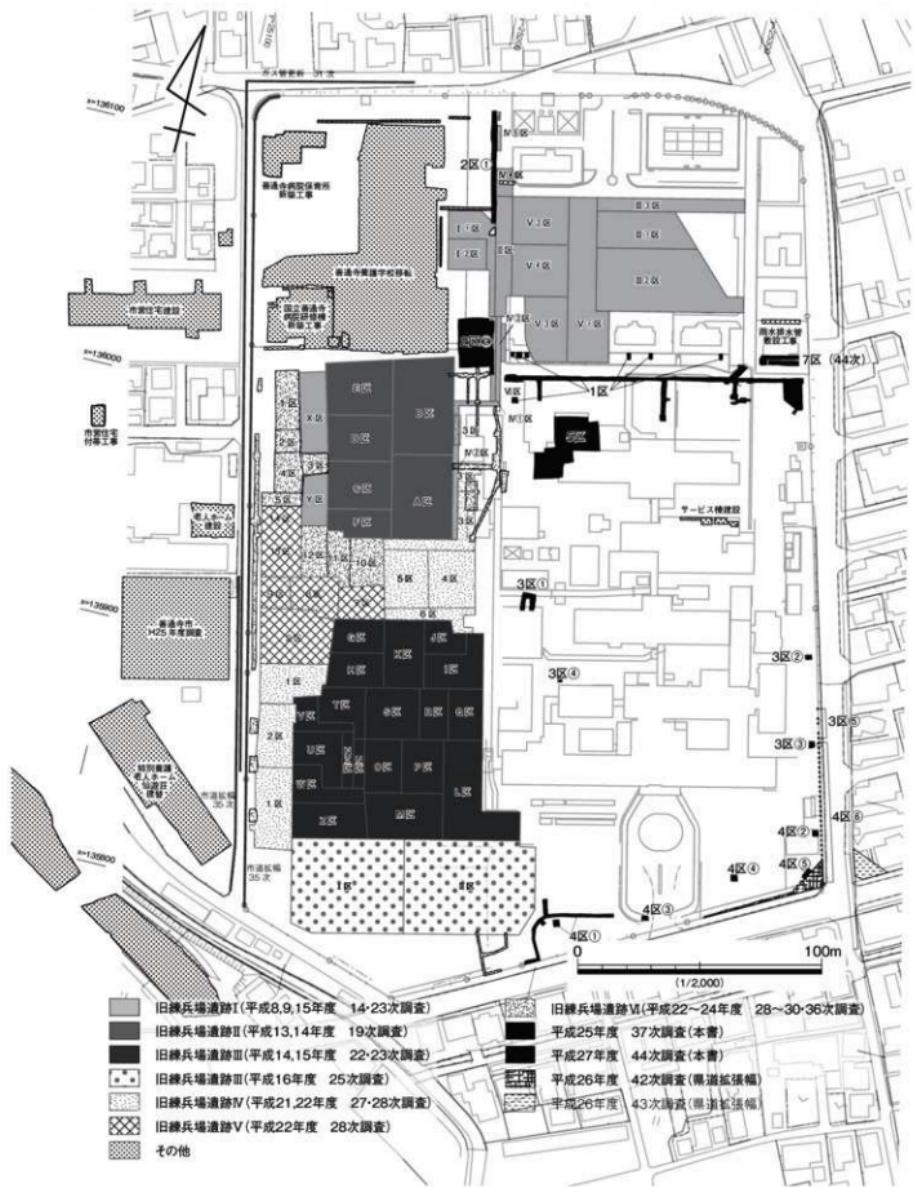
今回報告の調査区については、外構工事に伴って調査を実施し、その調査の単位で調査区名を付与したことから、細分かつ煩雑な調査区割となった。報告では細分した調査区名では遺構の説明時に多数の調査区名がつき煩雑になることから、一定のまとまりの範囲を統合し報告している。統合した調査区は3図に示している。また、出土遺物の取上札や遺構台帳・遺物台帳に記した調査区名は変更しておらず、旧調査区名のままであることから、今後旧調査区名がわかるように4図と表2に示しておく。基本的に報文中では旧調査区名は使用していない。



1図 遺跡位置図



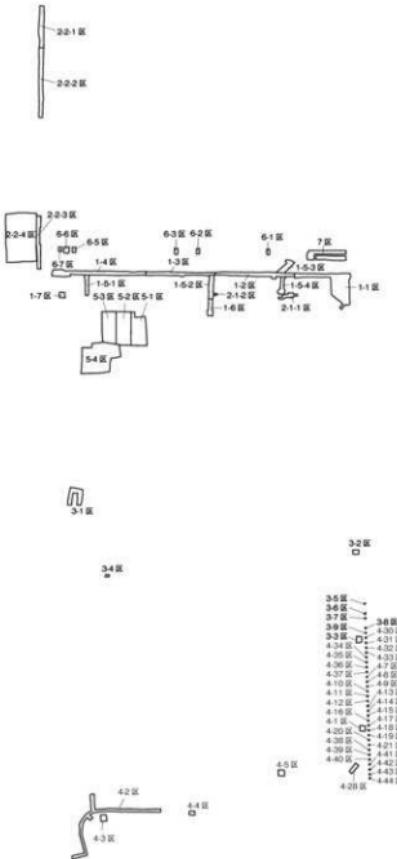
2図 既往調査位置図



3図 調査区位置図

表2 報告調査区名と旧調査区名の対照表

調査	報告	調査	報告
1・1区		4・7区	
1・2区		4・8区	
1・3区		4・9区	
1・4区		4・10区	
1・5・1区		4・11区	
1・5・2区		4・12区	
1・5・3区		4・13区	
1・5・4区		4・14区	
1・6区		4・15区	
1・7区	1区	4・16区	
2・1・1区		4・17区	
2・1・2区		4・18区	
6・1区		4・19区	
6・2区		4・20区	
6・3区		4・21区	4区⑥
6・4区		4・30区	
6・5区		4・31区	
6・6区		4・32区	
6・7区		4・33区	
2・2・1区	2区①	4・34区	
2・2・2区		4・35区	
2・2・3区	2区②	4・36区	
2・2・4区		4・37区	
3・1区	3区①	4・38区	
3・2区	3区②	4・39区	
3・3区	3区③	4・40区	
3・4区	3区④	4・41区	
3・5区		4・42区	
3・6区		4・43区	
3・7区	3区⑤	4・44区	
3・8区		5・1区	
3・9区		5・2区	
4・2区	4区①	5・3区	5区
4・3区		5・4区	
4・1区	4区②		
4・4区	4区③		
4・5区	4区④		
4・28区	4区⑤		



4 図 調査時の調査区割

表3 既往の調査一覧

調査番号	年度	調査次数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
8308	s58	1	確認調査	範囲確認調査	普通寺市教委	1200	弥生終末期の堅穴住居1棟、古代末～中世の溝を検出	1,10	仲村魔寺
8404	s59	2	本発掘調査	弘田川河川改修	普通寺市教委	3635	弥生中期～終末期の堅穴住居38棟、鏡片・銅鏡・ガラス玉出土	2,11	後ノ宗
8507	s60	3	本発掘調査	個人住宅建設	普通寺市教委	135	弥生後期後半の箱式石棺・土器棺墓を確認	3,11	仙道
8703	s62	4	本発掘調査	下水道建設	県教委	22	弥生中期末の堅穴住居1棟・掘立柱建物1棟を確認	11	旧練兵場
8811	s63	5	確認調査	範囲確認調査	普通寺市教委	1137	弥生中期～終末期の堅穴住居。古墳時代後期の堅穴住居を確認	4,12	仲村魔寺
9109	h3		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	146	弥生時代後期の堅穴住居、弥生中期の掘立柱建物を検出	13	
9205	h4		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	66	弥生後期～古墳時代堅穴住居4棟、灰坑・柱穴を確認	14	
9204	h4		工事立会	普通寺病院サービス棟建設	県教委	41	古墳時代後期の堅穴住居、平安時代古墳溝・弥生～古墳時代の土臺をより検出	14	
9210	h4	6	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	460	弥生後期～古墳時代堅穴住居多数、急合層から小鋼鋤片が出土	14	弘田川西岸
9305	h5	7	本発掘調査	普通寺病院保育所建設	県教委	305	弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴住居14棟を検出	15,28	
9309	h5		工事立会	四国農業試験場施設整備	県教委	70	全域で弥生～古代の遺構を確認	15	
9309-2	h5		確認調査	弘田川河川改修	県教委	弘田川の堆積層	確認	28	
9310	h5		工事立会	普通寺病院水道管理工事	県教委	100	弥生前中期の野廬窓2基、弥生後期の堅穴住居4棟を検出	28	
9310-2	h5		工事立会	普通寺病院下水道管渠工事	県教委	120	弥生時代後期の堅穴住居5棟。中の壁を確認	28	
9310-3	h5	8	本発掘調査	普通寺病院看護学校整備	県教委	150	弥生中期～終末期の堅穴住居9棟、古墳時代の掘立柱建物を確認	15,28	
9404	h6	9	本発掘調査	四国農業試験場品質管理施設建設	県教委	120	弥生後期の堅穴住居2棟、古墳時代後期の堅穴住居1棟を確認	16,29	
9412	h6	10	本発掘調査	四国農業試験場バイオプラン施設工事	県教委	100	全域で弥生～中世の遺構を確認	16,29	
9504	h7	11	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	6390	弥生～古墳時代の堅穴住居62棟、弥生中期の独立柱建物を確認	33	弘田川西岸
9504-2	h7	12	本発掘調査	普通寺病院研修棟建設	県教委	690	弥生中期～後期初頭の掘立柱建物を確認	17,31	
9511	h7	13	本発掘調査	四国農業試験場タシタク改良解説実験施設建設	県教委	300	弥生後期の堅穴住居2棟、弥生中期～後期の柱建物1棟、古墳時代後期の溝1条を確認	17,31	
9511-2	h7		工事立会	普通寺病院備蓄倉庫建設	県教委	780	弥生後期から終末期の堅穴住居等を確認	32	
9610	h8	14	本発掘調査	普通寺病院看護学校新築	県教委	6000	弥生後期の堅穴住居・溝跡・柔里型地割界溝を検出	34	
9710	h9	15	本発掘調査	普通寺病院雨水管敷設工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	32	
9704	h9		工事立会	普通寺病院水源地建設	県教委	300		32	
9809	h10	16	本発掘調査	普通寺病院看護学校付帯工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	20	
9808	h10		確認調査	確認調査	普通寺市教委	30	弥生中期～後期の柱穴群を確認	5	後ノ宗
9909	h11		工事立会	四国農業試験場排水施設工事	県教委	800	弥生中期後半～後期の堅穴住居を検出	21,42	
9911	h11	17	工事立会	老人ホーム建設	普通寺市教委	201	旧河道から弥生中期が一括出土	21,42	
0006	h12	18	本発掘調査	市営住宅建設	普通寺市教委	1068	弥生後期堅穴住居、旧河道を検出	6	
0101	h12		工事立会	四国農業試験場西門・水路改修	県教委	122592		22	
0104	h13	19	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3250	弥生中期～後期の堅穴住居・掘立柱建物多数、旧河道検出	35,39	
0107	h13	20	本発掘調査	特別養護老人ホーム仙道荘建設	普通寺市教委	1430		7,23	
0202	h13	21	本発掘調査	市営住宅付帯工事	普通寺市教委	46	弥生後期の堅穴住居3棟を確認	8	
0206	h14		工事立会	普通寺病院電柱設置工事	県教委	10		24	
0204	h14	22	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	4854	弥生中期～後期の堅穴住居・掘立柱建物、古墳時代後期の堅穴住居を確認、扁平紐式銅鐸片、舶載内行花文鏡片出土	24,44	
0504	h15	23	本発掘調査	普通寺病院統合事業	県教委	3616	弥生中期～終末期の堅穴住居72棟をはじめ、掘立柱建物等を多数確認、扁平紐式銅鐸片、舶載内行花文鏡片出土	25,44	

調査番号	年度	調査次数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
0312	h15	24	確認調査	公民館建設	善通寺市教委	70	弥生後期の堅穴住居、古墳時代の包含層を検出	9	
0312-2	h15		工事立会	近畿中国四国農業研究センター下水道建設	県教委	200	弥生後期の堅穴住居、旧河道を検出	25	
0404	h16	25	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3547	弥生後期～終末期の堅穴住居、佛像・中期の掘立柱建物群を検出、縦平継式銅鐸片、船載内行花文鏡片が出土	26,41,44	
0406	h16		工事立会	近畿中国四国農業研究センター電気設備修理	県教委	6	弥生後期堅穴住居 1 棟検出	26	
0804	h20	26	本発掘調査	善通寺義連学校移転整備事業	県教委	3200	弥生中期～終末期の堅穴住居多数、豪華型埴輪に沿線する大溝を検出、鏡片が出土	42,51,52	
0905	h21		確認調査	個人住宅建設	市教委	107.5	弥生後期・古墳後期の包含層を検出	43	弘田川西岸
0911	h21	27	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	840	弥生中期～終末期・古墳後期の堅穴住居、掘立柱建物を検出	47	
1004	h22	28	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3480	弥生中期～終末期・古墳後期、古代の堅穴住居、掘立柱建物、溝を検出	47	
1104	h23	29	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	907	弥生中期～古墳前期の旧河道、古代道路状遺構を検出	46	
1111	h23	30	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	413	飛鳥時代の大規模柱建物を検出	46	
1205	h24	31	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1205	h24	32	本発掘調査	病院駐車場設置	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1206	h24	33	本発掘調査	ガス管新設	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1209	h24	34	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1207	h24	35	本発掘調査	市道幅拡幅	善通寺市教委				
1209	h24	36	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	40	中世の溝を検出	48	
1304	h25	37	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	1009	弥生時代～古代の堅穴住居・溝・柱穴・土坑	50	本書
1304	h25	38	工事立会立会	ガス管更新	善通寺市教委				
1307	h25	39	本発掘調査	市道幅拡幅	善通寺市教委				
1308	h25	40	確認調査	集会場建設	善通寺市教委				
1308	h25	41	本発掘調査	老人ホーム建設	善通寺市教委				
1311	h25		工事立会	下水道建設	善通寺市教委				
1410	h26	42	本発掘調査	県道善通寺託岡線 （善通寺工区道路改修事業）	県教委	112	古墳時代の堅穴住居、古墳時代～中世の溝		
1411	h26	43	本発掘調査	市道	善通寺市教委				
1508	h27	44	本発掘調査		県教委	70			本書
1506	h27		工事立会		県教委				

参考文献

- 尽誠学園史学会 1959「国立病院前庭跡発掘調査概報」「西讃史談」1
- 六車忠一 1956「諸岐弥生式土器集成図録」「文化財協会報」特別号1 香川県文化財保護協会
- 矢原高幸 1973「善通寺市の古代文化」善通寺市
1. 善通寺市教育委員会「仲村廐寺発掘調査報告（旧練兵場跡内）」1984.3
 2. 善通寺市教育委員会「徳ノ宗遺跡～弘川田川河改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～」1985.3
 3. 善通寺市教育委員会「仙遊道路発掘調査報告書 - 旧練兵場遺跡仙遊1地区」1986.3
 4. 善通寺市教育委員会「仲村廐寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書」1989.3
 5. 善通寺市教育委員会「山崩遺跡・徳ノ宗遺跡発掘調査報告書～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～」1999.3
 6. 善通寺市教育委員会「旧練兵場遺跡 - 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2001.1
 7. 善通寺市教育委員会「旧練兵場遺跡 特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2002.3
 8. 善通寺市教育委員会「善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 旧練兵場遺跡」2002.3
 9. 善通寺市教育委員会「善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 旧練兵場遺跡」2004.3
 10. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度」1984.12
 11. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度～昭和62年度」1988.3
 12. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度」1989.3

13. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度」1992.3
14. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度」1993.3
15. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度」1994.3
16. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度」1995.3
17. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度」1996.3
18. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度」1997.3
19. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度」1999.2
20. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度」2000.3
21. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成11年度」2001.3
22. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度」2002.3
23. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成13年度」2003.3
24. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成14年度」2003.11
25. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成15年度」2005.3
26. 香川県教育委員会「香川県埋蔵文化財調査年報 平成16年度」2006.1
27. 香川県教育委員会「香川県文化財年報 平成19年度」2009.2
28. 香川県教育委員会「旧練兵場道路 - 平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告」1994.3
29. 香川県教育委員会「旧練兵場道路Ⅱ - 平成6年度四国農業試験場内発掘調査報告」1995.3
30. 香川県教育委員会「旧練兵場道路Ⅲ - 平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告」1996.3
31. 香川県教育委員会「旧練兵場道路Ⅳ - 平成7年度四国農業試験場内発掘調査報告」1996.3
32. 香川県教育委員会「旧練兵場道路Ⅴ - 平成9年度国立善通寺病院内発掘調査報告」1998.3
33. 香川県教育委員会「広城基幹河川弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 弘田川西岸道路」2008.1
34. 香川県教育委員会「善通寺寺院看守校舎及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 旧練兵場道路Ⅰ」2009.2
35. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場道路発掘調査概報1 平成13年度・平成14年度 上半期の発掘成果概要報告」2003.6
36. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成8年度」1997.5
37. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成9年度」1998.6
38. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成13年度」2002.6
39. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成14年度」2003.6
40. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成15年度」2005.3
41. 香川県埋蔵文化財センター「香川県埋蔵文化財センター年報 平成16年度」2006.10
42. 萩川徹一ほか「平成11年度旧練兵場道路の調査概要について - 善通寺市ふれあいサロン五岳建設工事に伴う発掘調査 - 「善通寺市文化財保護協会報第29号」善通寺市文化財保護協会 2010.3
43. 香川県教育委員会「香川県文化財年報 平成21年度」2012
44. 香川県教育委員会はか「独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場道路Ⅱ」2011.2
45. 香川県教育委員会はか「独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 旧練兵場道路Ⅲ」2013.2
46. 香川県埋蔵文化財センター「香川県埋蔵文化財センター年報 平成23年度」2012.9
47. 香川県教育委員会はか「独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 旧練兵場道路Ⅳ」2014.3
48. 善通寺市教育委員会「善通寺市内道路発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14」2014.3
49. 香川県埋蔵文化財センター「香川県埋蔵文化財センター年報 平成24年度」2013.9
50. 香川県埋蔵文化財センター「香川県埋蔵文化財センター年報 平成25年度」2014.10
51. 香川県埋蔵文化財センター「香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度」2009.8
52. 香川県埋蔵文化財センター「香川県埋蔵文化財センター年報 平成21年度」2010.9

佐藤雅馬 1995「第5章第2節橋井産土器の編年」『国分寺橋井遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18回
2000「第5章第1節高松平野と尾瀬地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4回
告第4冊 信重芳記 2002「第V章第1節小谷窯跡出土須恵器の編年」『小谷窯跡・塚谷古墳』高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
2014「諏訪地域における古墳時代前期の土器編年」『古式土器部の編年の研究』 - 四国島の古墳時代前期の土器様相 -
東灘1987「鉄籠の基礎的研究」『復元考古学研究所所長記念考古学論叢』第12巻企画思原考古学研究所
大阪府近つ飛鳥博物館 2010「鉄とヤマトの櫛』 駒馬古國から百舌鳥・吉古古墳群の時代へ
岡山県教育委員会 1993「穿木堀跡遺跡」前川河川改修工事に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 86
松前町教育委員会 1993「出作道路Ⅰ」出作道路整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書
瀬戸内海歴史民俗資料館 1986「香川県古墳時代鉄器出土土地名表」
国立歴史民俗博物館 1998「自立歴史民俗博物館研究報告」第59集 日本・韓国の中生産技術(調査編2) / 特定研究「日本人の技術と生活に関する歴史的研究 - 在来技術の伝統と継承 -」成果報告書 - 2

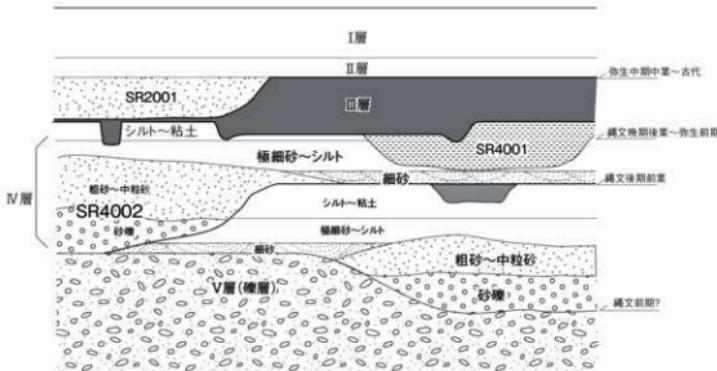
第2章 調査成果

第1節 土層と微地形

(1) 各調査区層序

基本層序については、既刊の「旧練兵場遺跡II」に詳説しているため、ここでは概略のみ記すこととしたい。

- I 層 現代の盛土及び擾乱土
- II 層 中世から近世の耕作土・遺構埋没土（灰色シルト）
SR2001（古代）
- III 層 弥生時代中期から古代の遺構埋没土（黒褐色シルト～粘土）
SR4001（縄文晩期末葉から弥生時代前期末葉）
- IV - 1 層 縄文時代後期～晚期（黄灰色細粒砂～シルト）
SR4002（縄文後期）
- IV - 2 層 縄文前期？～縄文後期（黄褐色粗砂～シルト）
- V 層 砂レキ層



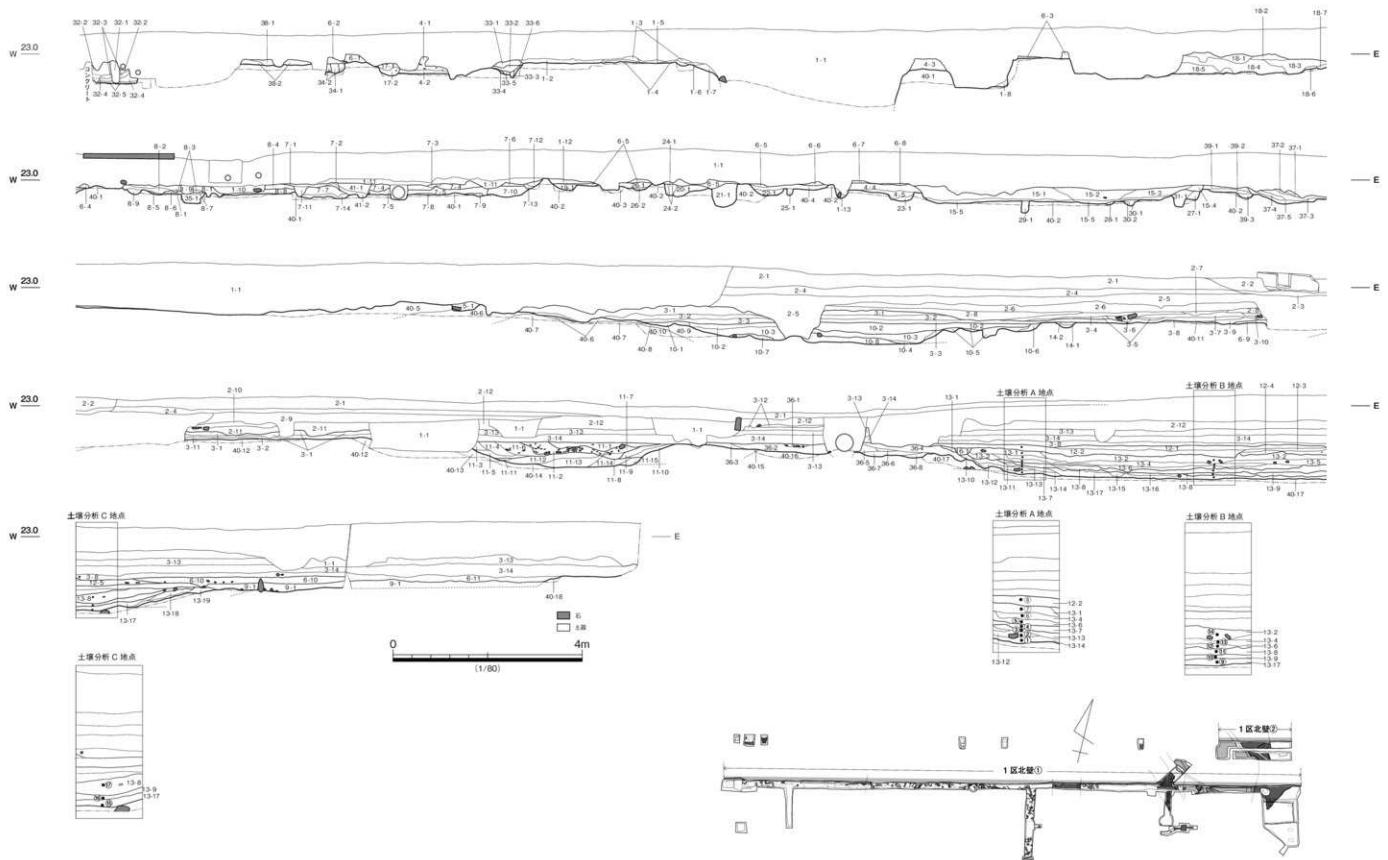
5図 旧練兵場遺跡IV層下位の堆積状況の模式

1区(図6・図7)

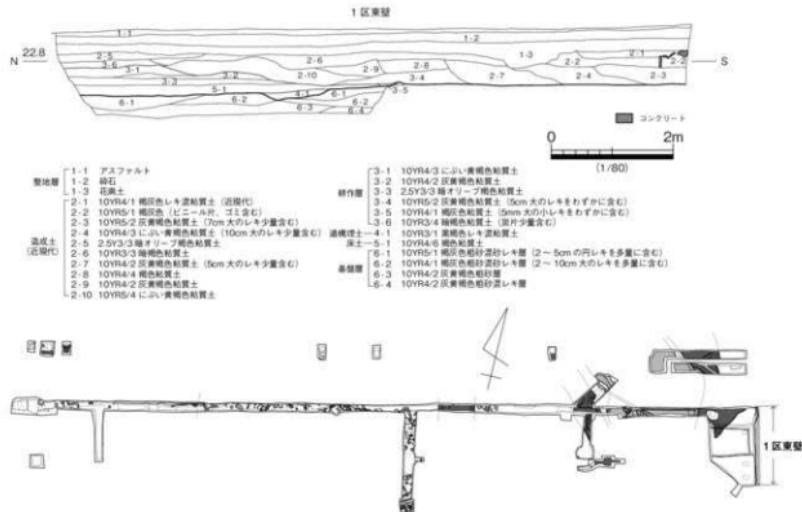
微高地（西側）と低地（東側）の基盤層のアップダウンを反映した層序をとらえている。調査区東側三分の一を占める低地およびその周辺には、中世から近世にかけての厚い包含層（II層）が確認できたが、SR1002西肩標高22.6m付近を境とした西側の微高地上では、東側の低地で確認できた包含層（II層）は削平され一切残存していない。また基盤層V層はSR1002底面の標高22.3mより下で確認でき、SR1003付近より以東は全て基盤層V層のレキ層で占められる。西側には竪穴建物などの住居址（弥生中期後半から後期前半）がみられるが削平の度合いは強い。

	1-1	鳳凰	1-2 10YR5/4 に似る黄褐色地質	1-3 10YR6-1 明黄色地質粘土に 10YR6-1 岩öz色地質がまだらに混る	1-4 10YR5/2 黄褐色地質	1-5 10YR5/2 黄褐色地質	1-6 10YR5/2 及黄褐色地質	1-7 10YR5/1 岩öz色地質に 10YR6-6 明黄色地質がまだらに混る	1-8 10YR5/1 黄褐色地質	1-9 10YR5/1 岩öz色地質	1-10 10YR5/1 黄褐色地質、灰が少し混る	1-11 10YR6-2 黄褐色地質粘土に 10YR6-6 明黄色地質が小ブロックで混る	1-12 10YR6-2 黄褐色地質	1-13 10YR5/1 に似る黄褐色	
復乳	2-1	トナカイ	2-2 現代樹木の基盤	2-3 現代樹木の基盤	2-4 現代樹木の基盤	2-5 現代樹木の基盤	2-6 現代樹木の基盤	2-7 5YS/2 に似る黄褐色地質粘土質 (わずかに 3cm の角けり混む)	2-8 5YS/2 に似る黄褐色地質粘土質 (10cm の角けり混む)	2-9 地盤層	2-10 地盤層	2-11 地盤層	2-12 地盤土	2-13 地盤土	2-14 地盤土
葉地層	3-1	研修生	3-2 土壌	3-3 10YR5/1 岩öz色地質	3-4 5YR4/2 にオーブル色地質 (根鉢が伸びやすいに混む)	3-5 10YR5/3 に似る黄褐色地質	3-6 5YR4/2 にオーブル色地質 (15cm の土を多量に含む)	3-7 5YR4/2 にオーブル色地質 (10cm の角けり混む)	3-8 土壌	3-9 10YR4/4 黄褐色土 (3cm の大のレキ含む)	3-10 10YR4/2 明黄色地質粘土質 (3cm の角けりを多量に含む)	3-11 10YR4/2 黄褐色地質	3-12 研修生	3-13 研修生	3-14 土壌
耕作土	4-1	土壌	4-2 10YR3/2 黄褐色地質土に土鉢が多量に混る	4-3 10YR7/6 明黄色地質粘土に 10YR7/6 岩öz色地質がまだらに混る	4-4 10YR6-2 黄褐色地質	4-5 10YR7/6 岩öz色地質	4-6 10YR7/6 岩öz色地質	4-7 10YR7/6 岩öz色地質	4-8 10YR7/6 岩öz色地質	4-9 10YR4/4 黄褐色地質	4-10 10YR4/2 明黄色地質粘土 (基盤層由来)	4-11 10YR4/2 黄褐色地質	4-12 10YR4/2 黄褐色地質	4-13 10YR4/2 黄褐色地質	4-14 10YR4/2 黄褐色地質
髪穴地層	5-1	土壌	5-2 土壌	5-3 10YR5/1 岩öz色地質	5-4 5YR4/2 にオーブル色地質 (根鉢が伸びやすいに混む)	5-5 10YR5/3 に似る黄褐色地質	5-6 5YR4/1 黄褐色地質	5-7 10YR4/1 黄褐色地質	5-8 10YR5/1 黄褐色地質	5-9 10YR5/3 黄褐色地質	5-10 10YR5/2 黄褐色地質	5-11 10YR5/2 黄褐色地質	5-12 研修生	5-13 研修生	5-14 土壌
髪穴地層	6-1	土壌	6-2 10YR3/3 に似る黄褐色地質に 5~7cm くらいの土塊混る	6-3 10YR5/1 黄褐色地質	6-4 10YR5/3 に似る黄褐色地質	6-5 10YR4/1 黄褐色地質	6-6 10YR4/1 黄褐色地質	6-7 10YR4/1 黄褐色地質	6-8 10YR7/1 黄褐色地質	6-9 10YR5/2 及黄褐色地質	6-10 10YR5/2 及黄褐色地質	6-11 10YR5/2 及黄褐色地質	6-12 10YR5/3 黄褐色地質	6-13 10YR5/3 黄褐色地質	6-14 10YR5/3 黄褐色地質
油蔭地層	7-1	土壌	7-2 10YR4/3 黄褐色地質	7-3 10YR4/3 黄褐色地質	7-4 10YR4/3 黄褐色地質	7-5 10YR5/1 黄褐色地質	7-6 10YR5/1 黄褐色地質	7-7 10YR5/1 黄褐色地質	7-8 10YR5/1 黄褐色地質	7-9 10YR4/2 黄褐色地質粘土に 10YR6-6 明黄色地質がまだらに混る	7-10 10YR4/2 黄褐色地質粘土に 10YR6-6 明黄色地質がまだらに混る	7-11 10YR4/2 黄褐色地質粘土に 10YR6-6 明黄色地質がまだらに混る	7-12 10YR5/1 黄褐色地質	7-13 10YR4/2 黄褐色地質粘土に 10YR6-6 明黄色地質がまだらに混る	7-14 10YR4/2 黄褐色地質粘土に 10YR6-6 明黄色地質がまだらに混る
中苔包含層	8-1	土壌	8-2 土壌	8-3 土壌	8-4 土壌	8-5 土壌	8-6 土壌	8-7 土壌	8-8 土壌	8-9 土壌	8-10 土壌	8-11 土壌	8-12 土壌	8-13 土壌	8-14 土壌
湿土	9-1	土壌	9-2 土壌	9-3 土壌	9-4 土壌	9-5 土壌	9-6 土壌	9-7 土壌	9-8 土壌	9-9 土壌	9-10 土壌	9-11 土壌	9-12 土壌	9-13 土壌	9-14 土壌
SH1003	10-1	土壌	10-2 土壌	10-3 土壌	10-4 土壌	10-5 土壌	10-6 土壌	10-7 土壌	10-8 土壌	10-9 土壌	10-10 土壌	10-11 土壌	10-12 土壌	10-13 土壌	10-14 土壌
脇床	11-1	土壌	11-2 土壌	11-3 土壌	11-4 土壌	11-5 土壌	11-6 土壌	11-7 土壌	11-8 土壌	11-9 土壌	11-10 土壌	11-11 土壌	11-12 土壌	11-13 土壌	11-14 土壌
脇床	12-1	土壌	12-2 土壌	12-3 土壌	12-4 土壌	12-5 土壌	12-6 土壌	12-7 土壌	12-8 土壌	12-9 土壌	12-10 土壌	12-11 土壌	12-12 土壌	12-13 土壌	12-14 土壌
SH1005	13-1	土壌	13-2 土壌	13-3 土壌	13-4 土壌	13-5 土壌	13-6 土壌	13-7 土壌	13-8 土壌	13-9 土壌	13-10 土壌	13-11 土壌	13-12 土壌	13-13 土壌	13-14 土壌
SK1002	14-1	土壌	14-2 土壌	14-3 土壌	14-4 土壌	14-5 土壌	14-6 土壌	14-7 土壌	14-8 土壌	14-9 土壌	14-10 土壌	14-11 土壌	14-12 土壌	14-13 土壌	14-14 土壌
1層	15-1	土壌	15-2 土壌	15-3 土壌	15-4 土壌	15-5 土壌	15-6 土壌	15-7 土壌	15-8 土壌	15-9 土壌	15-10 土壌	15-11 土壌	15-12 土壌	15-13 土壌	15-14 土壌
3層	16-1	土壌	16-2 土壌	16-3 土壌	16-4 土壌	16-5 土壌	16-6 土壌	16-7 土壌	16-8 土壌	16-9 土壌	16-10 土壌	16-11 土壌	16-12 土壌	16-13 土壌	16-14 土壌
SR1002	17-1	土壌	17-2 土壌	17-3 土壌	17-4 土壌	17-5 土壌	17-6 土壌	17-7 土壌	17-8 土壌	17-9 土壌	17-10 土壌	17-11 土壌	17-12 土壌	17-13 土壌	17-14 土壌
3層	18-1	土壌	18-2 土壌	18-3 土壌	18-4 土壌	18-5 土壌	18-6 土壌	18-7 土壌	18-8 土壌	18-9 土壌	18-10 土壌	18-11 土壌	18-12 土壌	18-13 土壌	18-14 土壌
SR1003	19-1	土壌	19-2 土壌	19-3 土壌	19-4 土壌	19-5 土壌	19-6 土壌	19-7 土壌	19-8 土壌	19-9 土壌	19-10 土壌	19-11 土壌	19-12 土壌	19-13 土壌	19-14 土壌
基盤層	20-1	土壌	20-2 土壌	20-3 土壌	20-4 土壌	20-5 土壌	20-6 土壌	20-7 土壌	20-8 土壌	20-9 土壌	20-10 土壌	20-11 土壌	20-12 土壌	20-13 土壌	20-14 土壌

1 区北號①土層斷面圖



6図 1区北壁①断面図



7図 1区東壁断面図

2区①(図8・図9)

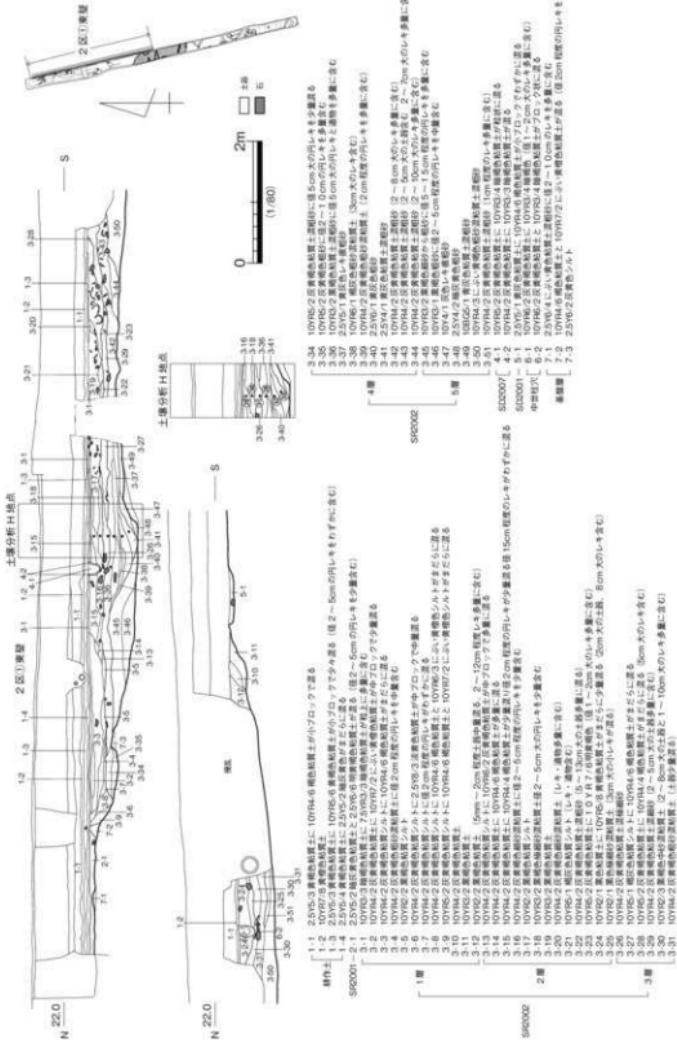
微高地（南側）と低地（北側）の基盤層のアップダウンを反映した層序を捉えている。基盤層IV層の黄色シルト層の北側と南側の比高差は80cmある。南と北での落差が著しく、現地表面の比高差も同様である。基盤層V層のレキ層は標高21.5m以下で確認でき、流路（SR2002）底面でも基盤層V層のレキ層が露出している。弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての流路（SR2002）が調査区の北半分を占め、南側は微高地上を横断するように溝（SD2003・SD2005・SD2006）が開削されている。また流路（SR2002）上面には中世（13世紀以降）の柱穴が数基あり、13世紀頃には流路が完全に平坦化したと考えられる。

2区②(図10～図12)

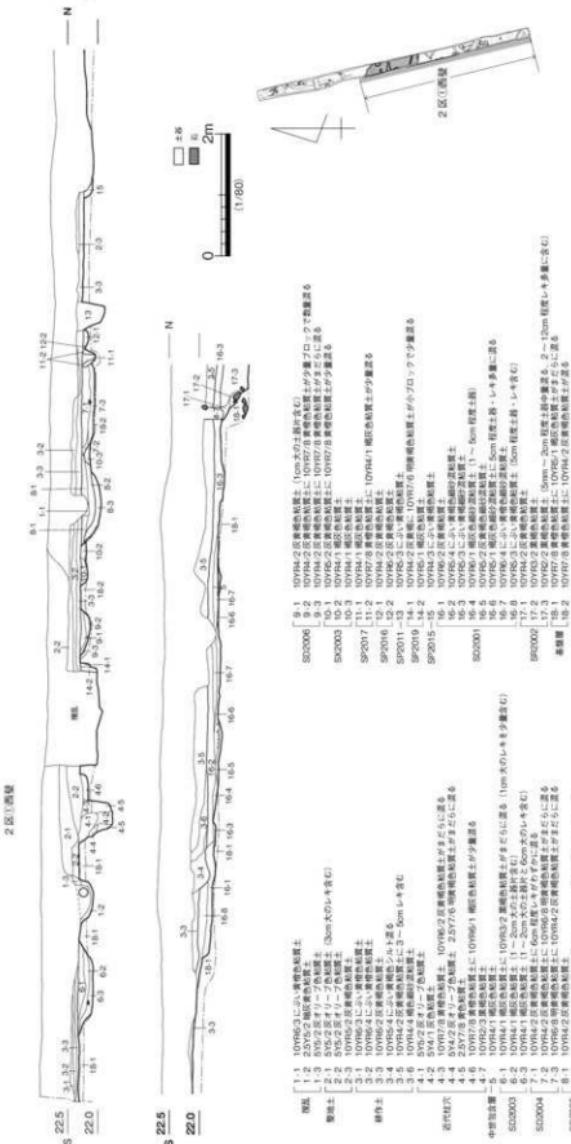
全域が微高地上となる。包含層（II層）は南と北でわずかに確認できる程度で、整地土および攪乱を除去すると、直下で遺構面に到達する場合がほとんどである。弥生時代中期後半から終末期までの掘立柱建物や竪穴建物が多数ある。本調査区は竪穴建物の平面の輪郭は捉えることができるが、埋土は南ほど残存度が低く、南側の竪穴建物の埋土は貼床直上の数cm程度で、北側ほど残存度は高い。微高地⑤を横断するように古墳時代終末期に南西から北東方向へと大溝（SD2017・SD2020）が開削されている。

3区①(図13)

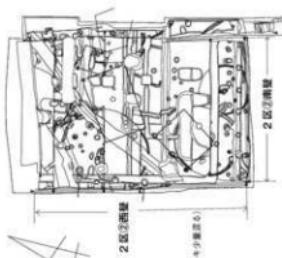
ほぼ全域が攪乱によって破壊されており、II層III層はまったく確認できず、遺構の残存度は極めて低い。ベース面は基盤層IV層が全面に広がる。基盤層IV層が残存する最高所は標高23.6mである。



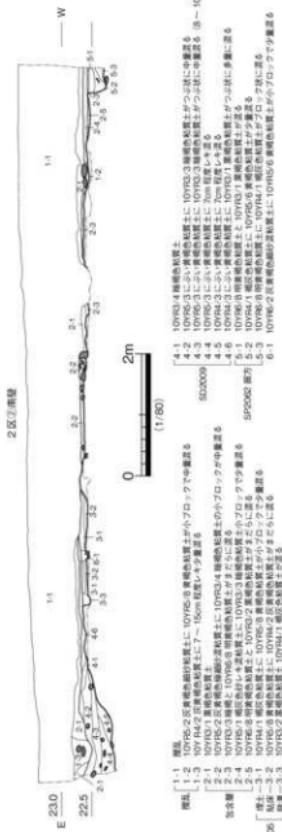
8図 2区①東壁断面図



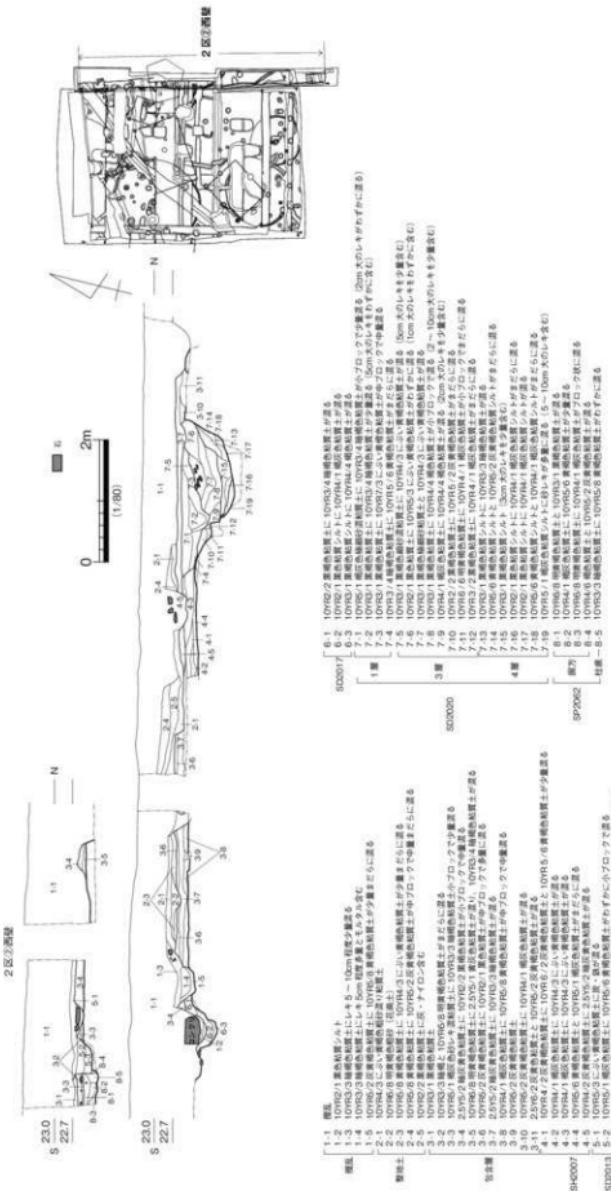
9図 2区①西壁断面図



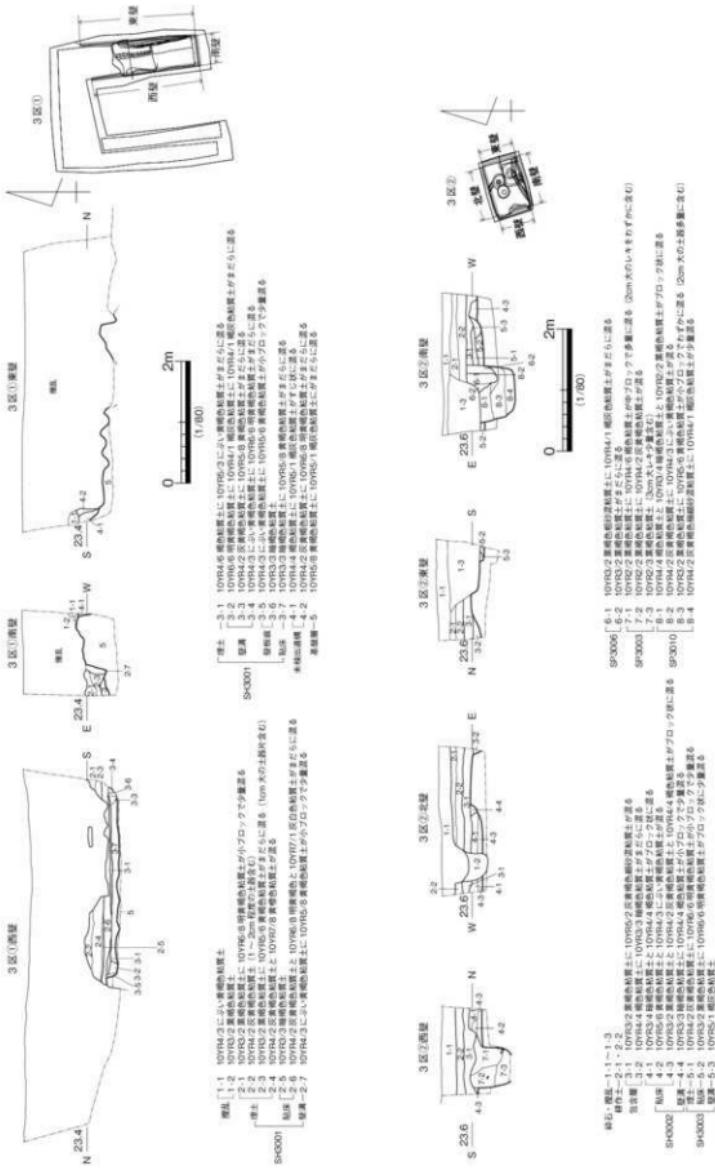
10図 2区②南壁断面図



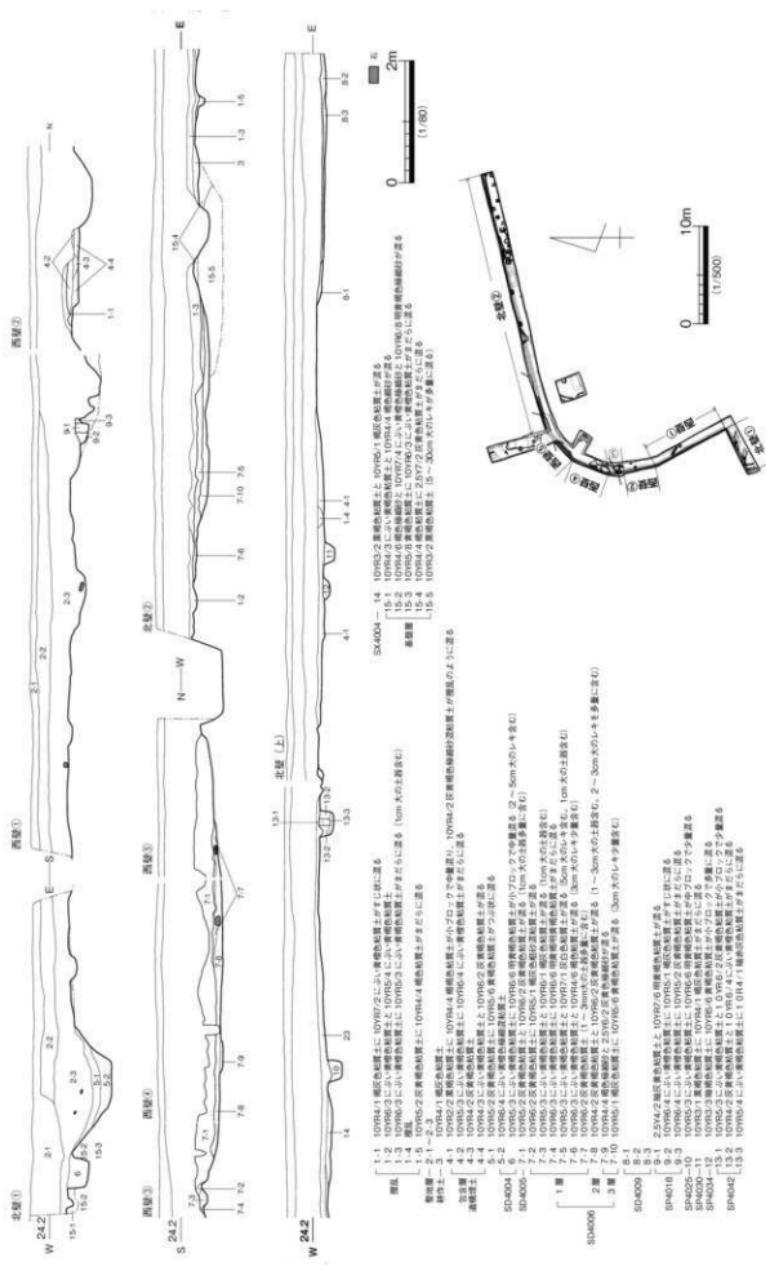
11図 2区②西壁断面図 (1)



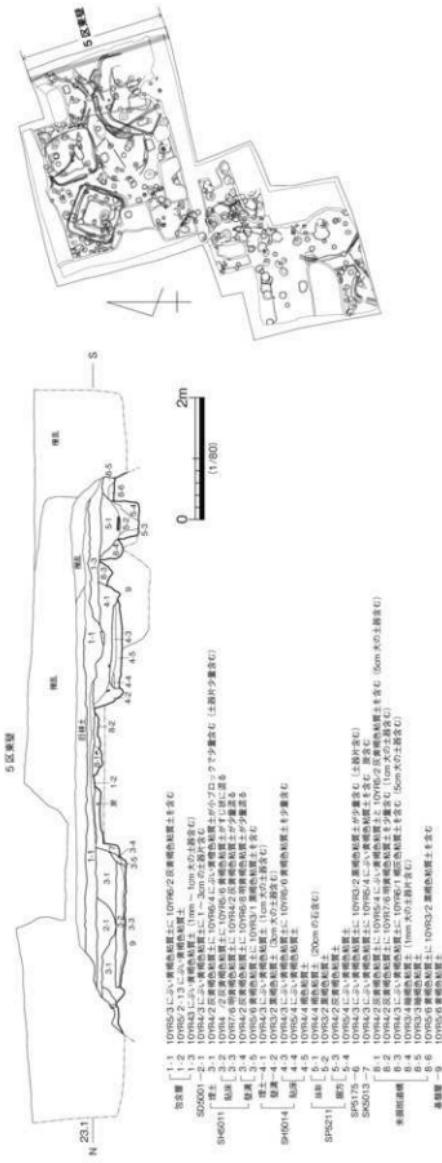
12図 2区②西壁断面図 (2)



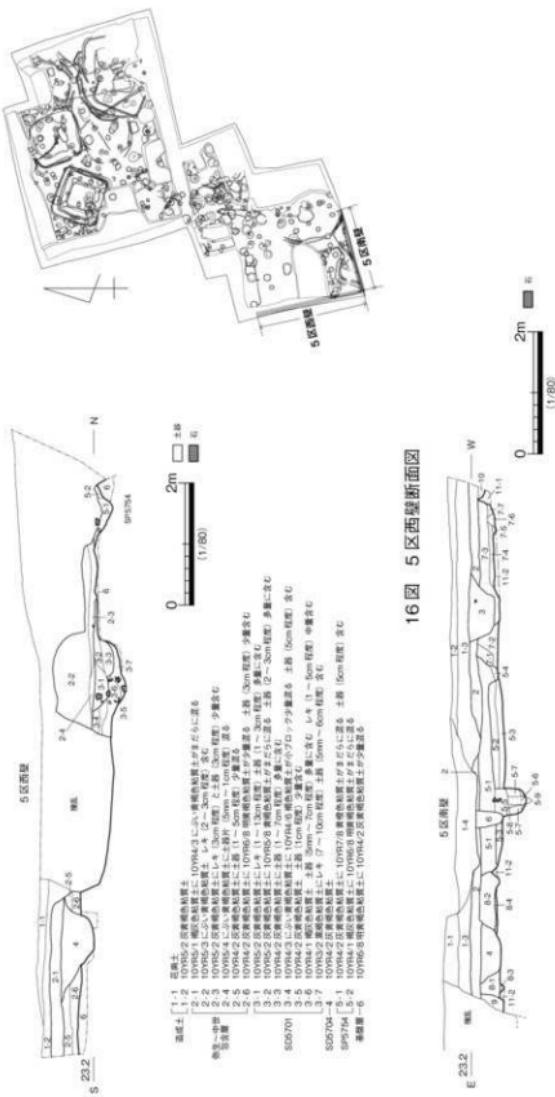
13図 3区断面図



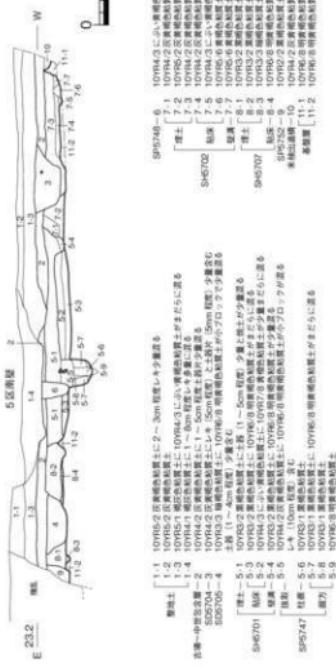
14図 4区①北壁断面図



15図 5区東壁断面図



16図 5区西壁断面図



17図 5区南壁断面図

3区②（図13）

微高地のトップ付近に位置する。微高地上であるがⅡ層が残存し、直下に竪穴建物が確認できる。基盤層Ⅳ層は標高23.6mが最高所である。

4区①（図14）

中央微高地から西へやや下がる緩斜面に位置する。Ⅱ層Ⅲ層はまったく確認できない。調査区東側の柱穴群も遺構深度が浅いものが多いことから、見た目以上の比高差があったものと考えられる。基盤層Ⅳ層の黄色シルトがほぼ全域に広がり、基盤層Ⅴ層は4区中央の擾乱がある箇所にのみ露出している。

5区（図15～図17）

全域が微高地であるものの、中世の包含層（Ⅱ層）およびⅢ層が残存し遺構の残存度は極めて高い。Ⅱ層およびⅢ層の連続が確認できるのは5区と1区の低地部分のみである。また、竪穴建物などの住居址の重複関係は著しく、各所の断面で確認できる基盤層Ⅳ層の高まりはわずかである。

（2）微地形

今回の調査地はこれまでの調査地とは異なり、四国こどもとおとの医療センター（以下、医療センター）敷地東半の一部と南東縁辺部が対象となっている。面的に調査できた2区②と5区以外は細長い調査区が多くたが、連続して断面を観察できる状況であった。また、医療センター敷地外東側において、近年善通寺市によって外構工事に伴うトレレンチ調査（31次）が実施されており、点的な情報が積み重なってきている。そこで本節では『旧練兵場遺跡II』で既にまとめられた西半分を合わせ、微地形の復原と大溝や自然流路の分布状況も確認しておきたい。

微地形の復元

縦横の縮尺を変えた図（18図・19図）の作成では、一定の連続する断面を選択し、さらに過去の調査で得られた情報も合せ作成した。なお各調査区の距離は考慮していない。壁面の記録を作成した部分は深い断割を実施していないが、基盤層Ⅳ層とⅤ層のありかたは、遺構完掘時に平面的に捉えられる基盤層の境界を断面図に反映させ記録し、堆積状況の確認を実施している。本報告ではA地点・B地点の南北方向、C地点・D地点の東西方向の4地点について、Ⅳ層とⅤ層のありかたを確認し微地形の起伏を確認しておきたい。

A地点は医療センター東側の南北方向で、北から4区⑥西壁、31次東壁（反転）、1区東壁（反転）を用いて縦横変倍の断面図を作成した。基盤層は4区⑥南で標高24.4m前後、1区東壁で標高22.1m前後を測り南北の比高差が2mほどある。4区⑥から3区⑤までは傾斜が緩やかであるが、3区②より北の比高差が著しい。

4区⑤西壁の位置する南半分は擾乱土を除去すると、中世の包含層等はほとんど確認できず、Ⅳ層とⅤ層が南から北にかけて交互に露出している状況であった。Ⅳ層がみられる箇所でもほとんどの場合その堆積層は薄く、Ⅴ層が比較的同レベルで連続し、起伏があった上部が削平されている状況を示しているものと考えられる。31次東壁は病院敷地外の南北の市道部分である。そこではⅣ層の堆積は確認できず、Ⅴ層の直上に古代から中世の包含層が確認できる。1区東側でも基盤層Ⅳ層は一切確認できずⅤ

層が遺構面となり、31次東壁と同様な状況を示す。

A 地点における南北方向の層序を確認したが、いずれも V 層が遺構面となっている場合が大半であり、IV 層が露出している部分でもその堆積は薄く、IV 層の数センチ下で V 層が確認できる。以上の整理から、A 地点の南北は基盤層 V 層が厚く堆積し、現在の起伏に影響を与えると考えられる。

B 地点は、看護学校と養護学校間の南北方向で、2 区①東壁（反転）と西壁、14 次壁 1（反転）、2 区②西壁を用いて縦横変倍図を作成した。基盤層の最高所は 2 区②の南で標高 22.7 m、2 区①北で標高 21.5 m を測り、比高差 1.5 m を測る。縦横変倍図（18・19 図）を作成した中で、最も基盤層の比高差が著しい。その比高差も 2 区②の SH2001・SH2006 付近から 2 区① SD2006 間の緩やかな傾斜面と、SD2001 以北との比高差が著しい。

A 地点で確認できた南北の傾斜は、次節で詳述する 20 図で示した図にも表れているように、南から北への中央微高地の傾斜を捉えているものと考えられる。B 地点で確認できた急激な落ちはすぐ北側に自然流路が確認されていることや、20 図で示したコンターラインが密になっていることからも、比高差が著しいことがわかる。

次に東西方向の基本層序の堆積を、C 地点は 25 次 I・2 区・II・1 区南壁断面（反転）、4 区①北壁断面、4 区③北壁断面、42 次北壁を用い、D 地点は 1 区北壁を用いてその堆積状況を確認しておきたい。

C 地点では西端の基盤層の高さが標高 23.8 m 前後を測るのに対し、東端が標高 24.3 m と 50cm ほどの比高差がある。全体的に IV 層が厚く堆積しており、4 区③の SR4001・SR4002 底面の標高約 23 m 付近でも依然 IV 層が確認できる。さらに底面を 30cm ほど掘削したところで砂層の V 層とみられる層に到達する。42 次の調査では V 層に相当する部分は擾乱底の標高 23.3 m においても確認できず、IV 層が厚く堆積している。現状では IV 層上面がほぼフラットとなるようだが、堅穴建物の残存度を確認すると、西側は堅穴建物の壁溝や埋土が確認できるが東端は主柱穴が残存するのみで、東側の遺構ほど削平の度合いが高い。数値以上に東と西の比高差があり、東がより高い微高地であったと考えられる。

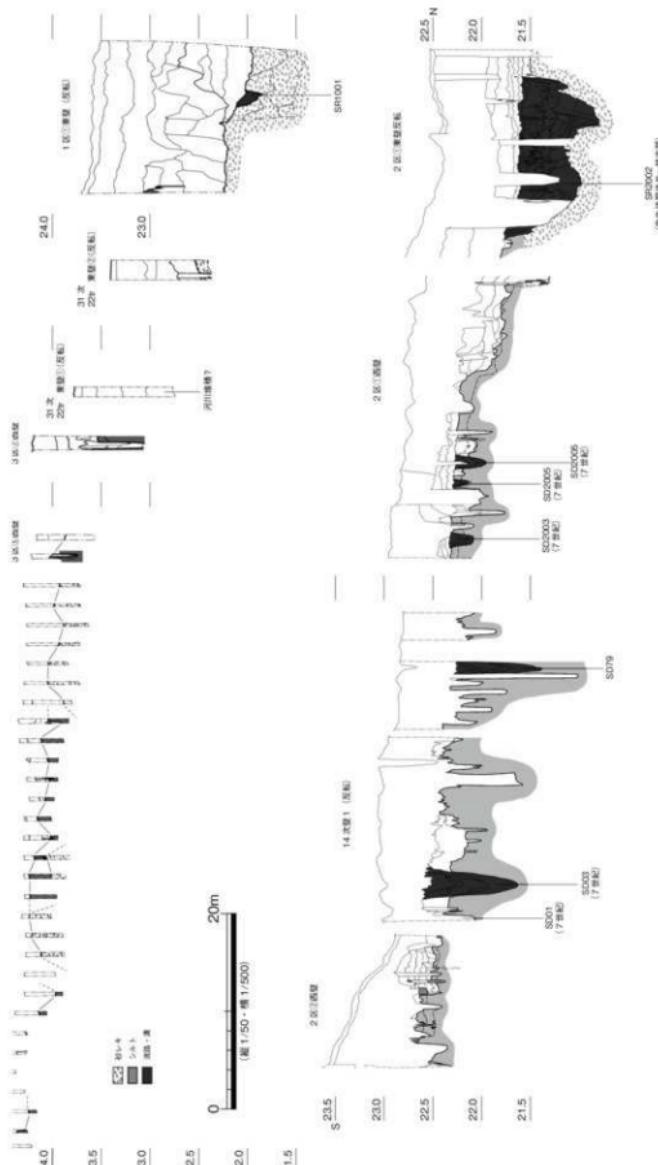
D 地点では調査区西端の基盤層上面は標高 22.8 m 前後を測るのに対し、東端は標高 22.1 m と 70cm ほどの比高差となり、基盤層のレベルは西が高く、東が低い状況が確認できる。IV 層は調査区西端から SR1002 周辺まで堆積している状況を確認できるが、基盤層のレベルが下がるに従い IV 層が薄くなり V 層が SR1003 周辺で完全に露出し、部分的に流路①の周囲にのみ IV 層が確認できる。SR1002 が位置する標高 22 m 前後を境にして IV 層と V 層の境があるようだ。包含層（II 層）は東側の低地部分でのみ確認でき、東端の流路①から SR1002 付近まで II 層の水平堆積が確認できる。しかし、それより以西は東で確認できる II 層の上面がほぼ基盤層の高さになり、対応する層は確認できず、ほぼ削平されたものと考えられる。以上の整理より東は地形的に元来低く削平をほとんど受けなかつたため包含層（II 層）が分厚く残存する状況にあり、SR1002 より以西は数値以上に高い微高地であったと考えられる。

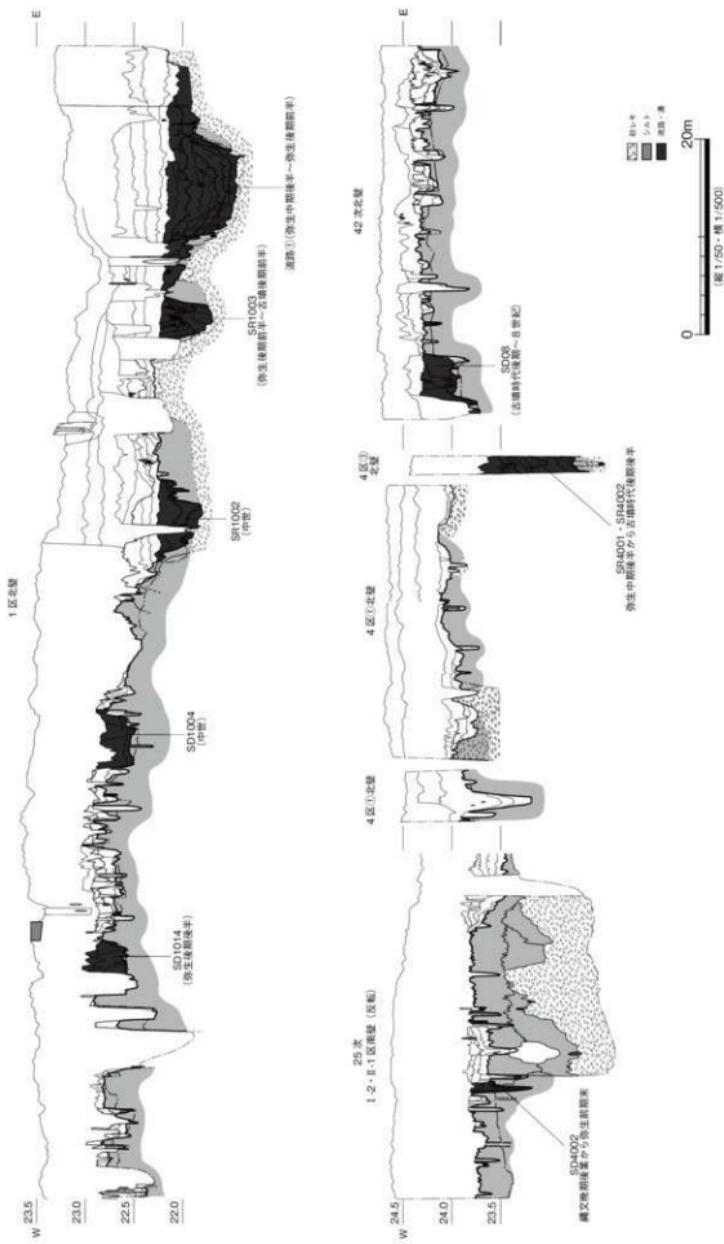
C 地点・D 地点での東西方向の堆積状況を確認したが、それぞれ微高地のトップが C 地点は東側、D 地点は西側によっていることが確認でき、また数値以上に比高差のある地形であったことがうかがえる。

旧地形の等高線（20 図・21 図）

前項では断面図より微地形の検討を行った。次に断面図（18 図・19 図）から読み取れた基盤層の高低差がどの様な微地形を反映しているかを、旧地形を復元した 20 図を基に確認しておきたい。旧地形の等高線を作成する手順として、基盤層 IV 層の上面に成立している遺構上場の標高（最高所）を集成

18図 A地点・B地点縦横剖面図





19図 C地点・D地点 縦横変倍図

し、平面図にプロットした。集成の留意点として、地形改変が著しい遺構の重複しているものを除き、また攪乱によって遺構が破壊されておらず、遺構上位に包含層が残存している遺構を基準とした。作成した医療センター周辺の基盤層の等高線図は、Cubic 社の「遺構くん 2015」を用いて等高線の計曲線を 50cm、主曲線を 10cm に設定し自動作成し、さらに修正を加えている。また、医療センター敷地南東部分は調査事例がほとんどなく、データ不足は否めないが、南東範囲以外については一定量の情報を集めることができ、現時点での復元根拠としては十分であると考えている。

等高線によって現れた微地形のまとまりに名称を付加し、報文中でも引用する。南東から派生する緩やか微高地を「中央微高地」、SR02 の流下によって区分されているようにみえる微高地を南から「微高地①」「微高地②」「微高地③」「微高地④」とし、中央微高地北西部の狭まる範囲を「微高地⑤」、北東側の低地部分を「東側低地」と区分しておきたい（21 図）。

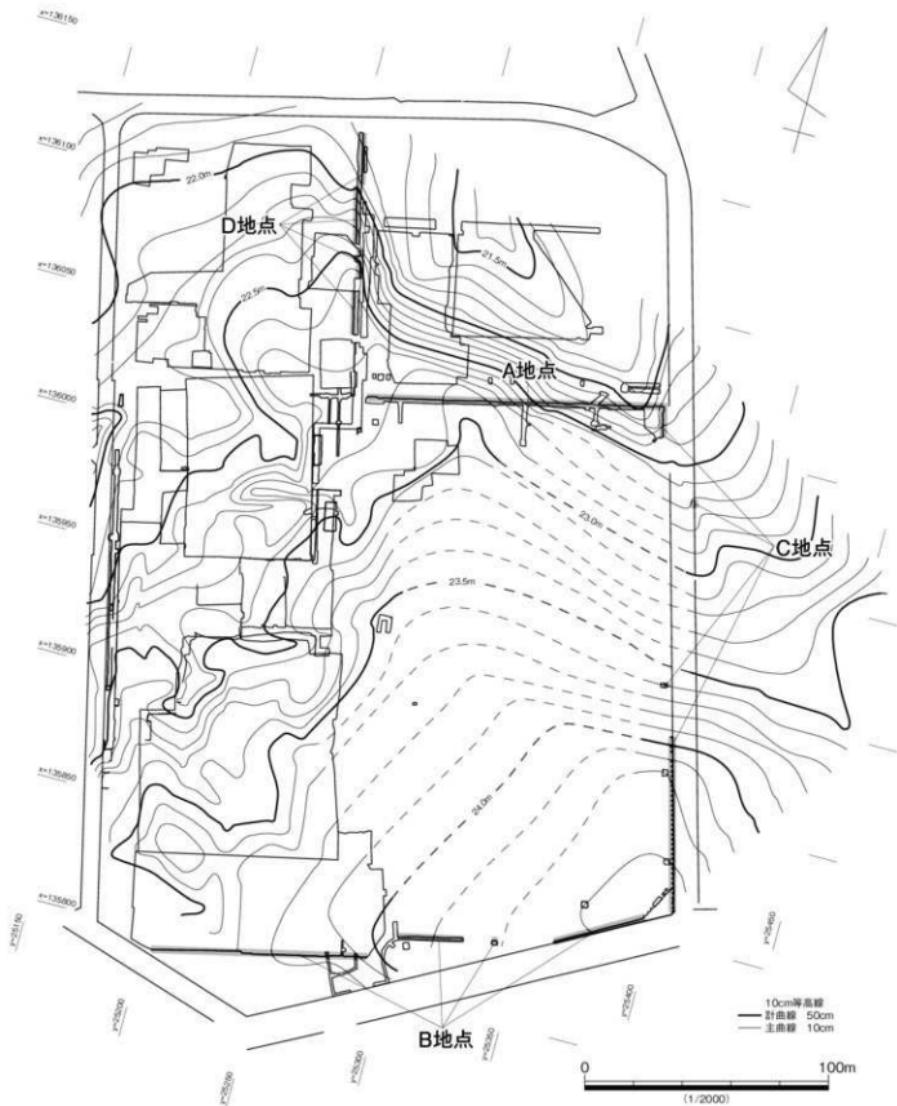
作成した等高線図をみると、大きくは南東隅の県道拡幅部分の調査個所（42 次）を最高所として北西方向を指向する尾根状の地形が読み取れる。これは既に『旧練兵場遺跡 V』によって確認されている金田章裕氏が指摘した微高地に相当すると考えられる。医療センター南東部分は復元の根拠となる標高点がないことから等高線の凹凸がゆるやかであるが、大局は変わりないものと考えられる。また標高 225 m を境に各所でみられた広い等高線の間隔が急に狭まる様子が北東部分でみられた。これは、縦横変倍図でみられた急激な落ちや 1 区で確認できた包含層 II 層の残存範囲の境界ともほぼ対応する位置関係にある。また医療センター敷地内西側である『旧練兵場遺跡 II～VI』の範囲は有意な標高点が多くあり、微地形の起伏を明瞭に表している。既往調査地のほとんどは遺跡全体で俯瞰すると、中央微高地より低い西側緩斜面に位置していることが確認できる。

次にこれまでに調査された弥生時代前期から古墳時代前期までの自然流路や大溝の分布状況（21 図）を確認しておきたい。『旧練兵場遺跡 II～VI』で報告されている SR02 は、南東から張り出した中央微高地を避け、細かな微凹地を蛇行している。微凹地は流路によって削られた結果と考えられる。同様に東側低地を、一連の流路である流路①と『旧練兵場遺跡 I』SR01 が南東の谷状地形から、北東方向を目指し等高線の湾曲に沿って流下していることがわかる。

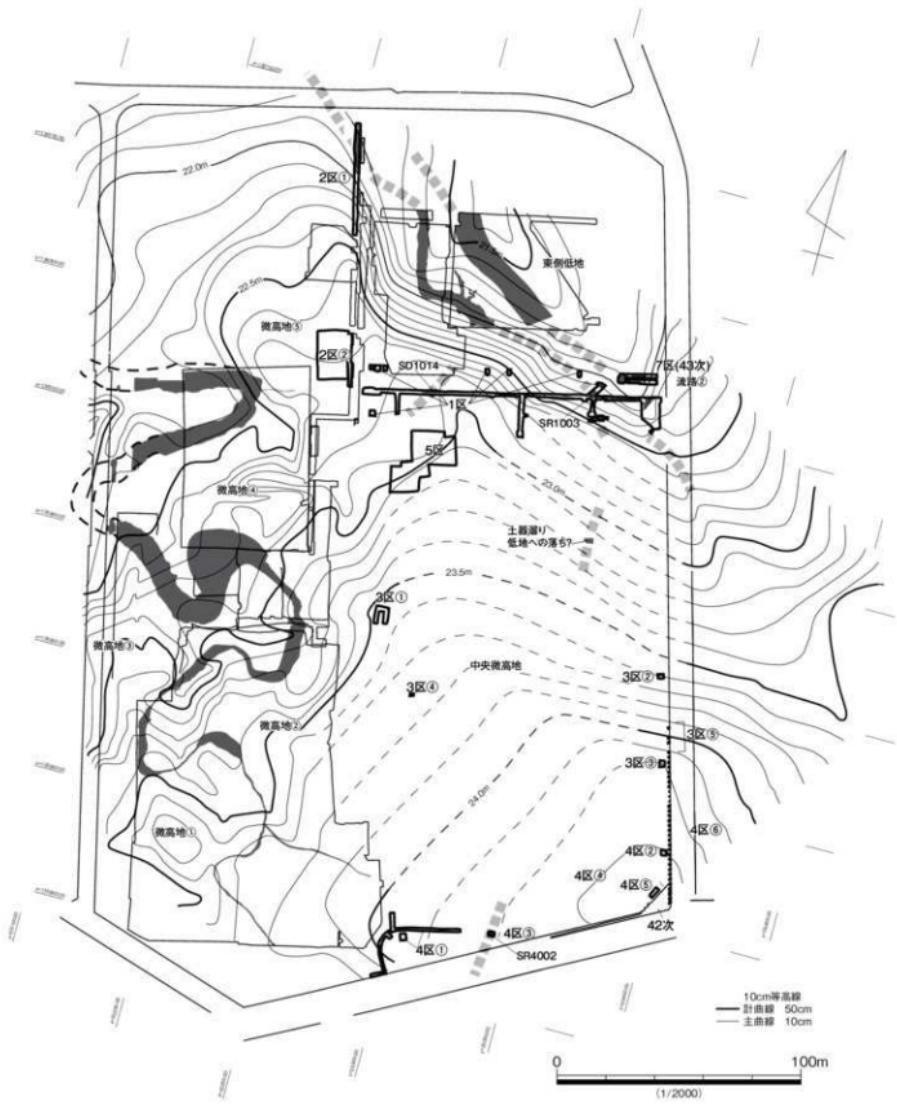
弥生時代から古墳時代前期の大溝に限定すると、今回の調査地では 1 区 SD1014、1 区 SR1003、4 区③ SR4001・SR4002、既往調査では 92 年の工事立会検出落ち、『旧練兵場遺跡 I』SD56 がある。南に位置する大溝から確認しておく。SR4001・SR4002 は中央微高地トップから西へやや下った場所に位置することがわかる。大溝底面の形状や断面観察より南西から北東方向へと進路をとることが予想される。また大溝の機能として、弘田川から取水して水を配する灌漑用水路の可能性もあるが、中央微高地の実態や大溝の接続先など課題が残り、現状では断言できない。機能していた時期は、SR4002 の弥生時代中期後半から SR4001 の古墳時代後期の長期間開放状態にあったものと考えられる。

92 年の工事立会で検出された土器溜は、中央微高地東側を等高線に直交した方向で検出されている。この落ちが流路か大溝であるか現状で判断できないが、地形の観察からは大溝の可能性も残される。機能していた時期は弥生終末期から古墳時代後期と推測される。

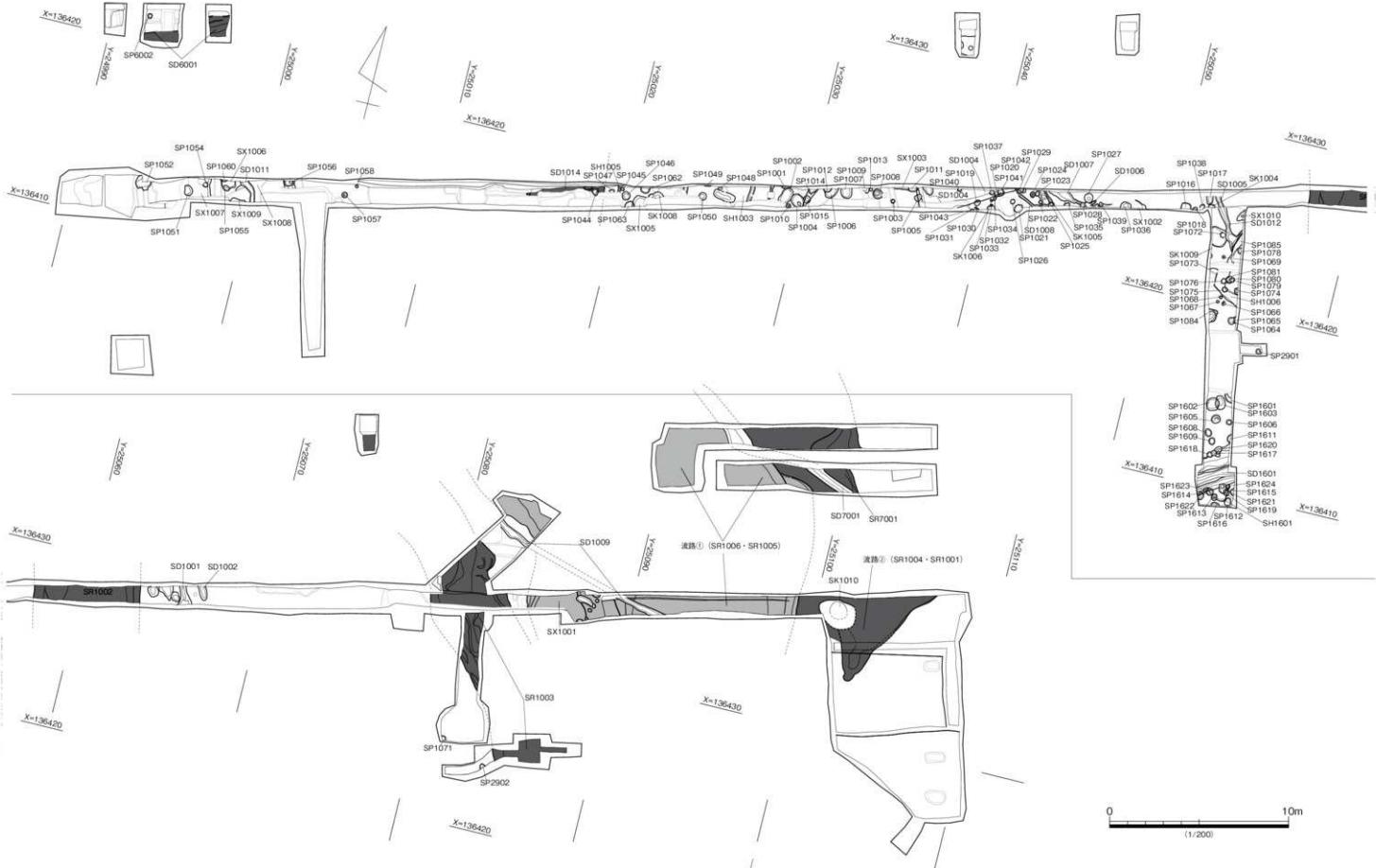
1 区東側で検出した SD1014 は、中央微高地の傾斜がやや緩やかになる傾斜変換部分に位置し、南に位置する 5 区では検出していないことから、北東から南西を指向しているものと推測される。出土遺物より弥生後期後半には埋没したものと考えられる。1 区 SR1003・『旧練兵場遺跡 I』SD56 の一連の遺構は、中央微高地から東側低地へ至る傾斜変換点に位置する。また南への週上がどのようなルートにあったか



20図 等高線図



21 図 微地形復原図



22図 1区全体図

は判断できないが、流路①と同様か、微高地を横断するようなルートの二つが考えられる。この大溝は弥生後期前半から古墳時代後期後半までの遺物が確認されており、長期間開放状態にあったものと考えられる。

地形に制約された自然流路と微高地を無視する大溝の分布について確認した。弥生後期にも一部大溝は確認できたが、自然流路のSR01『旧練兵場遺跡Ⅰ』の埋没とSR1003・SR4001・『旧練兵場遺跡Ⅱ』SD56の開削がほぼ同一時期であることは非常に興味深い。大溝の開削が自然流路の埋没によって、水の確保に迫られた可能性があるだろう。どの場所に水を使用していたかは旧練兵場遺跡内では分からぬいが、『旧練兵場遺跡Ⅲ』でも推測されている北方の甲山北遺跡周辺に水田城が想定されており、旧練兵場遺跡北側の調査に期待が寄せられる。

第2節 1区の調査

外構工事に合わせ調査区と調査期間を設定した。そのため調査区が細分化され煩雑になったことから、報告ではまとめて1区として報告している。調査時と報告時の調査区対応関係については4図と表2を参照していただきたい。

外構工事の平面プランに合わせ、東西約130m、幅約15mの調査区を設定し、南北にそれぞれ延伸する4ヶ所と、遺構面に達すると判断された構造物基礎範囲7ヶ所の計12ヶ所について調査を実施した。

調査区東側の東側低地は中世の包含層が確認でき、遺構の残存度も良好であったが、それ以外は著しい擾乱により遺構はほとんど削平されている。第1章第1節でも述べたが、基盤層IV層およびV層は西が高く東が低いことに起因して、西側の微高地上が強い削平を受け、中世包含層がほとんど削平されたと考えられる。

本調査区は西側を微高地、東側は低地と地形は明瞭に区分される。狭長な調査区であったが、微高地上では住居址が確認でき、低地には自然流路および大溝の流下を確認した。以下時期別にまとめる。

a. 弥生時代から古墳時代前期

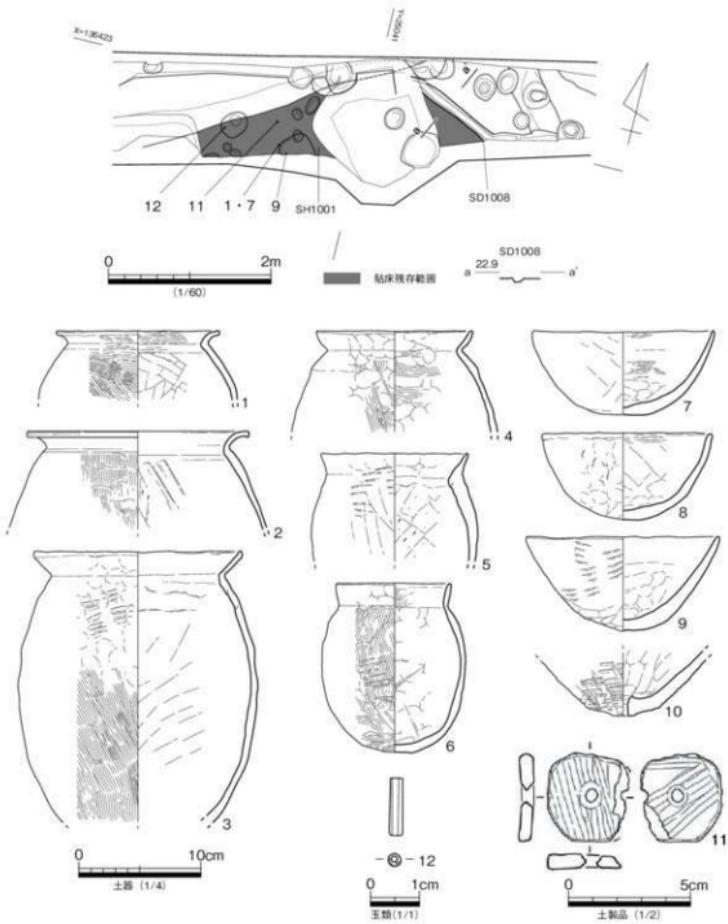
1) 壺穴住居

SH1001 (23図)

遺構1区中央で検出した壺穴建物である。SD1008を壁溝と判断し、貼床と考えられる層位の直上から土器・土製品(6・9・11・12)が出土している状況(写真図版2)をふまえ、壺穴建物と判断した。当初SD1008は北から東へ屈曲するL字の溝と調査時には判断していたが、南北方向の溝の深度(約5cm)と東西方向の溝の深度(約20cm)と大きく異なることから、壁溝と溝状遺構の重複関係と整理段階で判断した。擾乱やSD1014に大部分を破壊されており、規模や平面プランは不明である。壁溝が直線を呈することから平面プランは方形の可能性がある。

土器 出土土器・土製品には甕(1~6)、鉢(7~9)、瓶(10)、紡錘車(11)、管玉(12)がある。3の甕は、胴部がやや寸胴形を呈し口縁部は斜め上方に立ち上がる。4の甕もほぼ同形を呈する。3・4両資料とも、胴部上位から口縁部にかけての指押さえが顯著で、器壁表面の凹凸が著しい。5の甕は胴部が非常に硬く焼き締まっている。7の鉢は真上から見た平面形が鈍角気味の三角形を呈する。11は甕などの胴部を転用した紡錘車である。12は碧玉製の管玉である。

時期 3・6の寸胴形を呈する胴部や口縁部の特徴から、弥生時代終末期新相の時期に廃絶したもの

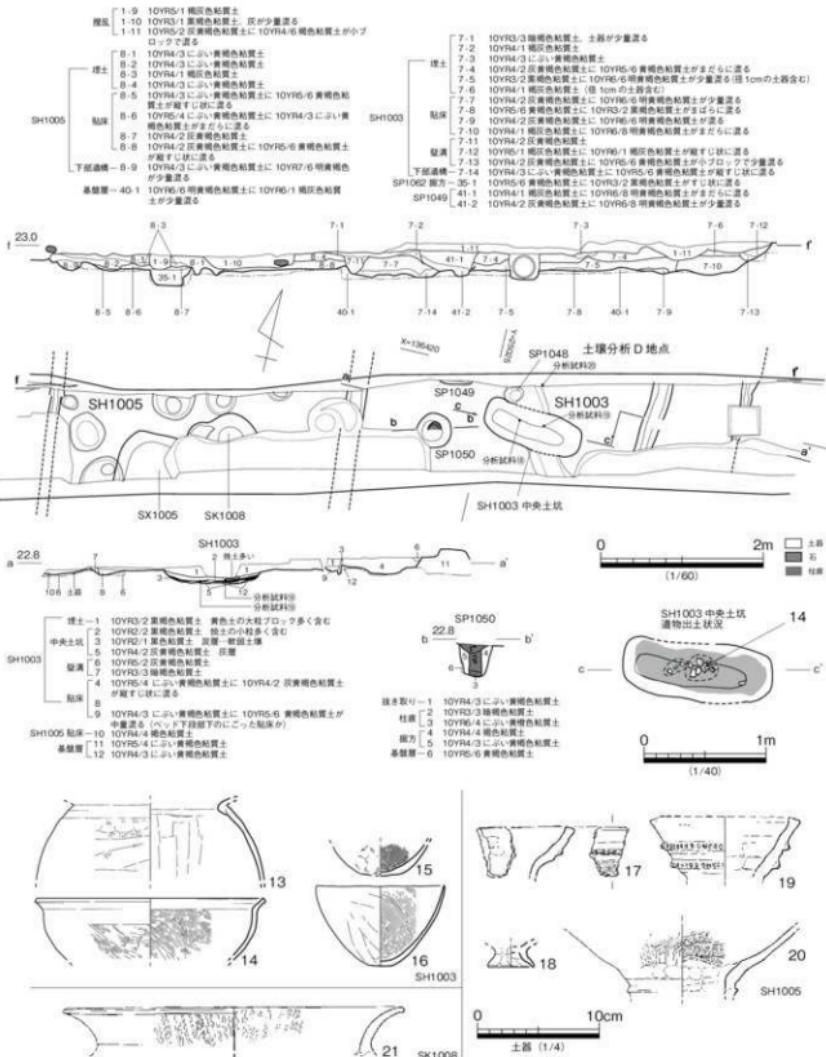


23図 1区 SH1001 平断面図・出土遺物実測図

と考えられる。

SH1005・SX1005 (24図)

遺構 1区西側で検出した竪穴建物である。遺構の重複関係は SK1008 と SH1003 に先行し、東側は SH1003 によって破壊され残存していない。西側の壁溝と貼床を確認したことから竪穴建物と判断した。また SX1005 は SH1005 の埋土上層を掘削後に検出したことから、SH1005 の貼床が施されていない範囲の埋土と判断した。



24図 1区 SH1003・SH1005 平面図・出土遺物実測図

直線的なベッド状遺構の形状から平面プラン方形の堅穴建物と判断できるが、全体規模・主柱穴は不明である。

遺物 出土した遺物は、長頸壺（17・19）、製塙土器（18）、高杯（20）がある。17・19の長頸壺は、17は突帯一段、19は突帯二段でどちらも突帯に刻目が施される。両資料も中期後半古段階に位置づけられる。20の高杯は、脚柱部に断面三角形の突帯がめぐり、内面には粘土円盤が剥離した痕跡を確認できる。18の製塙土器は、脚部は小さく薄手の作りである。備讃IV式に位置づけられる。また、本堅穴建物を切り込んでいるSK1008からは古墳時代前期前半の二重口縁壺（21）が出土している。

時期 17から20の土器群と18の製塙土器とは時期に隔たりがある。18の製塙土器はSK1008から出土した二重口縁壺（21）の時期に近く、床面近くまで削平を受けていることを考慮すると、混入の可能性が高い。埋土下層の17・19の長頸壺の特徴から弥生時代中期後半古相に廃絶したものと考えたい。

SH1003（24図）

遺構 1区中央で検出した一辺4.8m、平面プラン方形の堅穴建物である。遺構の重複関係はSH1005（弥生時代中期後半古相）より後出する。堅穴建物の埋土は貼床上面から検出レベルまで単層である。

中央には長さ1.3m、幅50cm、深さ20cmの平面形隅丸長方形の中央土坑を配し、中央土坑の周囲60cmほどは貼床が施されず、それより外側の東と西には厚さ25cmほどのベッド状に一段高い貼床を確認した。中央土坑西側のSP1050は埋土上面では検出されず、埋土を掘削した後に貼床上面で検出していることから、SH1003の主柱穴と判断した。またその配置状況から主柱穴4基で構成されるものと考えられる。

中央土坑は下層に炭化物層が、上層は貼床直上から連続する埋土を確認した。また下層の直上には鉢（14）が割れた状態で出土している。

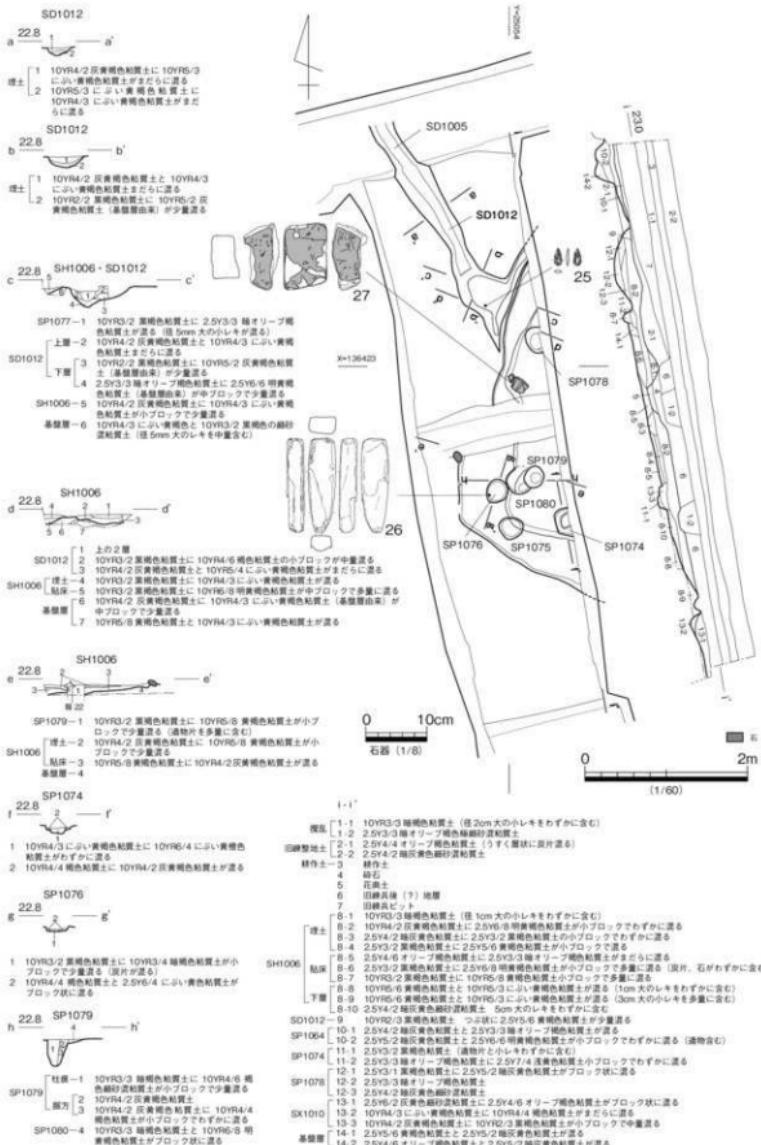
土器 出土遺物は甕（13）、鉢（14～16）がある。13の甕は、やや丸みのある胴部を呈する。14の鉢は、口縁端部が外反し、底部は欠損しているが浅鉢になると考えられる。15・16は小型の鉢である。15は乾燥の際の亀裂がみられる。

時期 遺物は中央土坑内からがほとんどで、埋土からは16の鉢のみである。中央土坑の炭層直上から出土した13・14より弥生時代後期後半新相に廃絶したものと考えたい。

SH1006、SD1005・SD1012（25図・26図）

遺構 1区中央で検出した平面プラン方形の堅穴建物である。堅穴建物の貼床上面まで削平を受けており、壁溝は北側に残存するのみである。狭小な調査区であったことから、検出できたのは堅穴建物の一部分のみで、規模など詳細については不明な点が多い。建物内部は西側と南側に厚さ10cmほどの一段高い貼床をもつ。また北側の壁溝に直交して接続する溝（SD1005・SD1012）があり、調査区北側へと延びる。検出時と断面観察より、壁溝と溝（SD1005・SD1012）の重複関係はみられず、黒褐色粘質土で同時に埋没したと判断した。この溝は底面が南から北へと緩やかに下降することから、SH1006に伴う屋外排水溝と考えられる。堅穴建物の屋外排水溝とするならば、周堤との関係を考慮しなければならないが、溝の埋土中には周堤の存在を示す崩落土等の層位はまったく確認できなかった。旧練兵場遺跡内では、堅穴建物に屋外排水溝が存在するものは、管見による限りない。

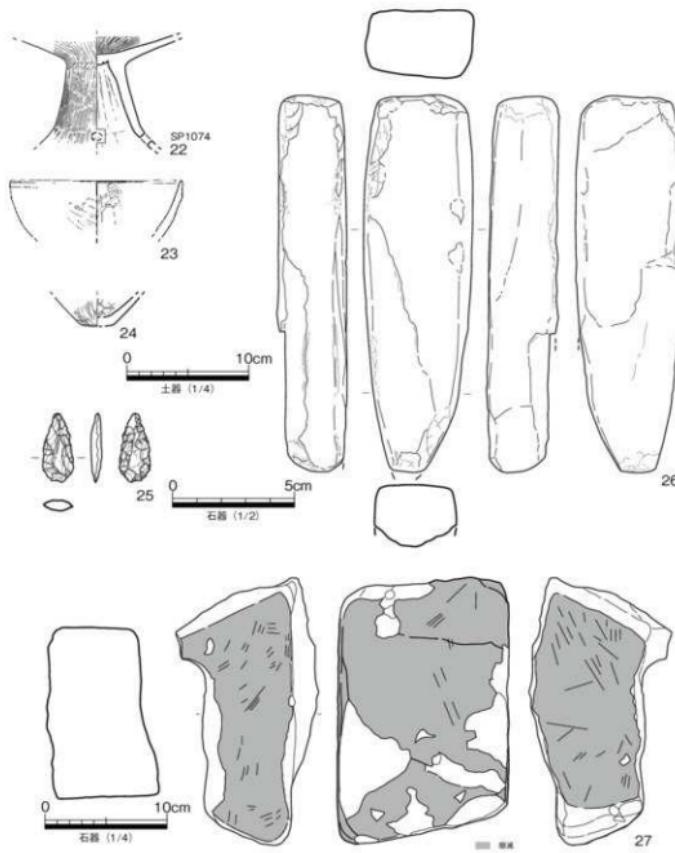
土器 出土遺物は、高杯（22）、鉢（23）、底部（24）、石鎌（25）、石斧（26）、台石（27）がある。



25図 1区 SH1006 平面断面図・出土遺物実測図

22の高杯は、SH1005の埋土上面から切り込む柱穴SP1074から出土しており、SH1005の上限年代を示す土器である。杯部底面は粘土円盤で充填され、脚部には円形のスカシが穿孔されている。23は鉢で、口縁端部はわずかに内湾する。26の結晶片岩製砥石は、長軸の一端が細くなる。27の台石は、堅穴建物の西側の貼床に食込む形で検出している。27の台石展開図の右から2番目を上にして置かれていた。

時期 貼床直上から出土した23の鉢より弥生後期後半新相に廃絶し、SP1074もほぼ同時期の所産と考えられることから、廃絶した後にさほど期間をあけずにSP1074が掘削されたものと考えられる。



26図 1区 SH1006出土遺物実測図

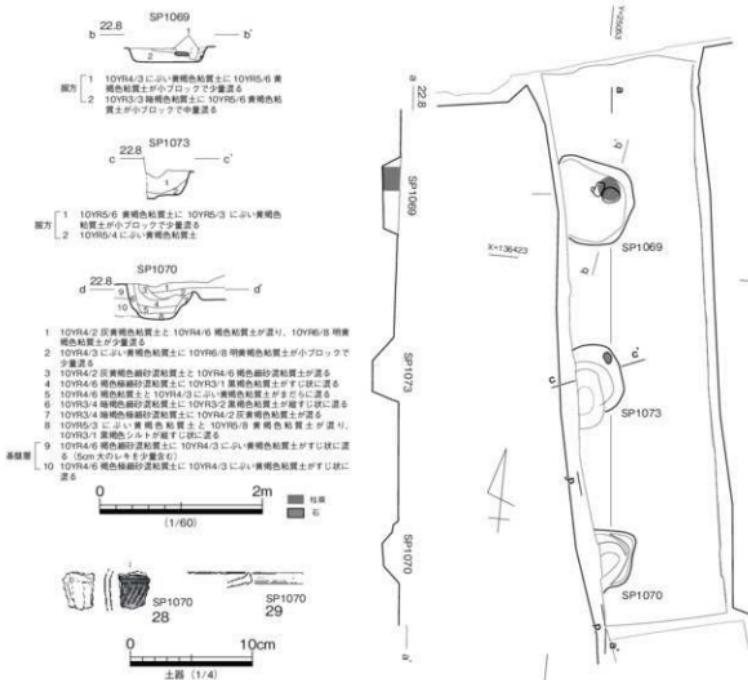
2) 掘立柱建物

SB1002 (27図)

遺構 1区東で検出した掘立柱建物である。SP1069・SP1076・SP1070の3基を確認している。建物の主軸はN6°Wである。遺構の重複関係はSH1006の屋外排水溝(SD1012)に先行する。柱痕を確認できたSP1069は柱底下部に亜円レキを2個設置しており高さ調整もしくは不沈防止の礎盤石とみられる。検出した柱穴3基の掘方埋土は、基盤層に由来する黄色シルトが主体となり、ベース面との区別が困難であった。本遺跡で検出されている弥生時代の掘立柱建物は、1間×2間や1間×3間になるもののが多数を占めることから、この柱穴列は掘立柱建物の桁行を検出している可能性がある。柱穴列の北は連続する柱穴ではなく、また南は擾乱が及んでおり桁行の規模は確定ではない。

土器 出土遺物は壺(28)、甕(29)があり、両者とも細片資料である。28の広口壺は、頭部にハケ原体による列点文が施される。29の甕は、口縁端部をわずかに上方に抜張している。

時期 報告遺物以外も細片が多いが、すべて薄手の作りである。28・29の特徴から弥生中期後半新相には廃絶したものと考えられる。



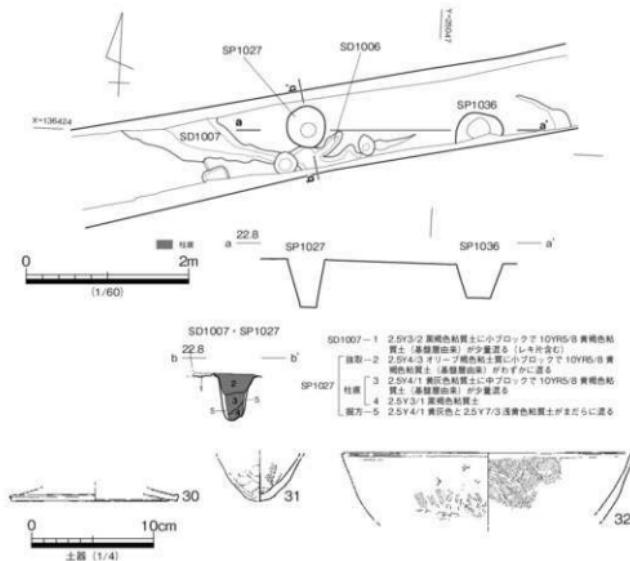
27図 1区 SB1002 平面面図・出土遺物実測図

SB1003 (28図)

1区東で検出した柱穴列である。SP1027・SP1036の2基を確認している。2基の柱穴は、検出面からの深さや掘方埋土が共通しており、同一建物の柱穴と考えられる。柱間は2.1mである。柱穴は直径40cm、深さ60cmを測る。主軸はほぼ真北のN3°Eである。遺構の重複関係はSX1002より後とする。

土器 出土遺物は高杯(30)、鉢(31・32)がある。30の弥生土器高杯は、脚端部を上方にわずかに突出させる。32の鉢は、外面ともにハケ目が施され、外面には乾燥時のヒビがはいる。

時期 出土遺物は弥生時代後期後半新相から終末期初頭の遺物と考えられるが、重複関係にあるSX1002が後期後半となることから、柱穴内の出土遺物の大部分は混入の可能性があり築造時期を示さない可能性がある。再度柱穴出土遺物を精査したが、上記より新しく位置づけられる遺物はみられない。以上のことと踏まえ、主軸方位が条里型地割に規制されず、また柱穴埋土に中世の遺構に見られる灰褐色系の埋土がみられることから下限を古代(8世紀)、上限をSX1002の弥生時代終末期新相以降とし、詳細な時期については今後の調査の課題としたい。



28図 1区 SB1003 平面図・出土遺物実測図

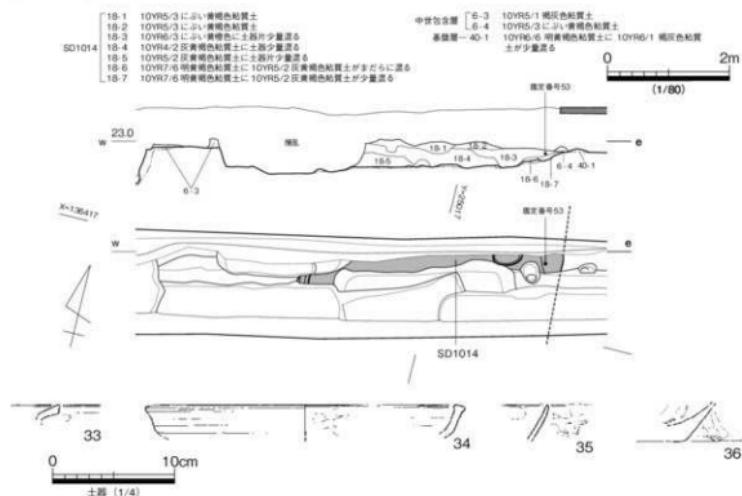
SD1014 (29図)

遺構 1区西側で検出した南北方向の溝状の落ち込みである。西側の大部分は擾乱により破壊されており平面で検出できた範囲はわずかである。断面形状は東肩から緩やかに底面にいたり、皿状を呈する。規模は深さ50cm、幅は東肩の断面形状を基準にして西半分に反映させると、幅5m～6mと推定される。埋土は上層と下層の2層にあり、下層は基盤層IV層由来の黄色シルトが混じり、上層は単層で

ある。大溝の可能性を考え、流水などの機能時の堆積層の確認を、調査時に断面等で検討したが明確なラミナ状の堆積は確認できていない。

土器 出土遺物は壺(33)、高杯(34)、鉢(35)、底部(36)がある。34の高杯は、箱型の杯部に、口縁端部は内外面にやや突出させる。35の底部は、やや厚手で、内面と外面の一部にハケ目が施される。鑑定番号53はイノシシ骨の歯牙である。

時期 調査区の狭小から出土遺物はごく少量でまた細片化しており、埋没の時期を示さない可能性があるが、現段階では34の高杯の形状や、36の底部の特徴より弥生時代後期後半に埋没したものと判断しておきたい。



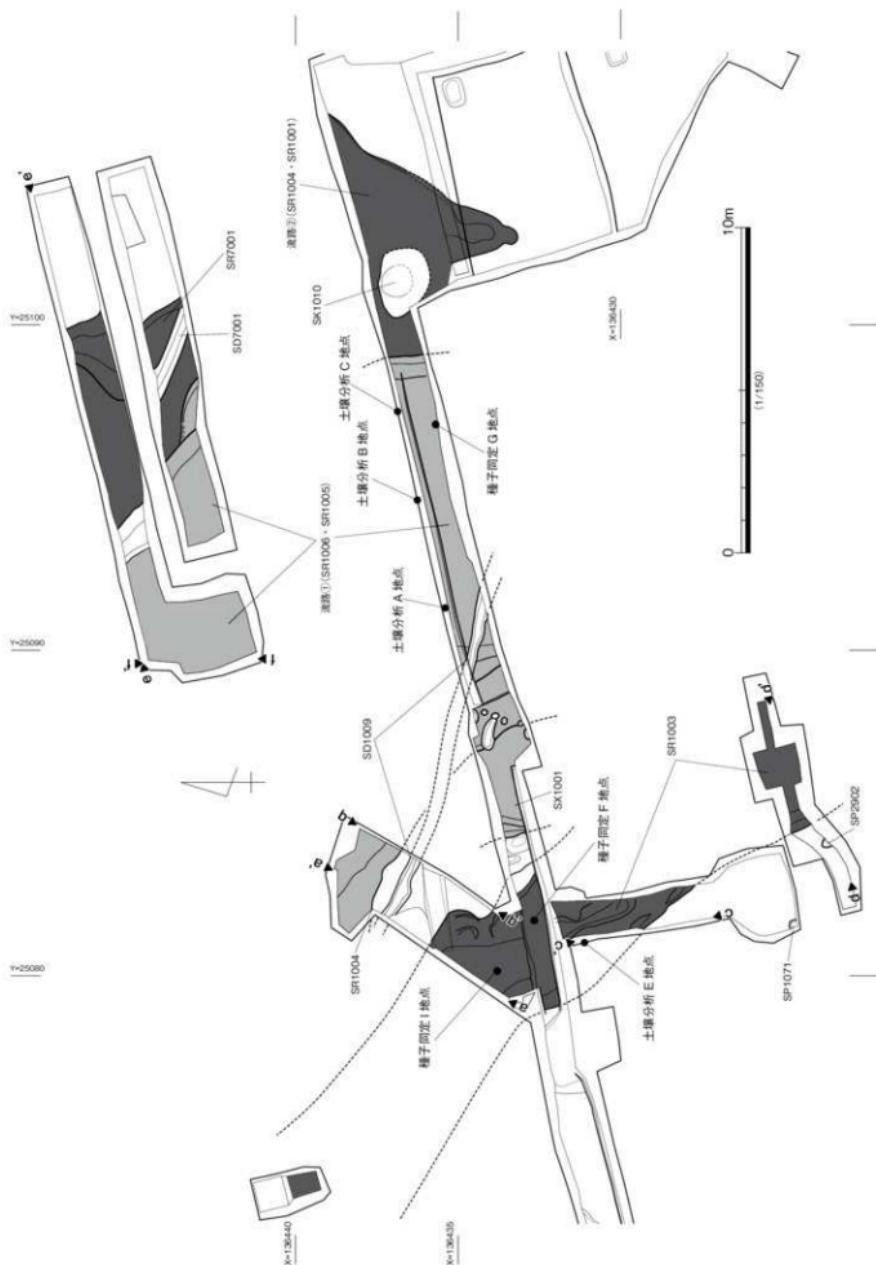
29図 1区 SD1014 平断面図・出土遺物実測図

3) 溝

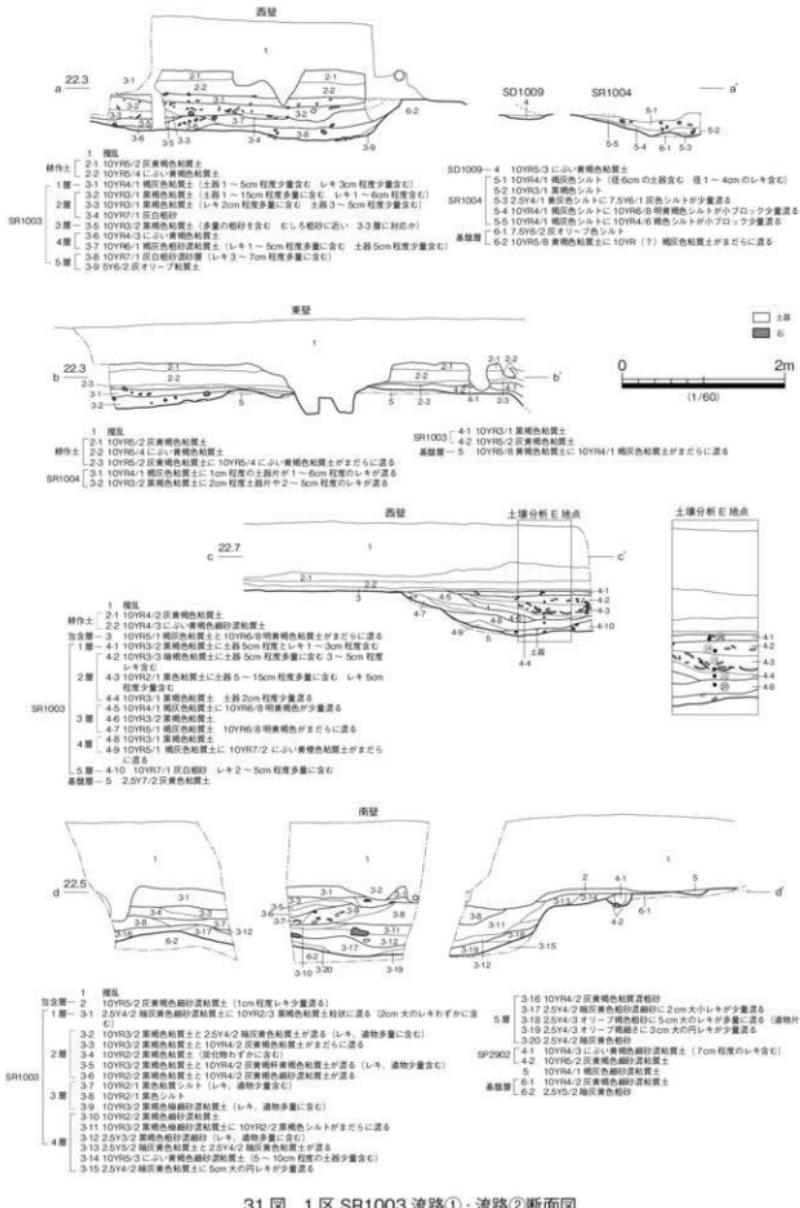
SR1003 (30図~47図)

遺構 1区西側で検出した大溝である。幅約3.8m、検出面からの深さ90cmを測る。検出した範囲では南東から北西方向へと緩やかな曲線を描く進路をとり、中央微高地のやや東よりをそのまま北上、もしくは中央微高地を南東方向へ反れたルートが想定される。

層位は大別3層ある。下層は基盤層V層を由来とする粗砂から細砂が主体となり、流水痕跡を示す。調査時には基盤層V層から湧水があり、當時ポンプを稼働させる状態にあった。調査時には4層・4層下位・5層として遺物を取り上げている。中層は黒褐色系の粘質土が主体となり、流れが緩やかとなっていたものと考えられる。調査時には3層として遺物を取り上げている。上層は中層と同様に黒褐色系の粘質土が主体となるが、土器や亜円レキ等の夾雜物を多く含み、中層とは明瞭に分離できる。調査時には2層下位・2層として遺物を取り上げている。最上層は夾雜物をほとんど含まずほぼ単層で、調査時には1層として遺物を取り上げている。SR1003直上には、古代から中近世にかけて連続する耕作土が確認できる。



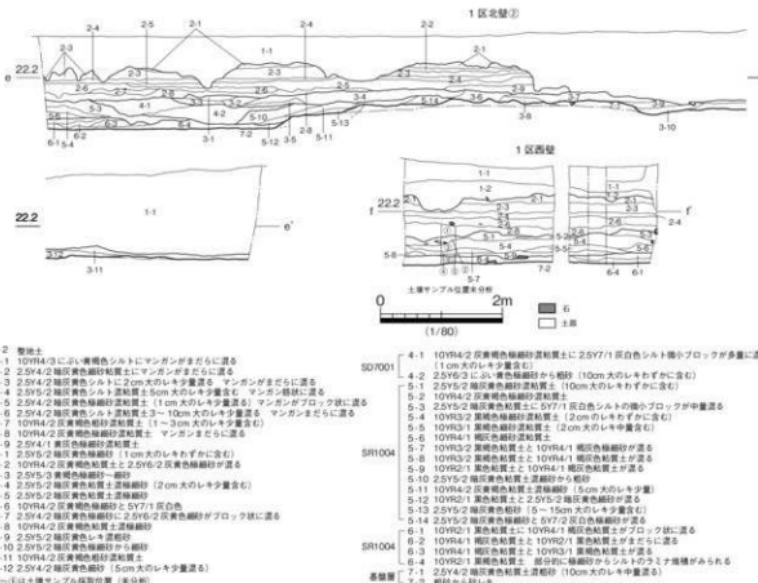
30図 1区 SR1003 流路①・流路②平面図



SR1003より北西に『旧練兵場遺跡I』SD56があり、溝の形状や土器群の時期など共通する点がみられ、一連の遺構と考えられる。

上層（2層下位・2層）は多量の土器が含まれ、他の層とは明瞭に区分できる。遺物の平面分布の傾向として大溝中央部分に多量の土器や石材が集中して分布し、中心から外側ほど土器の総量は少なく、破片も小さい。土器群の一部には列（33図・写真図版5）をなすように出土している。また断面図31図・32図より、流路中央部分に土器が集中する傾向にあることが分かる。以上の遺物出土状況より、上層は中層（3層）が一定程度埋没したのちに流路中央部分に土器が廃棄され、部分的には投げ捨てられたのではなく、意図的に溝底に置き、埋め戻された可能性がある。

各層の時期幅は、下層は弥生時代後期前半から後半を占め一部に弥生時代中期後半の遺物を含む、中層は弥生時代後期後半、終末期から古墳時代前期前半、上層は古墳時代前期後葉から中期前葉、最上層は古墳時代後期前半から後期後半の時期が中心の時期とみられる。各層とも土器の出土量は多いが、圧倒的に上層の古墳前期新相の資料が多く、また最上層の土器群との時期差も顕著である。この顕著な土器の時期ごとの出土量の増減は、旧練兵場遺跡内での集落の消長と概ね合致する内容である。

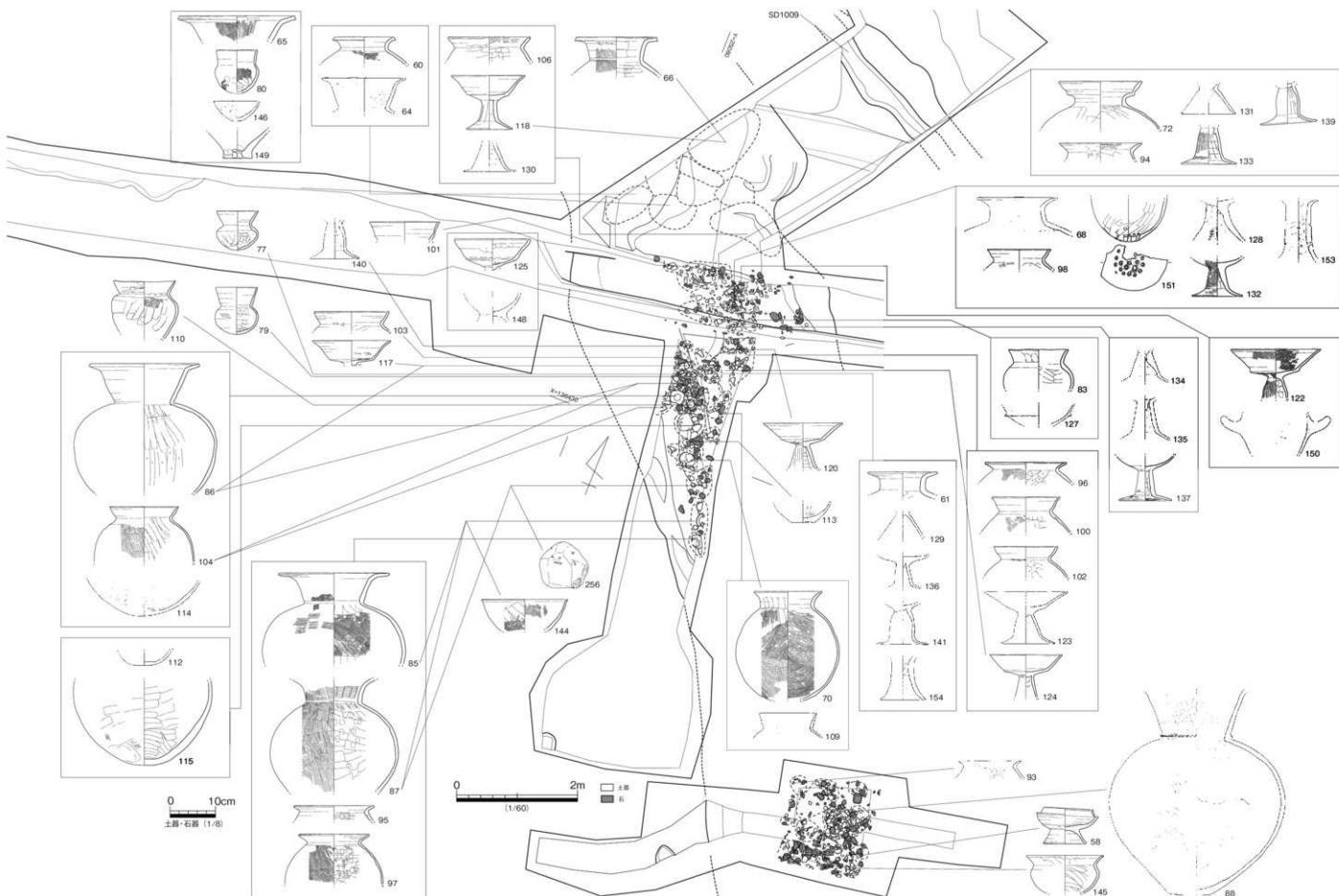


32 図 1 区北壁②断面図

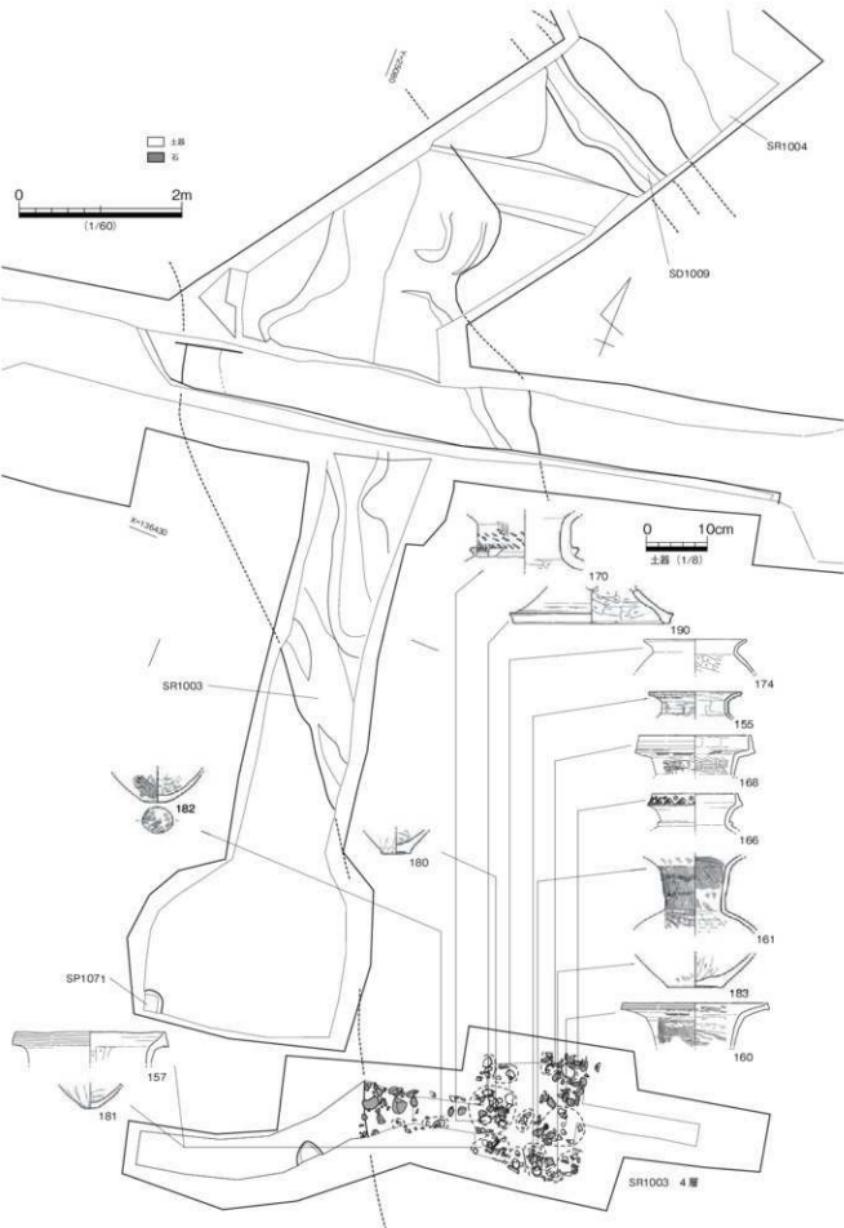
遺物

最上層（1層）（36図）

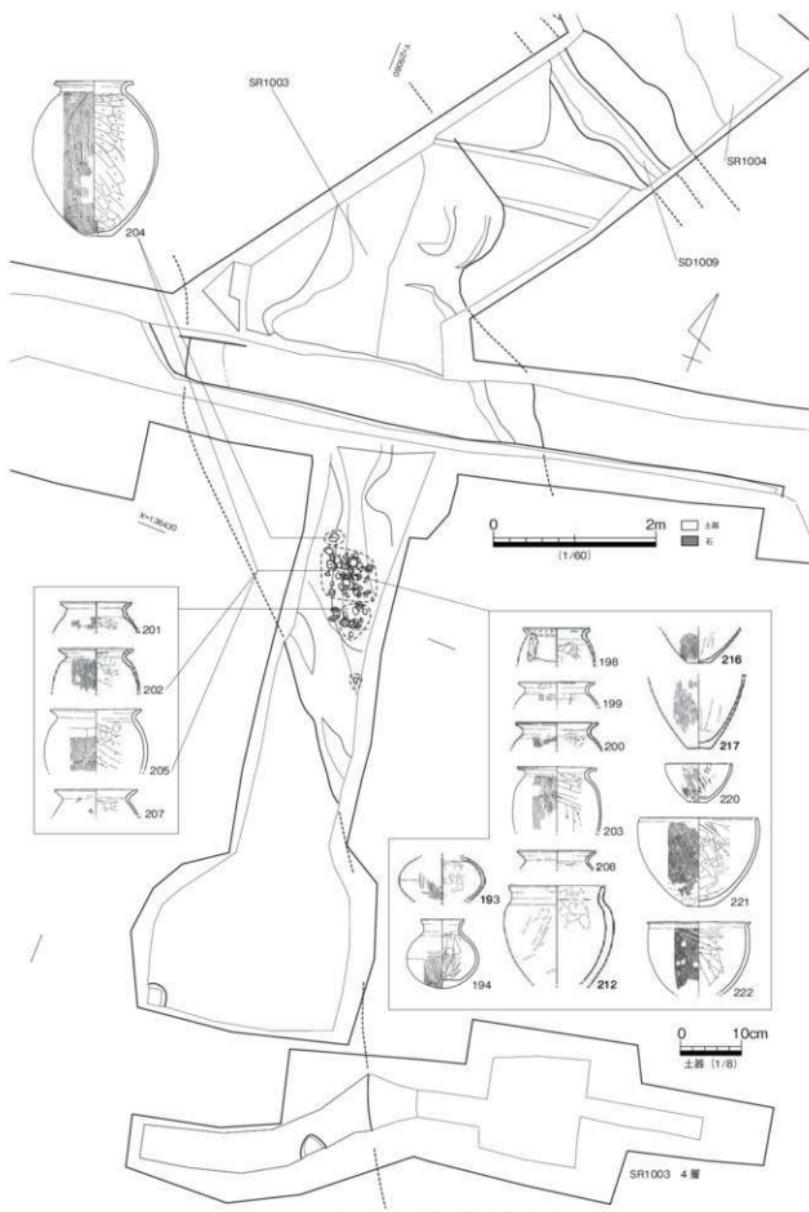
出土した遺物は弥生土器（37～40、43）土師器（41）、須恵器（42・44～49）、台石（254）がある。



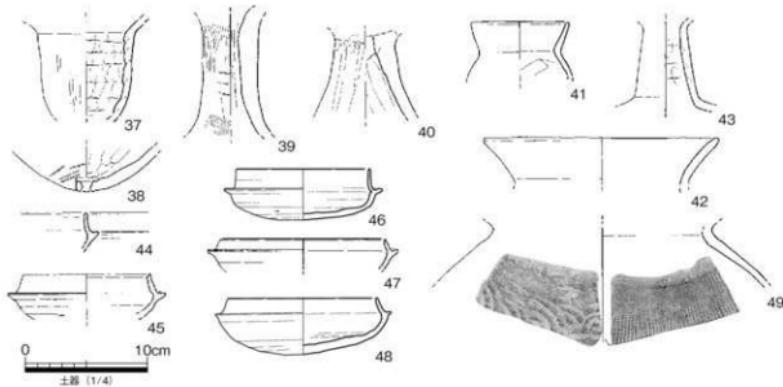
33図 1区 SR1003 2層 遺物出土状況図



34図 1区 SR1003 3層遺物出土状況図



35図 1区 SR1003 4層 遺物出土状況図



36図 1区SR1003最上層出土遺物実測図(1)

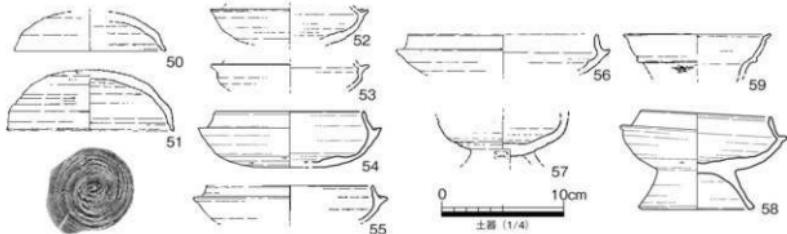
出土土器の時期は、弥生時代終末期、古墳時代前期後葉、古墳時代中期末、古墳時代後期後半と時期幅がある。堆積時の混入遺物が多いが、最も新しい須恵器杯(48)より古墳時代後期後半には埋没したものと考えられる。

37の鉢は、胴部内面に粘土紐の接合単位がナデ消されず明瞭に残る。38は瓶、39は支脚、40は高杯である。41の小型丸底壺は、口縁部から胴部上半の破片で、口縁部径が胴部最大径より小さく、頭部から内湾気味に立ち上がる。上層資料の76とプロポーションが共通している。42の土器壺は、口縁部が長く長胴壺と考えられる。44～48の杯は、44～46は立ち上がりが高く口径も11cm前後を測り、45の立ち上がり端部は強い回転ナデによって凹面を呈する。TK23型式期に相当すると考えられる。47～48は立ち上がりが低く、端部は丸くおさめ、口径は13cm前後と大きい。TK10型式期からTK43型式期に相当すると考えられる。

上層(2層及び2層下位)(33図・37図～42図)

出土遺物は、杯蓋(50・51)、杯(52～56)、ハソウ(59)、広口壺(60～70、85～88)、小型丸底壺(74～80)、壺(73・81～84・101・105)、甕(91～100、102～104・106～111)、底部(112～115)、高杯(116～137)、鉢(142～146)、瓶(149～151)、台付鉢(148)、支脚(152～154)、砥石(255)、叩石(256)がある。出土遺物の時期は弥生時代終末期新相、古墳時代前期後半、古墳時代中期末～後期前半とあり、須恵器が最上層からの混入と考えれば、弥生時代終末期新相から古墳時代前期後半にかけての資料群である。

51の蓋は、頂部に回転ヘラケズリが施される。端部内面には段を有し、内面中央には当具の圧痕が残る。TK10型式期に相当する。52・53の杯は受部径が13cm弱と小さく、立ち上がりの内傾度は強い。54～56は口径が15cm～16cmと大きく、立ち上がりは12cm前後と高い。ただし立ち上がり端部は丸くおさめる。TK43型式期～TK209型式期と考えられる。57・58の低脚高杯は、57が脚部に台形のスカシがあり、58の脚部にはスカシはない。59のハソウは、口径12cmを測り、口縁部は内湾して立ち上がり、雄部のみ外反する。二段目に波状文を施す。60～70の広口壺は、63～65は頸部が逆ハの

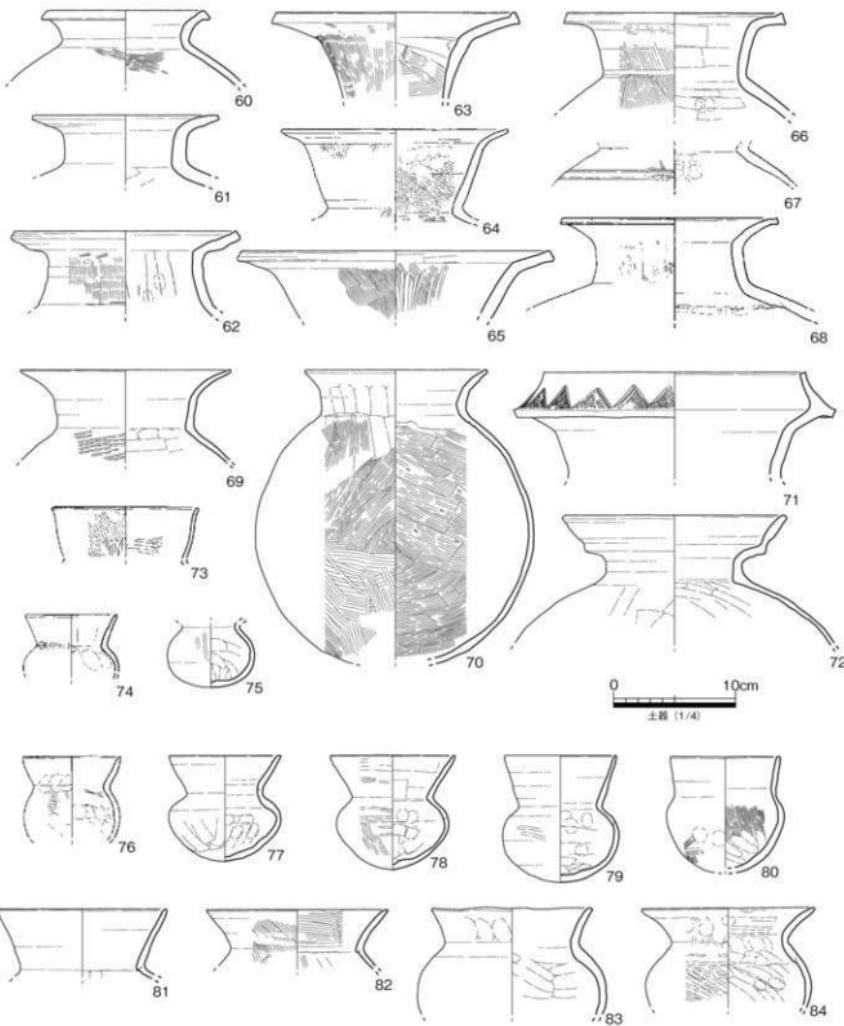


37図 1区SR1003上層出土遺物実測図(2)

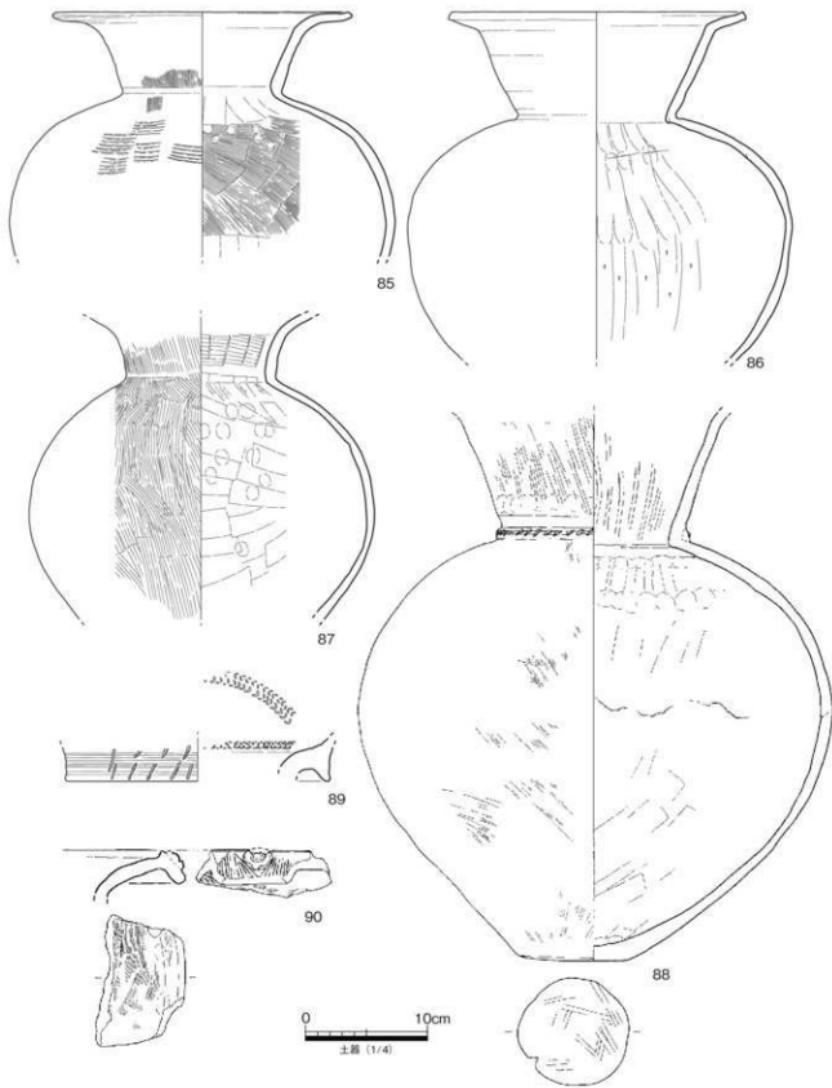
字に開き、口縁部は直線的で、端部は上下にわずかに突出させるものやそのまま直線的におさめるものがある。70は頭部が垂直気味にすぼまり、やや立ち上がったのちに外反する。胴部最大径は中位やや下にあり、やや下膨れである。71の複合口縁壺は、口径は21.4cmで、口縁部外面に鋸歯文を施す。端部には横ナデが丁寧にはいりシャープな作りである。72の二重口縁壺は、垂直気味の短い頭部に短く太い口縁部を呈する。器壁はやや厚手である。74～80は小型丸底壺は、口縁部と胴部の形態から、3形式に分けられる。74～76の口径は8cm前後、79は9.2cm、胴部はやや球形化し、口縁部は直線的もしくはやや内湾気味に立ち上がる。77・78は口径が10cm前後、胴部のやや上位に胴部最大径が位置する。口縁部は斜め上方に立ち上がる。80は口縁部径9.0cm、胴部最大径が頭部直下にあり、口縁部はほぼ垂直である。82の壺は、外面ともにハケ目が施される。口縁部径15cm前後を測り、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。85・86の広口壺は、胴部最大径が中位よりやや上にあり胴部の肩が張る。85は頭部から口縁部が水平方向に外反して広がるが、端部は一転して内湾する。87は胴部最大径が中位にあり、頭部内面にハケ目が施される。88の広口壺は、口縁部を欠損している以外はほぼ完形である。頭部の突带上に、列点文を刻む。胴部の最大径を中位にもち、底部にむけてすぼまり、底部は平底である。露出した段階は2層下位であるが、接地面は3層中であることから、本来は中層資料である。弘田川西岸遺跡出土の壺に酷似しており、また土器棺墓に利用されていた。本次調査でもその可能性を考え、88を取り上げる際に周辺の精査を実施したが、土器棺墓に伴う掘方は検出できず、周囲の土器群と同様に廃棄されたものと考えられる。

96・97の壺は頭部の屈曲はややゆるく、口縁部は発達しやや長い。96は内面の頭部までヘラケズリが施される。98～100・102～104の口縁部は、下位は内湾して立ち上がり、上位は一転して外反する。端部上面を強いナデによって外面に端部が引き出されるもの(98-99)と、丸くおさめるもの(100)、端部を平滑に仕上げるもの(103)がある。101・105の壺は、口縁部下位が低く、上位が長く外反させる。116～141の高杯は、概ね杯部と脚部は3形式ある。杯部下位が内湾し、上位が外反する(116～122・124)、杯部はほぼ直線的に口縁部に至るもの(123)、内湾するもの(125)がある。126は杯部が箱型を呈するなど弥生時代後期前半の所産である。混入品とみられる。127は高杯の杯部で、中位に断面三角形の突帯があり、それを境として屈曲の度合いが異なる。他の高杯と比べ薄手で形態も異なることから、他地域産と考えられる。

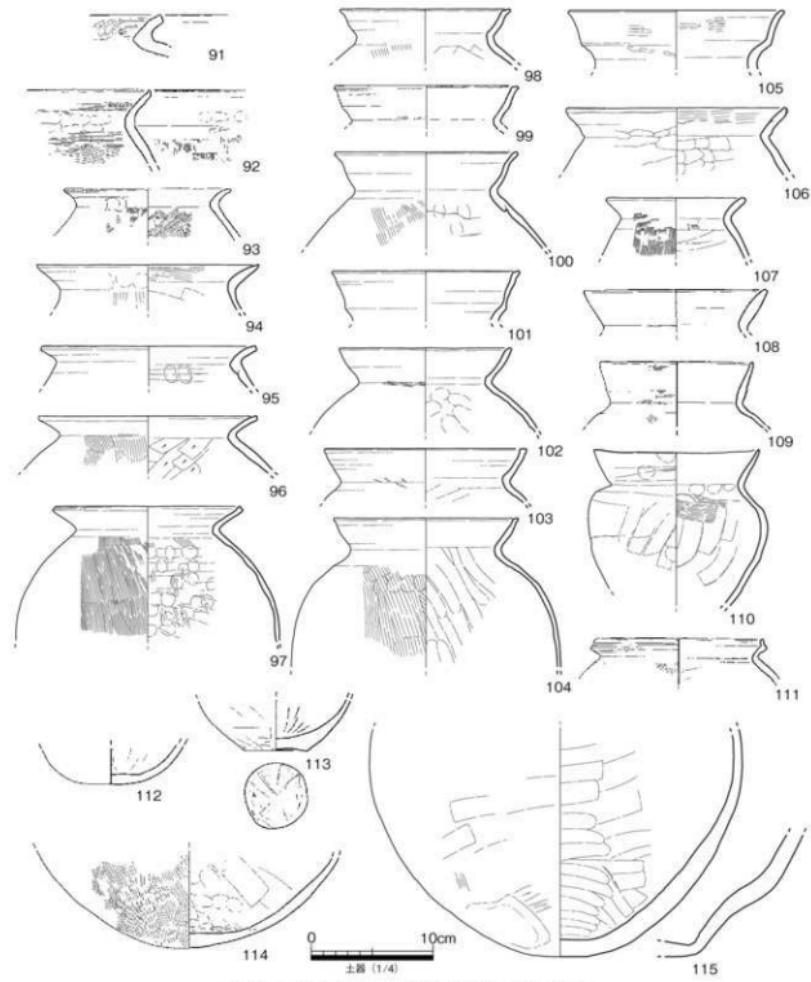
脚部下端が内湾し脚柱部が直線的なもの(133～138)、脚部下端が内湾し脚柱部がエンタシス状になるもの(139～141)、脚部下端が外反し脚柱部が直線的なもの(132)がある。131は、高杯と考えていたが、他の高杯と明らかに形状が異なり、杯部の剥離も見られないことから、口縁部と脚部を一体



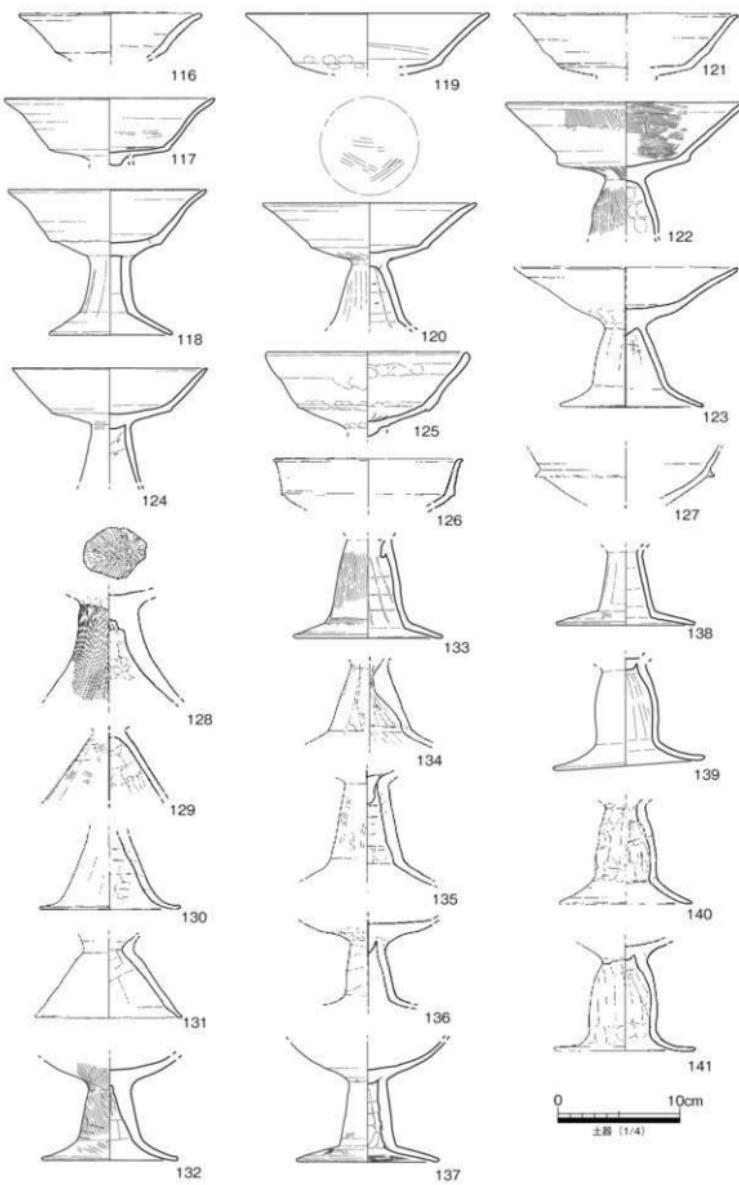
38図 1区SR1003上層出土遺物実測図(3)



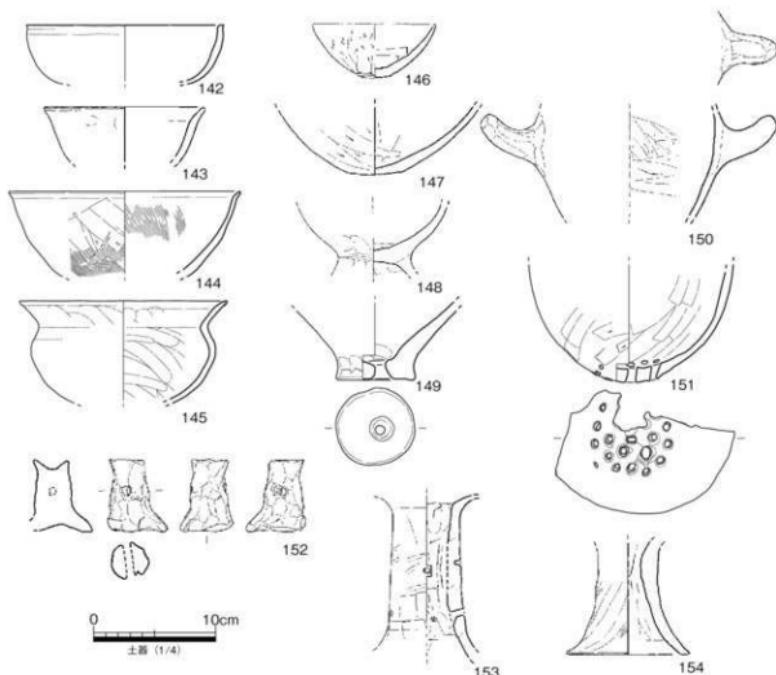
39図 1区 SR1003 上層 出土遺物実測図 (4)



40図 1区 SR1003上層 出土遺物実測図(5)



41図 1区 SR1003 上層 出土遺物実測図 (6)



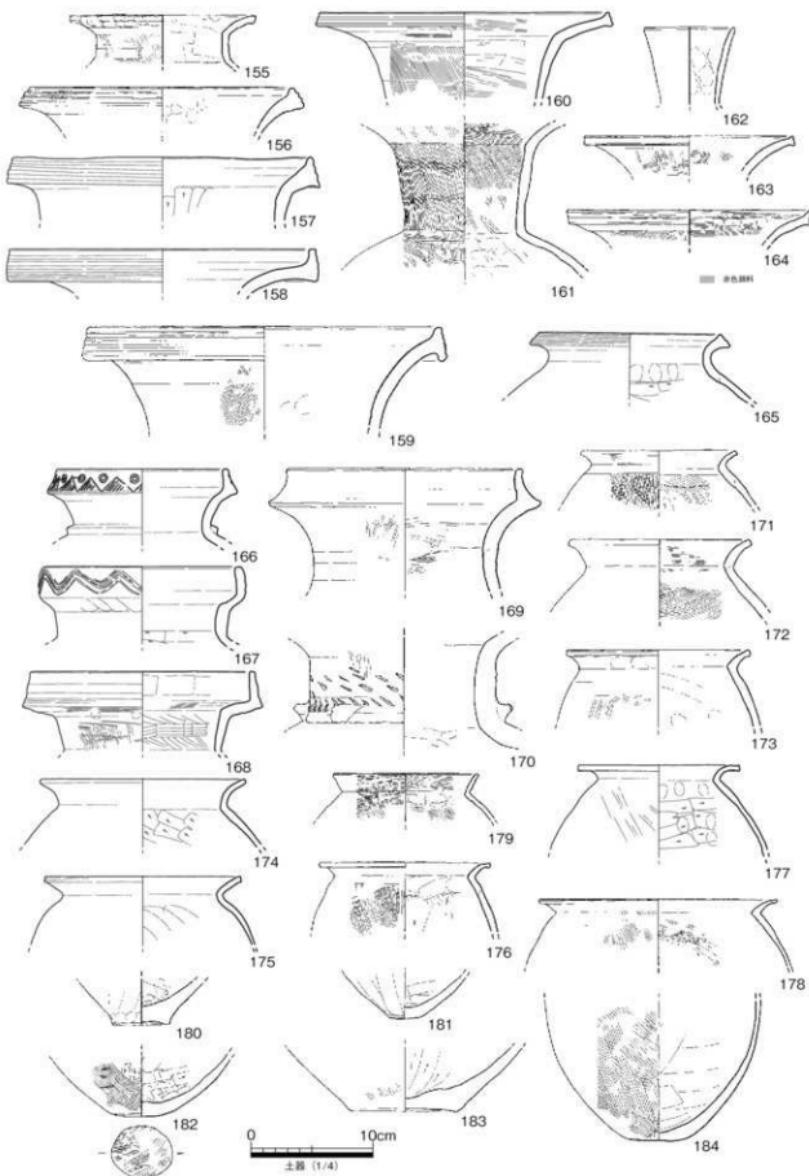
42図 1区SR1003上層出土遺物実測図(7)

で成形する小型の鼓形器台の可能性がある。145の鉢は、長く外反する口縁部をもつ。150・151の瓶は、接合しないが、同一層位で出土位置が接続しており、また胎土や色調も類似していることから、同一個体と考えられる。152は手捏ねの土製品で、中実である。中位やや上に円形の穿孔がある。153はスカラシが多段多方向に穿孔されており、その特徴から吉備からの搬入品とみられる。154の支脚は、強いナデ調整によって外面の器壁は、凹凸がある。

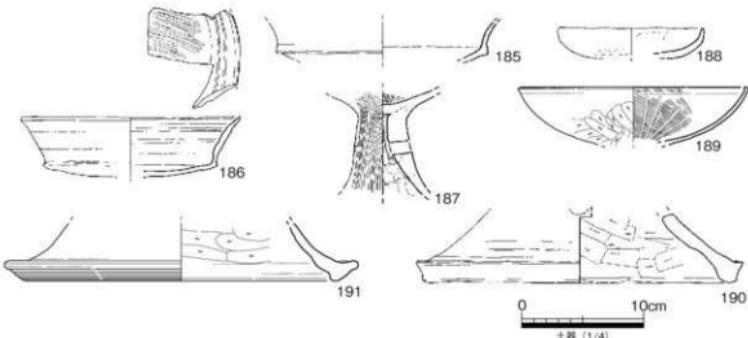
中層(3層)(34図・43図・44図)

出土した土器は、全て弥生土器である。広口壺(155～161、163～165・170)、細頸長頸壺(162)、複合口縁壺(166～169)、甕(171～179)、底部(180～184)、高杯(186～187)、器台(190・191)鉢(188・189)、石斧(257)がある。出土土器の時期、弥生時代中期後半新相、後期後半から終末期と幅がある。

156～159の広口壺は、上下に拡張した口縁端部に凹線文が施され、器壁は厚い。158は端部を内湾気味に上方に突出させる。160の広口壺は頸部から水平方向に口縁部が直線的に伸び、端部をやや拡張させる。166の複合口縁壺は、頸部が短く外反し、口縁部は内側に外反しつつ立ち上がる。端部外面は鋸歯文と竹管文が交互に施文される。167は太く短い頸部に口縁部は内湾して立ち上がり、端部外面に



43図 1区 SR1003 中層 出土遺物実測図 (1)



44 図 1 区 SR1003 中層 出土遺物実測図 (2)

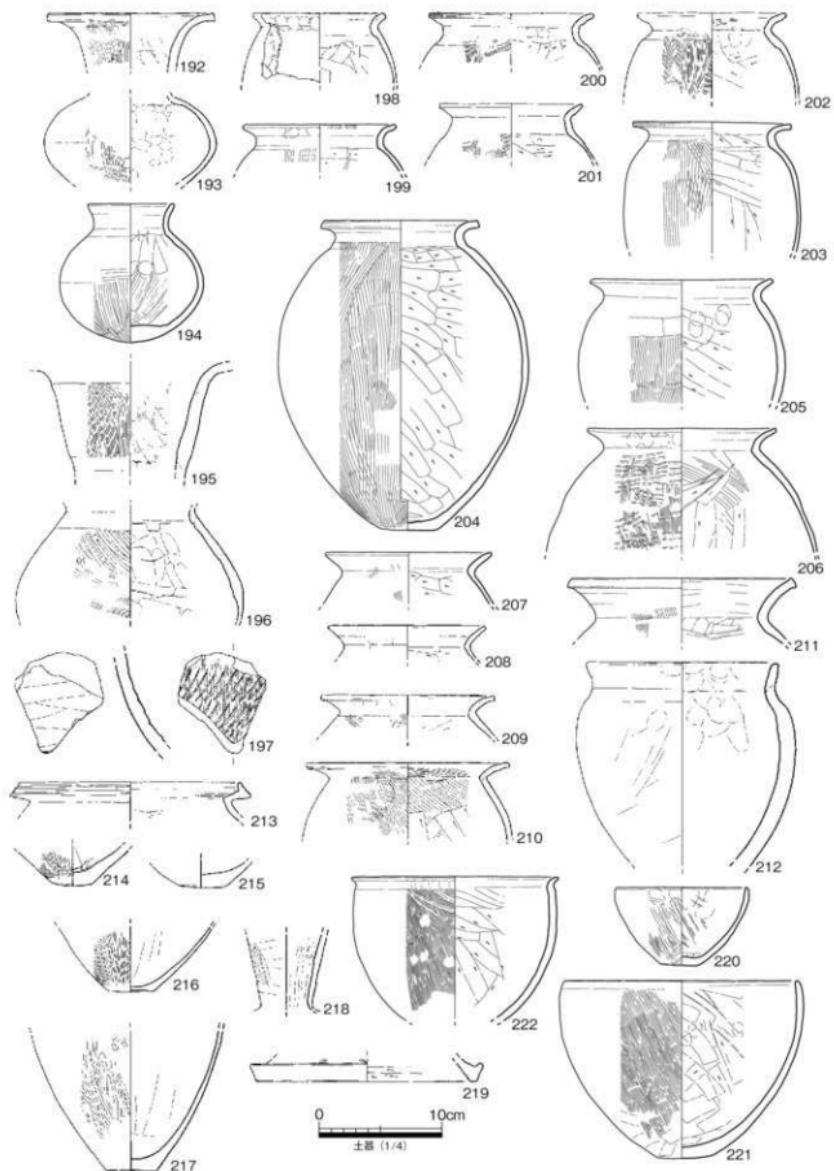
に間隔の広い波状文が施される。170は器壁が厚く、頸部にハケ原体による列点文が三段を基本に施される。176・177の甕は、頸部から外反して延び、端部に強い横ナデが施され、内面に凹線状の浅い溝みがある。また口縁部は長く発達しているが、間延びしておらず、弥生終末期の段階におさまるものと考えられる。186の高杯は、長く外反し、内面に強い横ナデが施される口縁部や胎土から、香東川下流域産と考えられる。189の鉢は、内面にハケ目が施された後に文様状に縱方向のヘラミガキが施される。190・191の高杯は、底径の大きさに少し違和感が残るものの、脚部内面にヘラケズリが施され、脚端部をななめ上方に拡張される特徴など、吉備系にみられる特徴である。

下層（4層）(35・45図)

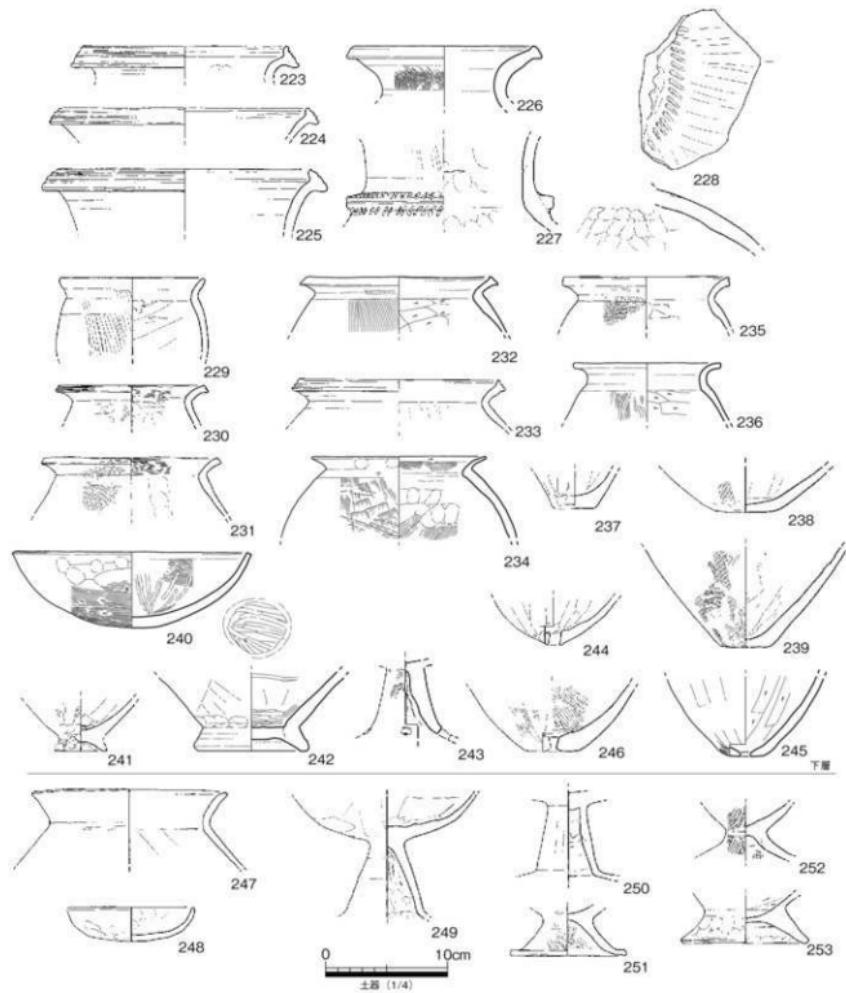
出土遺物は、壺（192～197、218）甕（198～213）、底部（214～217）高杯（219）鉢（220～222）がある。出土遺物の時期は弥生時代後期後半である。192の広口壺は、口径は小さく、頸部から口縁部まで連続して外反する。218の細頸壺は、胎土の特徴から香東川下流域産とみられる。198の甕は、口縁部が太く短く外反する。199～205の甕は、頸部が短く立ち上がり、口縁部は水平方向に短く外反する。若干のばらつきは見られるが、大半は体部は頸部よりやや下まで薄く作り、それより上位は器壁が厚く作られ、その器壁の厚さのまま口縁部まで至る。ヘラケズリも頸部直下まで施される。206～210の甕は、頸部からそのまま外反し端部に至る。212の甕は、胴部の器壁が厚くほぼ直立する口縁部をもち、胴部最大径は頸部直下にあるが、やや寸胴を呈する。213の甕は、くの字に屈曲する口縁部に、上方に拡張した端部外面に凹線文を施す。下層（5層）の混入品とみられる。219の高杯は、脚端部を上方にやや拡張させる。脚内面には横方向のヘラケズリが施される。また外面には縦位の櫛描文が施文される。吉備からの搬入品とみられる。221の鉢は、完形品で、口縁端部はやや内湾する。また胎土によるものか、大きさに対して重量が軽い。

下層（5層）(46図)

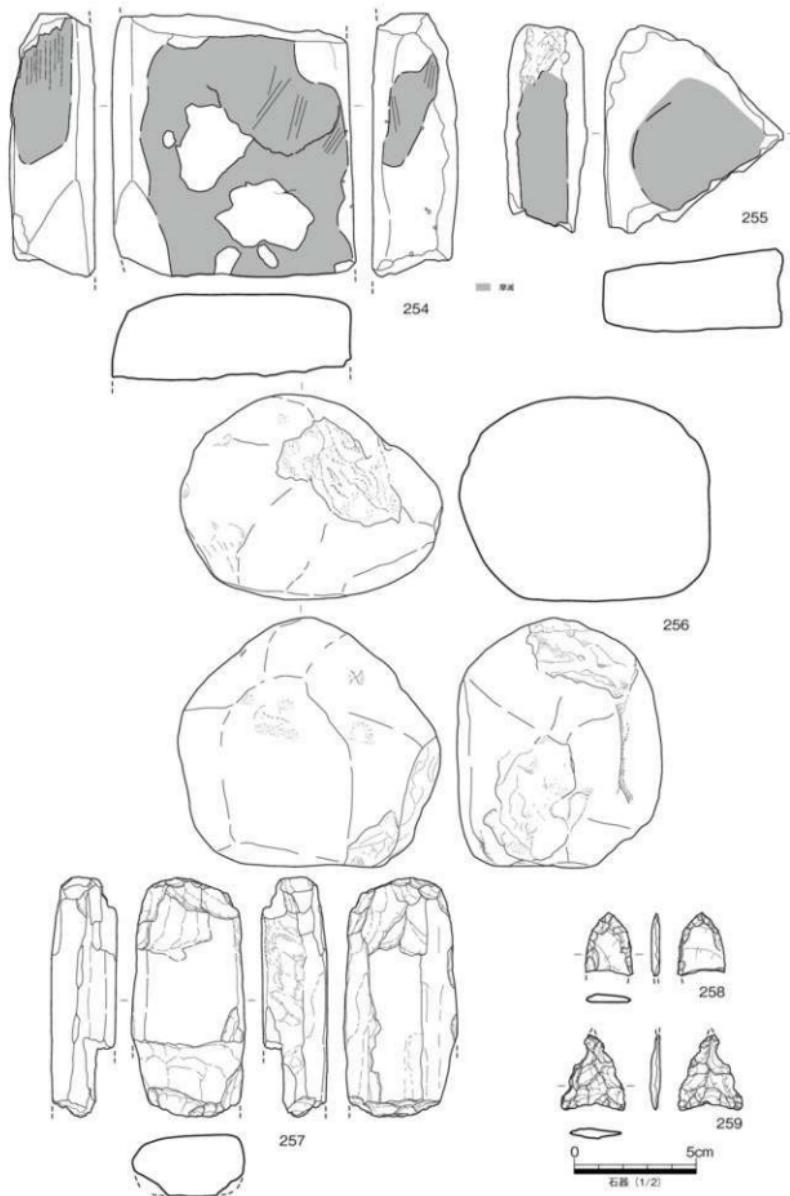
広口壺（223～226）、壺（227・228）、甕（229～236）、底部（237～239）、鉢（240）、台付鉢（241・242）高杯（243）、瓶（244～246）、石鎚（259）がある。遺物の時期は後期前半新相から後期後半に位



45図 1区 SR1003下層 出土遺物実測図(1)



46図 1区 SR1003 下層 出土遺物実測図 (2)



47図 1区 SR1003 出土遺物実測図

置づけられ、一部終末期のものがある。

223～225の広口壺は、上下に拡張した口縁端部に凹線文が施される。後期前半古相に位置づけられる。227は頸部に断面四角形の突帯を貼付け、ハケ原体による圧痕が二段に施される。230～233・235の甕は、口縁端部をやや拡張させるが凹線文は施されず、233のみ擬凹線がある。235・236は頸部が太く短く立ち上がり、口縁部が短く外反する。下層（4層）中にもみられる。241・242の台付鉢は、脚部は太く短い。243の高杯は、外反する脚部に円形のスカシが四方向に穿孔される。244～246は甕である。

その他

これらの土器は壁断面より層番号で取上げた遺物である。壁断面は31図南壁の層位に対応する。甕（247）・高杯（251）は3・9層中の土器で上層に相当する。鉢（248）は3・12層中の土器で下層に相当する。高杯（249）は3・8層中の土器で上層に相当する。高杯（250）・台付鉢（252・253）は層位不明の土器群である。248は小型の鉢で、口縁部は短く内湾気味に立ち上がる。250の高杯は、脚柱部からほぼ水平方向に脚端部がのびる。

4) 流路（30図、32図、48図～54図）

流路① SR1006・SR1005・SX1001、流路② SR1004・SR1001・SR7001

遺構 1区東側で検出した流路である。複数の遺構名を付しているが、細分した調査であったことから、遺構の全体像を掴みきれず、同一遺構及び埋土に対して複数の遺構名を付してしまった。調査および整理段階で検討した結果、SD1009・SD7001を間に挟み上層と下層とに区分し、時期の異なる流路の重複関係であると判断した。報告では下層流路を流路①とし、埋土単位をSR1006を下層、SR1005を中層、SX1001を上層とする。上層流路を流路②とし、埋土の単位はSR1004を下層、SR1001・SR7001を上層としてまとめ報告する。また、流路①および流路②とSD1009およびSD7001の層序関係は、流路①（SR1006→SR1005→SX1001）→SD1009・SD7001→流路②（SR1004→SR1001・SR7001）の順に整理される。

微地形の区分では東側低地とした箇所を流下しており、微地形に規制されていることがよくわかる。流路①は幅約15m深さ60cmを測り、断面形状は皿状を呈する。埋土の下層（SR1006）は黒褐色粘質土を主体とする粘性の高い層が水平堆積し、総量は少ないが植物遺体も層中にみられた。中層（SR1005）は下層の埋土に似るが灰白色の粘質土と混在し、水量が増加したことにより下層埋土が搅拌されたものと考えられる。上層（SX1001）埋土は西肩にのみ確認でき、中央および東肩には存在しない。上層埋土は極細砂から粗砂が主体となる。また、流路①底面からの湧水が著しく、扇状地形にしみ込んだ雨水とみられる。流路①の流下方向には『旧練兵場遺跡1』で報告されているSR01があり、出土遺物など類似する点がみられることから流路①と一連の遺構と考えられる。

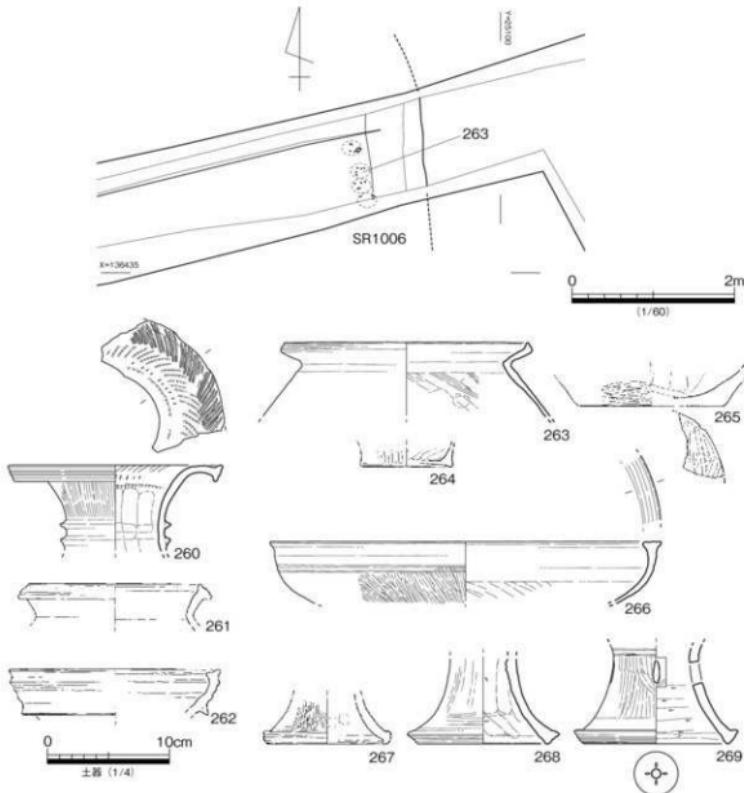
流路②は、西肩は下層の流路①とは重なるが、東肩はやや不明瞭である。流下方向も南ではなく、南西から北西方向を指向し、平面的にも流路①の流下方向とはやや異なる。幅は7m以上深さ約20cmを測る。埋土は大別2層あり、下層（SR1004）は暗褐色と灰白色が混在し粘性が強い、遺物取上の際は、1層と2層で区分して遺物を取り上げているが、時期差はほとんどみられない。上層は暗褐色粘質土と灰白色が混在する。上層より上位は、中世から近世にかけての耕作土が連續して形成され、385などの明らかに近世と判断される遺物が混入する。

流路① (48図～51図)

下層 (SR1006) (48図)

出土遺物は広口壺(260・261)、長頸壺(262)、甕(263)、底部(264・265)、高杯(266～269)がある。時期は弥生時代中期後半古相に位置づけられる。また、SR1005とした284～286・290も上層に巻き上げられた一群と考えられ、本来は下層の資料群と考えられる。

260は頸部中位に断面三角形の突帯を二条張り付け、口縁部内面にもハケ原体による列点文とハケ目が施され、端部には凹線文が施される。262の長頸壺は、口縁部が受け口状内溝し、外面には凹線が施される。口縁部外面の下位には断面三角形の突帯が張り付けられている。263の甕は、頸部をくの字状に強く屈曲させ、端部は上方にわずかに拡張させ凹線が施される。266の高杯は、やや内湾する杯部に、端部は内外面に突出し、端部上面には凹線文が施文される。267～269の高杯、脚端部を上下にやや拡張させ、凹線を施す。269は、脚部内面にヘラケズリが施され、脚柱部には橢円形状のスカシが4方向に穿孔される。

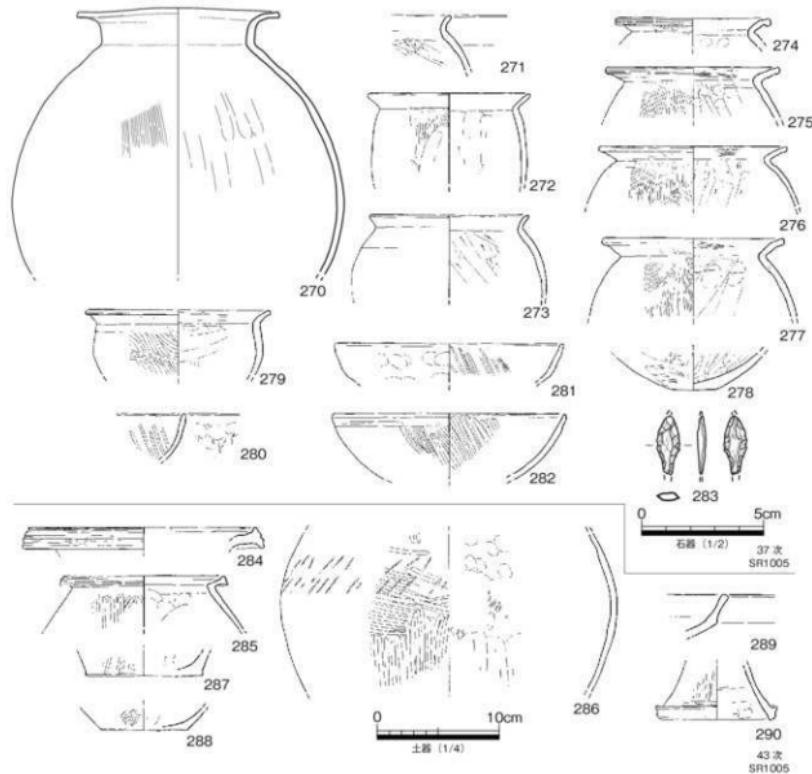


48図 1区 SR1006 遺物出土状況図

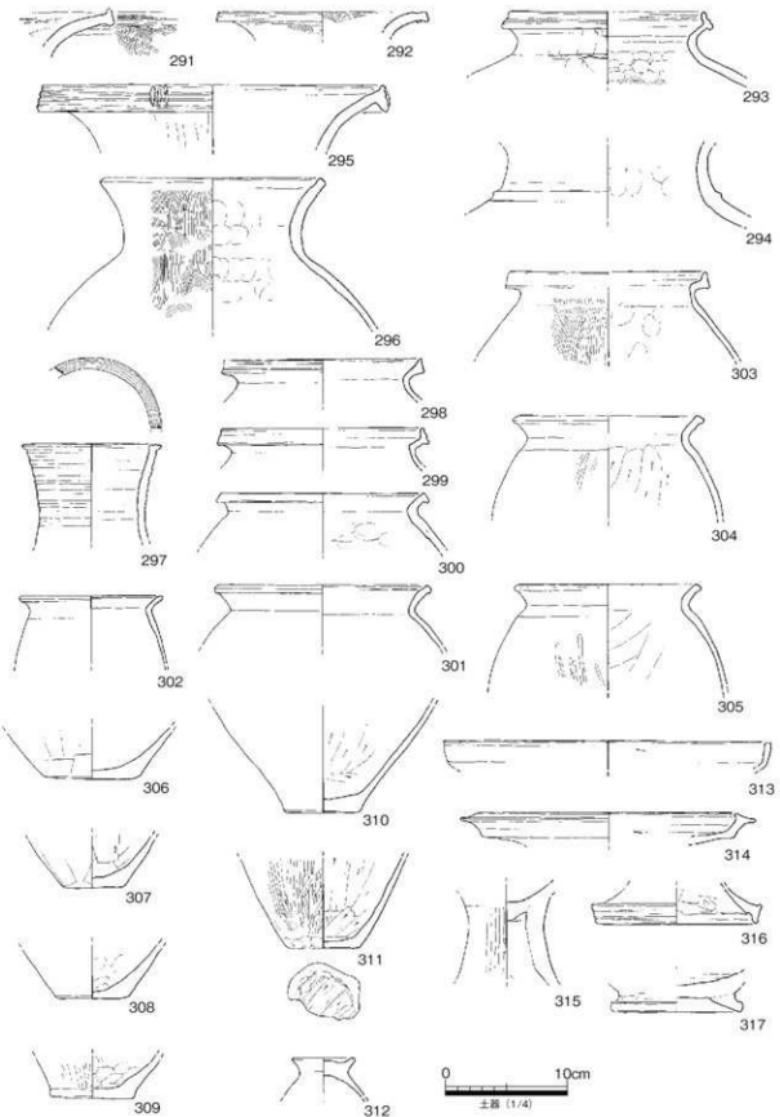
中層 (SR1005) (49図)

出土した遺物は、広口壺 (270・284)、壺 (271～277・285・286) 底部 (278・287・288)、鉢 (279～282)、高杯 (289・290)、石鏸 (283) がある。時期は、弥生時代中期後半古相、弥生後期後葉から終末期古相の資料群である。

270の広口壺は、頸部が短くやや不明瞭な口頭部を経て水平方向に短く外反する。茎部と切先が欠けている。271～273は短く口縁部を外反させる。内面の頸部付近までヘラケズリが施される。283はサスカイト製凸基式石鏸である。274～277の壺は、頸部のくの字に屈曲し、口縁部は短く太い。端部は断面四角形を呈している。285は頸部でくの字に強く屈曲し、端部を上下にやや拡張させ凹線文が施される。器壁は薄い。286の壺は、胴部中位よりやや上に最大径をもち、丁寧なヘラミガキの後、2段でハケ原体の圧痕による施文が胴部中位よりやや上に施される。鉢は、口縁部を外反させるもの (279)、口径 (20cm前後) に対し器高が低いもの (281・282) の2タイプある。また280と281の内面には文様状に縦方向のヘラミガキが施される。289の高杯は杯部の中位で屈曲し、上位は外反し、端部は断面四角形を呈する。284～286の一群は、下層の資料群に類似しており、中層堆積時に下層から巻き返さ



49図 1区流路①出土遺物実測図 (1)



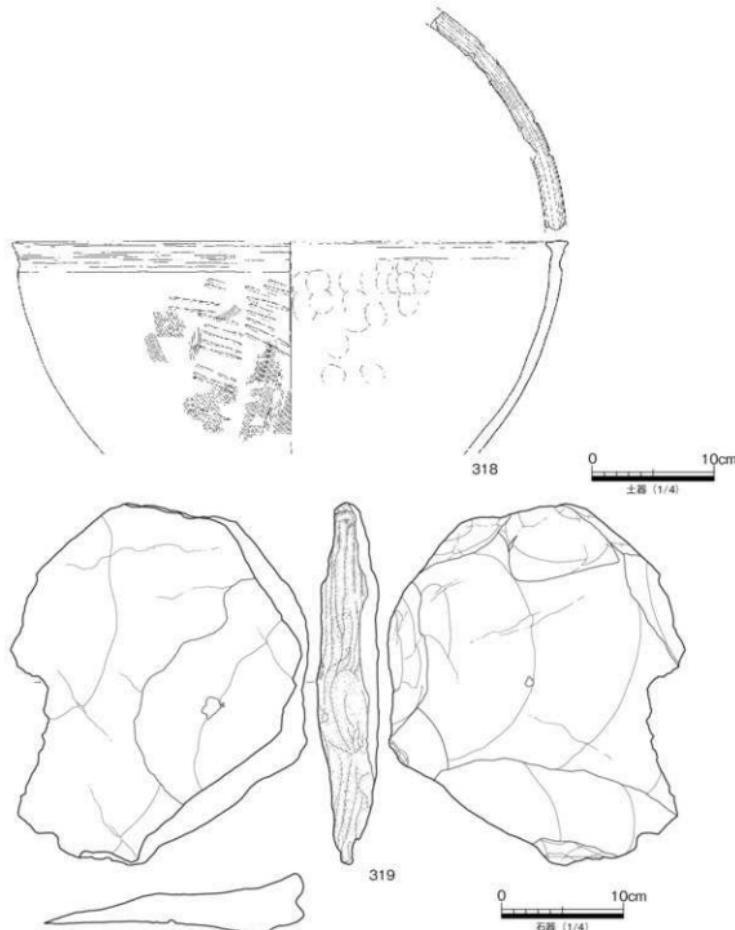
50図 1区流路①出土遺物実測図（2）

れたものと考えられる。

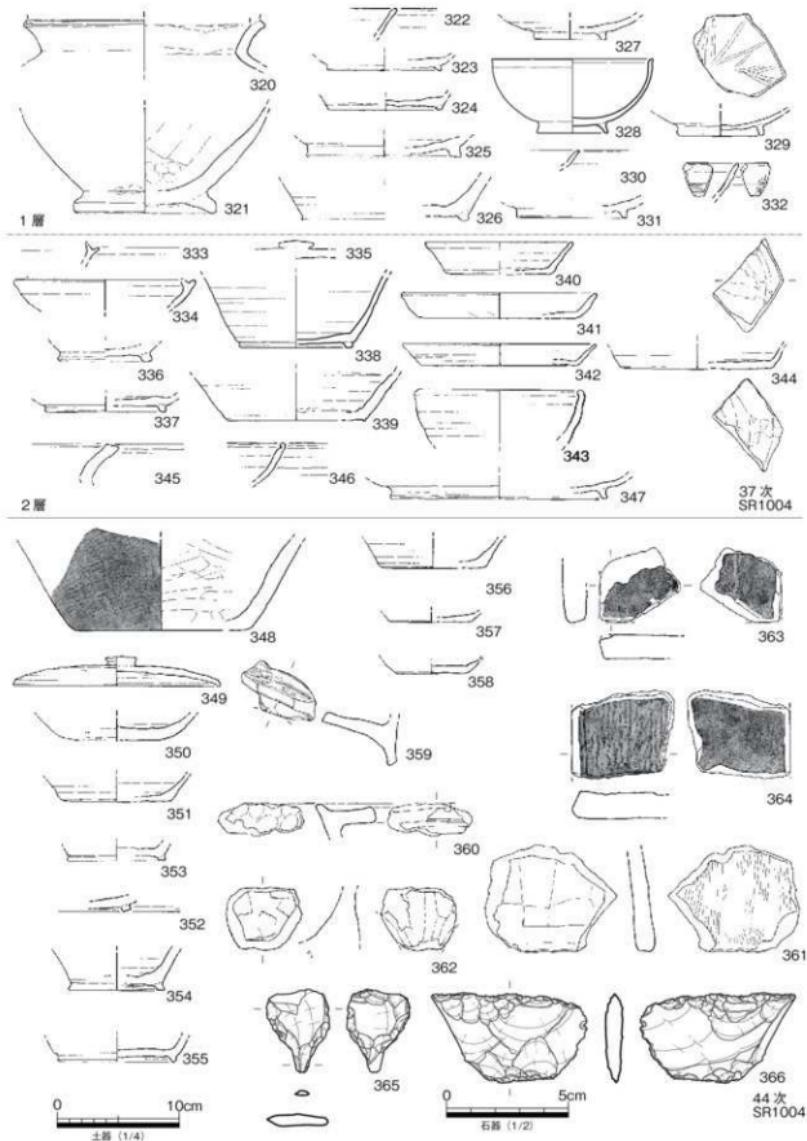
上層 (SX1001) (50図・51図)

出土した遺物は、広口壺 (291・292・294～296)、長頸壺 (297)、甕 (298～305)、底部 (306～311)、蓋 (312)、台付鉢 (317)、鉢 (318)、大型剥片 (319) が出土している。

293 の広口壺は、頸部がやや内傾して立ち上がり、外反する。口縁端部は上下に大きく拡張し、凹線



51図 1区流路①出土遺物実測図 (3)



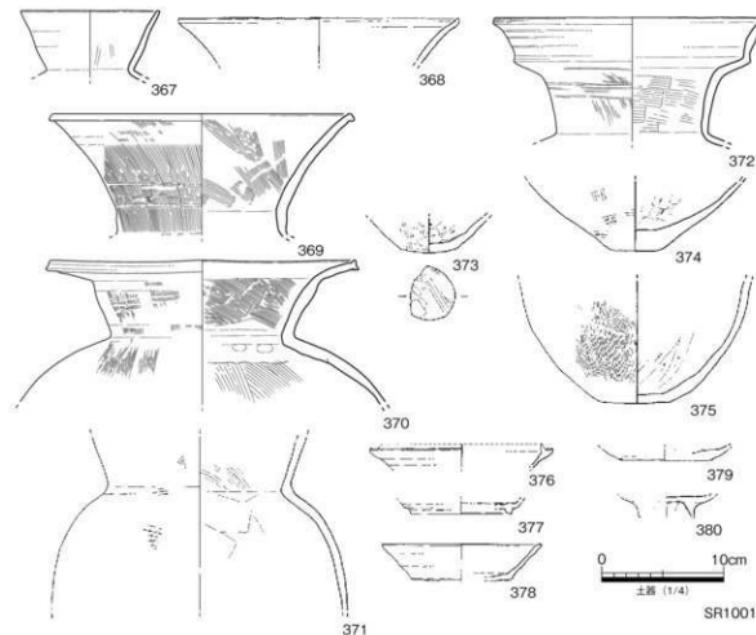
52図 1区流路②出土遺物実測図（1）

文が施される。295 の広口壺は、口縁端部に凹線文の上に綫列三条一組の粘土帯を貼付ける。296 の広口壺は、胴部から垂直気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。297 の長頸壺は、口縁部外面と端部上面に凹線を施し、端部上面は内外面にやや突出させる。298・299 の壺は、口縁端部に凹線を施し、300～305 の壺は、端部をやや拡張させるか、丸くおさめる。また303～305は、頭部を短く立ち上げたのちに、口縁部を外反させる。306～311は壺および壺の底部は、厚みのあるものが多数を占める。312は壺の可能性がある。311は内面にヘラケズリ、外面はヘラミガキが施される。313の高杯杯部は、箱状を呈し、口縁部が垂直気味に立ち上がる。314の高杯は、口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部を内外面に強く拡張させる。316の高杯は、脚端部を上下に拡張させ、内面は横方向のヘラケズリが施される。以上の特徴から吉備方面からの搬入品と考えられる。318の大型の鉢は、口径46cmを測る大型品で、胴部は垂直気味に立ち上がり、端部上面を内外面に拡張させる。またタタキの痕跡がわずかに確認できる。319は安山岩の大型剝片である。剝片の取り出しである二次加工はされていないようだ。

流路②

下層 (SR1004) (52図)

1層出土遺物は二重口縁壺(320)、台付鉢(321)、須恵器杯(322～324)、須恵器壺(325・326)、土師質土器椀(327・328)、黒色土器椀(329)、緑釉陶器(330・331)、青磁椀(332)がある。出土遺



53図 1区流路②出土遺物実測図 (2)

物の中で弥生時代の明らかな混入を除けば、8世紀後葉から12世紀までの時期幅である。

322～324は須恵器杯である。322は口縁部で、薄手で端部はわずかに外反する。323・324は、低脚で、高台の貼付けは丁寧である。325の太く短い高台である。328の土師質土器椀は高台が高く、断面形状は逆三角形を呈する。胴部は内湾気味に立ち上がり、端部のみ強い横ナデによって外反する。329は黒色土器である。底部は回転ヘラ切りの痕跡が残る。高台径は7.4cmを測り、断面形状は長方形を呈する。黒化処理は内面と外面の一部にみられ、内面のヘラミガキは不定方向に施される。331の縁釉陶器は貼付け高台である。332は中国産の青磁碗の口縁部片である。

2層出土遺物は須恵器杯（333・334）、蓋（335）、須恵器杯（336・337・340）、須恵器皿（341・342）、須恵器鉢（343）、土師器杯（346）、壺（345）、土師器皿（347）がある。時期は古墳時代の明らかな混入を除けば、8世紀後葉から10世紀前半に位置づけられる。

334の杯は、受部径が15cmを測り、立ち上がり端部は欠損している。339は壺の底部とみられるが、高台は削り出しあとみられ、底部外縁に極わずかに造り出されている。340の杯は、口径12.4cm、器高は2.8cmを測り、口縁部は斜め上方に大きく開く。341・342は口径16.2を測り、器高は2cmと低い。343の鉢は口縁端部を短く内湾させる。346は端部内面に沈線をもち、暗文はみられないが、形状から畿内系土師器であり、平城V期に相当する。347の皿は高台径18.2cmを測り、やや長めの逆台形を呈する高台をもつ。内面には暗文がわずかに残る。

SR1004（43次調査）

出土遺物は須恵器壺（348）、須恵器蓋（349）、須恵器杯（350～355）、土師器杯（356）、土師質土器皿（357・358）、土師器壺（359～361）、土師質土器足釜（362）、平瓦（363・364）、石錐（365）、スクレイバー（366）がある。37次と同様時期幅がある。

348は胴部下半に格子目タタキが施され、胴部外面の底部から2cmの高さに沈線状の窪みが入る。十瓶產の壺である。349は口径16.9cmを測り、端部は緩やかに下方に屈曲する。353・354は、底部外縁に沿って、短い台形の高台がとりつく。357・358の土師質土器皿は両者とも底部の切り離しは回転ヘラ切りである。359・360の移動式カマドは、内面に煤がわずかに付着する。364の平瓦は模骨痕がみられる。365の石錐はサスカイト製で、錐の端部が欠損している。

SR1001（53図）

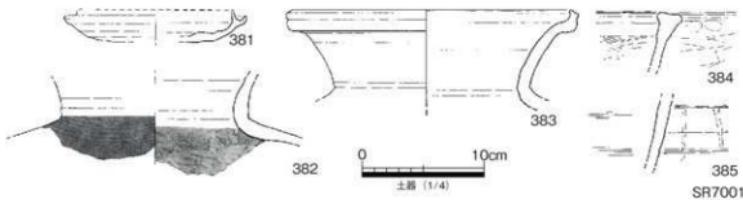
出土遺物、直口壺（367）、広口壺（368～371）、二重口縁壺（372）、底部（373～375）、杯（376）須恵器杯（377・378）、土師質土器杯（379）、土師質土器椀（380）がある。時期は古墳時代前期後半、7世紀初頭、9世紀末から11世紀後半の遺物を含む。

367は頸部から直線的に口縁部がひらく。369は頸部から3cmほどは垂直に立ち上がるが、それより上位は直線的に端部に至る。370の広口壺は、頸部から逆ハの字に開き、中位で屈曲し、水平方向に開く。口縁端部は上下にやや拡張させる。372の二重口縁壺は、垂直気味のやや長い頸部に、やや外に開く口縁部をもつ。377の須恵器杯は、高台径9.4cmを測り、高台は断面逆台形を呈する。378の須恵器杯は、口径13.2cm、器高3cmを測り、口縁部は大きく外に開く。379は土師質土器杯は、磨減著しいが、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。380の土師質土器台付杯は、高台の接続部分は太いが、接地面は細くなり、高台の形状は逆三角形を呈する。高台内側の貼り付けはやや粗い。

SR7001 (54図)

出土遺物は、杯（381）、壺（382・383）、土師質土器壺（384）、備前系壺（385）がある。時期は7世紀初頭から9世紀、中世から近世の遺物がある。381の須恵器杯は口径13cmを測り、残存範囲では回転ヘラケズリはみられない。383の壺は、口縁部は外反し、端部を垂直方向に短く屈曲させる。

時期 流路①下層は弥生時代中期後半、中層は弥生時代後期、上層は弥生時代後期後半に遺物の時期にまとまる傾向がみられる。一方流路②は時期幅が広く、長期間低地として残存していた結果と考えられる。



54図 1区流路②出土遺物実測図（3）

5) 土坑

SX1002 (55図)

遺構 1区東側で検出した落ち込みである。検出時にはSD1007と同一遺構と判断していなかった。整理段階で埋土の状況が類似していることや、遺物の特徴から同一遺構と判断し、SD1007の東に蛇行して連続する溝の一部として報告する。

土器 出土遺物は、壺（387・389）、壺（386・388・390～394）、台付鉢（395）、鉢（396）、高杯（397～399）、鉄製品（400）がある。

389の広口壺は、口縁端部を上下に拡張し凹線文を施す。394は頸部から鋭く屈曲し、中位でやや反転し、端部内面はナデによって凹線状の窪みがある。395の台付鉢は、脚部が短く太い。396の鉢は、内外面ともにハケ目が施され、端部は強くナデつけや内湾する。397の高杯は、口縁端部上端を内外に拡張し、外面は凹線が施される。398・399は高杯脚部で、両者とも粘土円盤充填技法である。400は不明鉄製品で、形状から刀子の可能性がある。

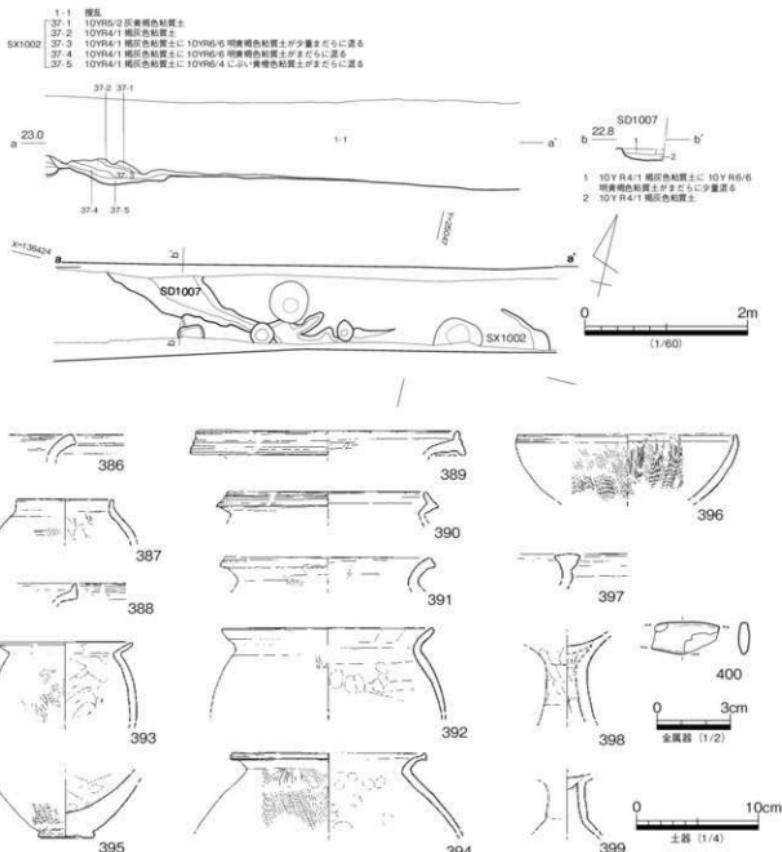
時期 出土遺物の時期は弥生時代中期後半新相から弥生時代終末期新相と幅がある。溝の長期間使用が断面や埋土から確認できることから、現段階では古い遺物をすべて混入と捉え、最も新しく位置づけられる394・396の特徴から、弥生終末期新相に埋没したものとしておきたい。

b. 古墳時代後期以後

1) 挖立柱建物

SB1001 (56図)

遺構 1区中央南側で検出した柱穴列である。SP1605・SP1620・SP1621の3基を確認している。芯々距離が6尺（18m）等間であることや、柱穴底面の高さも極端な比高差がないことから、関連する柱穴と整理段階で判断し掘立柱建物と報告する。この柱穴列が建物の桁行か梁間かは判断できない。遺構の重複関係はSD1601に先行する。



55 図 1 区 SX1002 平断面図

土器 周囲の弥生時代の土器細片が混入しており、掘立柱建物の廃絶時期を示す遺物はない。

時期 柱穴出土遺物から時期比定できる遺物が出土していない。そこで遺構の重複関係や手も後の主軸から、時期を想定しておきたい。柱穴列の軸線は N20°W であり、条里型地割とは一致しない。また、柱穴埋土に基盤層の黄色シルトブロックをほとんど含まず黒褐色系を主体とし、中世の包含層に類似する灰色系の埋土は確認できない。

以上より上限を条里施工以前とし、埋土の特徴が古墳時代の遺構埋土や包含層に類似することから、下限は古墳時代以降と現段階では想定しておきたい。

2) 溝

SD1009 (57図)

遺構 1区東側で検出した溝である。幅30cm～40cm、深さ15cmを測る。遺構の重複関係は流路①より後出し、流路②に先行する。部分的に基盤層Ⅳ層を直に掘り込んでいる。埋土は褐灰色粘質土で上層下層とも埋土に差はありません。

流路①との重複関係から、流路①が埋没し浅い窪地として残った部分に開削され、埋没したのちに浅く窪地であった場所を流路②が流下し埋没したものと考えられる。

土器 出土遺物は壺(401)、高杯(402)、蓋(403)、皿(404)がある。401の土師器壺は、やや丸みをもって屈曲する。402は弥生土器高杯である。口縁部を大きく内湾させる。403の須恵器蓋は、端部は短く下方に折り曲げる。404の土師器皿は、高台が外反気味に踏ん張る。

時期 401および402は下層の流路①からの混入と判断でき、403の須恵器蓋と404の土師器皿の特徴から9世紀末に埋没したものと考えられる。

SD7001 (58図)

遺構 1区北西で検出した溝である。幅50cm深さ10cmを測る。流下方向は、底面がほぼフラットであることから判断しがたいが、周囲の地形を考慮すると南北へへの流下と考えられる。埋土は北側が粗砂を中心とした埋土、南側は粗砂を中心しながらも粘質土がやや混じる。遺構の重複関係は流路①より後出し、流路②に先行する。

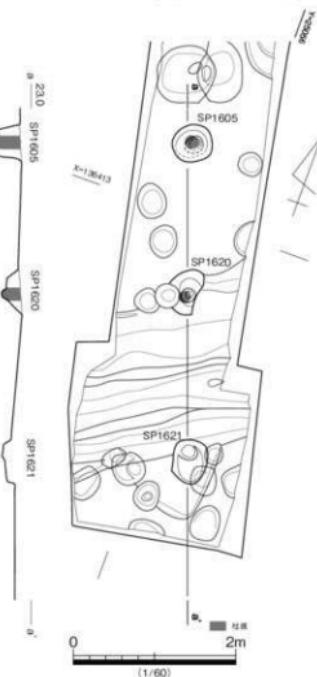
土器 出土遺物は、杯(405)、高杯(406)、蓋(407)、石器(408)、獸骨(鑑定番号55)がある。405の杯は、口径11cm立ち上がりは5mm程度と低い。杯として復元したが、蓋の可能性もある。406の高杯は、低脚の高杯で脚部にスカシは見られない。407の蓋は、垂直に下がる口縁部に、頂部は水平を呈すると考えられる。壺の蓋と考えられる。獸骨は馬の歯牙である。

時期 出土須恵器の特徴から、9世紀には埋没したものと考えられる。

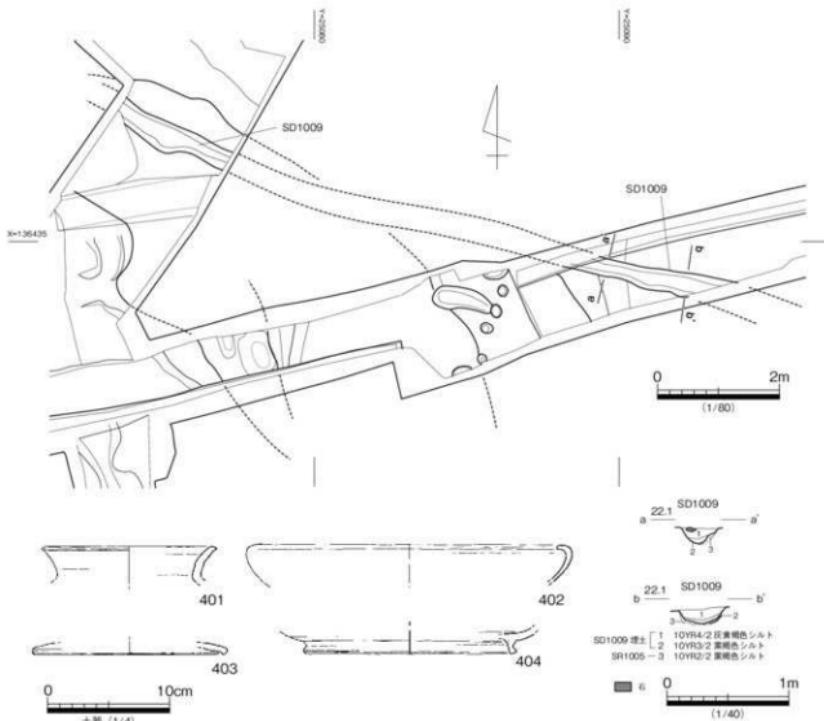
SD1004 (59図)

遺構 1区中央で検出した東西および南北方向に伸びる遺構である。深さは40cm、幅は現状では不明である。溝の西肩は調査時に平面的な検出を行っていないが、北壁断面より復元している。平面形は直線的に東西と南北方向にのび、断面形状はやや垂直気味に掘り込まれている。

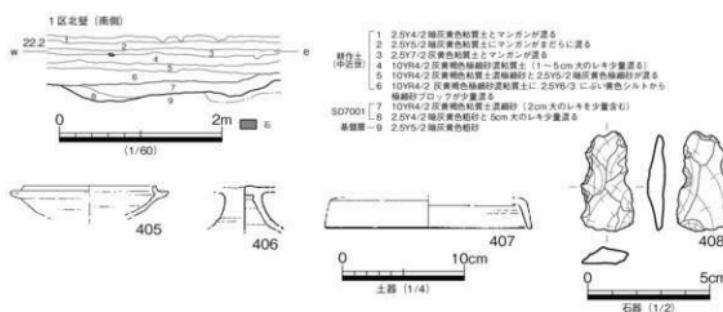
溝の埋土は上下2層に分けられ、下層は粗砂を主体とし、流水状況にあったことがうかがえる。上層は粘質土がやや主体的となるようだ。



56図 1区 SB1001 平断面図



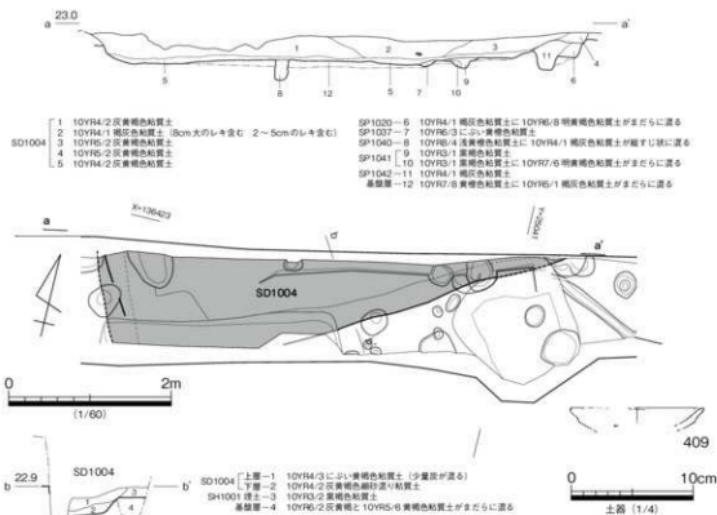
57図 1区 SD1009 平断面図・出土遺物実測図



58図 1区 SD7001 平断面図・出土遺物実測図

土器 出土した遺物は、瓦器の小皿（409）一点だけである。口縁部の中位に段を有し、端部は丸くおさめる。焼成は良好で硬質である。

時期 遺物が一点のみで根柢に乏しいが、瓦器小皿の特徴から12世紀頃に埋没したものと考えておきたい。



59図 1区 SD1004 平断面図・出土遺物実測図

SD1601 (SD1601A・SD1601B・SD1601C) (60図)

遺構 1区中央で検出した東西方向に軸をとる溝群で、溝の軸は真北から西へ26°傾き、周辺の条里型地割とはほぼ一致する。平面および断面の検討より、遺構の重複関係はSD1601C → SD1601B → SD1601Aの順に開削が行われたものと判断した。埋土下位は灰色の細砂から極細砂を中心としており、上位には鉄分の沈着がみられる。SD1601の軸線上の西には本次調査5区のSD5001が該当し一連の遺構と考えられるが、SD5008の東への延伸部分は擾乱箇所であり、SD1601の調査箇所までSD5008がSD5001と併走していたかどうかは判断できない。位置的にSR1003の南肩付近を通過するよう位置関係にあるが、SR1003の南でもSD1601に接続するような溝は検出できていない。

土器 出土土器は、足釜（410～413）、鍋（414）、杯（415・416・420）、皿（417・418）、青磁碗（419）がある。

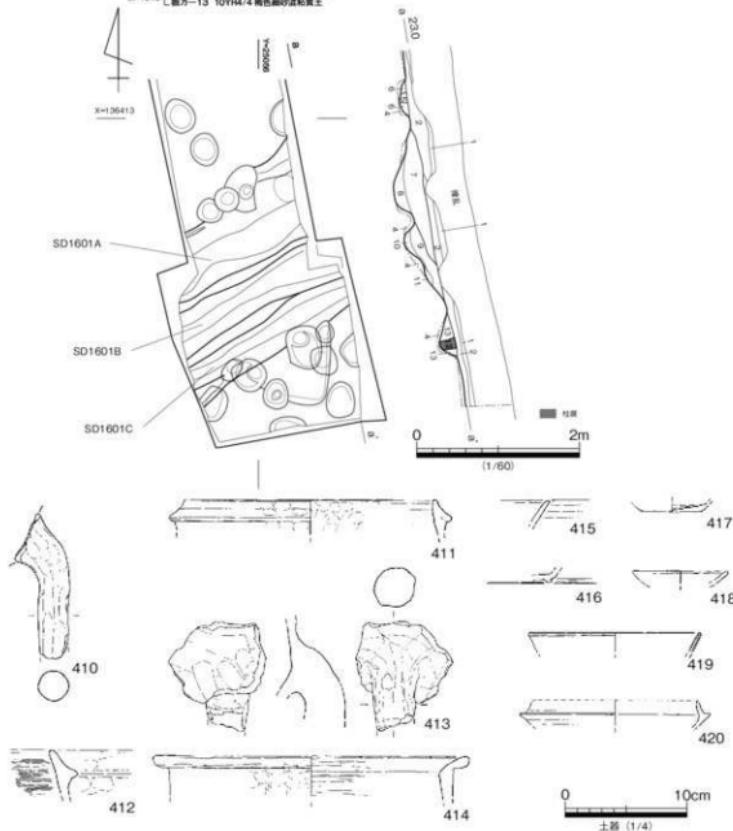
412・413の足釜は、口縁部が内側なめ上方にやや傾き、突帯は口縁部近くの突出はゆるい。414の土器鍋は、口縁部が水平からやや上方にのびる。416の須恵器杯は、高台が低く、やや扁平である。417の土器質土器皿は、底部がヘラ切りによって切り離されている。419は青磁碗である。

時期 埋没の過程で混入したと考えられる土器（415・416・420）を除くと、410～413の土器質土器足釜の一群が時期的なまとまりを示している。足釜口縁部の特徴から15世紀前半と考えられる。また、

417の土師質土器皿は12世紀後半や414の土師器鍋は13世紀前葉に位置づけられることから、開創当初の時期の遺物である可能性があるだろう。

以上の整理より、最終埋没は15世紀前半とする。

- | | |
|---------|--|
| 古代一 | 1 10YR4/2 反照色暗紅褐色土系に 10YR2/3 暗褐色と黒色が小プロックで少量混在 |
| | 2 10YR4/2 反照色暗紅褐色土系に 10YR2/3 暗褐色と黒色が小プロックで少量混在 |
| 基礎部一 | 4 10YR4/4<3> 深褐色の暗紅褐色土質 |
| SP1611 | 5 10YR4/3<3> 深褐色の暗紅褐色土質 |
| | 6 10YR4/3<3> 深褐色の暗紅褐色土質 |
| SD16011 | 7 10YR4/3<3> 深褐色の暗紅褐色土質 5cm 程度レクサム含む |
| | 8 10YR5/3 暗褐色の暗紅褐色土質 5cm 程度レクサム含む |
| SD16019 | 9 10YR5/3 暗褐色の暗紅褐色土質 20cm 程度の石あり |
| | 10 10YR5/3 暗褐色の暗紅褐色土質 20cm 程度の石あり |
| SD16017 | 11 10YR5/3<3> 深褐色の暗紅褐色土質 |
| SP1615 | 12 10YR5/3 暗褐色の暗紅褐色土質 |
| | 13 10YR4/4 暗褐色の暗紅褐色土質 |



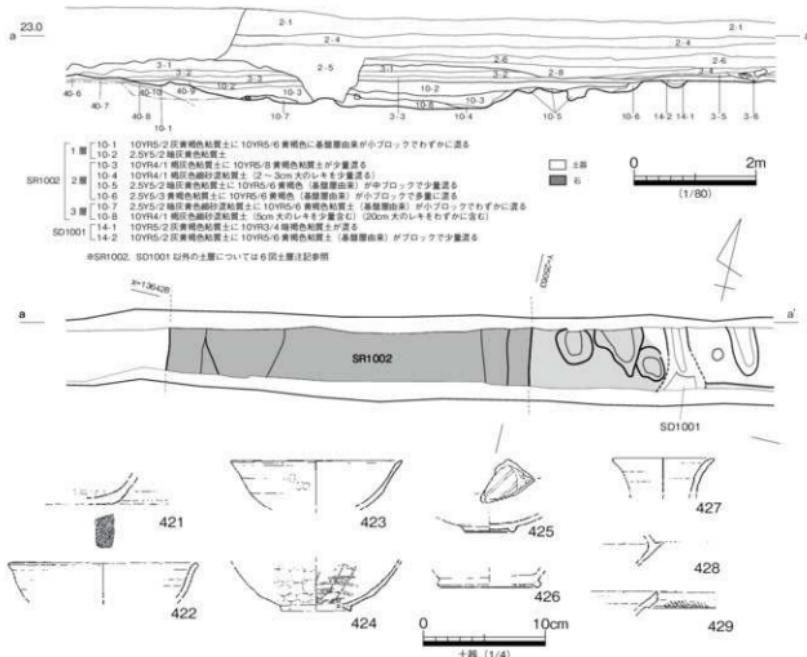
60図 1区 SD1601 平断面図・出土遺物実測図

SR1002 (61 図)

遺構 1 区中央で検出した幅 6m、深さ 40cm の大溝である。溝の埋土は大別 3 層ある。3 層は基盤層 V 層に由来する粗砂が基本である。2 層は粘質土・シルトからなり、顕著な流水痕跡はみられない。1 層は粗砂が多量に混じる粘質土が主体となり、基盤層の黄色の小ブロックが多く混じることから 1 層は埋戻土と考えられる。また調査時には底面からの湧水が認められ常時帶水状態にあった。

条里型地割の坪境と一致する。また SR1002 の北には『旧練兵場遺跡 I』SD08 があり一連の遺構と考えられる。しかしながら SD08 から SR1002 の間は大溝は検出されておらず、SR1002 から SD08 への接続状況は不明瞭である。また南にはサービス棟増設時立会調査の際に検出された平安後期の溝、平成 26 年度に実施された県道拡幅の調査(42 次)で検出された SD03 が延長線上にあり、南北の条里型地割の坪界に合致する一連の溝遺構と考えられる。

土器 出土遺物は、杯(421)、椀(422)、瓦器椀(423~425)、須恵器杯(426~428)、長頸壺(427)、ハソウ(429)がある。421 の土師質土器杯は、底部の切り離しは糸切りである。422 の土師質土器椀は、内湾しながら立ち上がり、上位は外反する。423~425 の和泉型瓦器椀は、424・425 は高台が逆三角形を呈する。423 の口縁部は下半が内湾し、上半 3 分の 1 程度は外反させ端部は丸くおさめる。428 は須恵器杯である。内外面ともに自然釉が付着する。429 の須恵器ハソウは、口縁部に刻み目を入れ、端部は肥厚し、上端部をつまみ上げる。



61 図 1 区 SR1002 平断面図・出土遺物実測図

時期 出土遺物は細片が多く、埋戻土と考えられる1層には遺構の廃絶時期を示す土器は包含されていない。機能時の堆積層（2層・3層）から出土した423～425の瓦器碗を基準として、高台が丁寧に張り付けられているものの、高台は低く造られ、口縁部が大きく開く特徴などから、12世紀後葉から13世紀初頭に機能していたものと考えられる。

SD1001

遺構 1区中央で検出した南北方向の溝である。幅40cm、深さ15cmを測る。近接するSR1002埋土の土質および色調が酷似しており、また軸方向も同じにする。

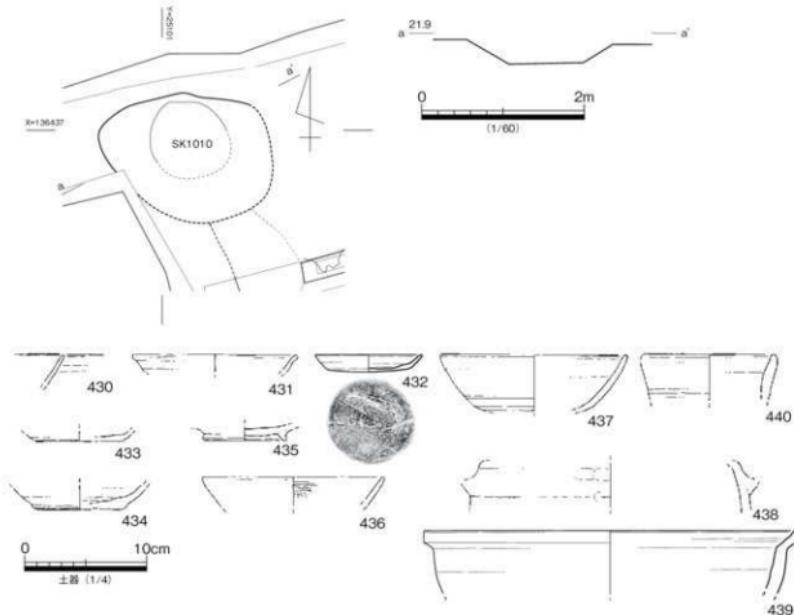
SR1002は条里型地割の坪界に相当することから、坪界溝に付属する溝の可能性があるが、機能面については不明な点が残る。

時期 遺物は出土していないが、埋土および埋没状況から判断してSR1002埋め戻された時期とほぼ同時期の13世紀に機能していたものと考えたい。

3) 土坑

SK1010（62図）

遺構 1区東側で検出した土坑である。平面形は直径1.8mの楕円形を呈し、深さ40cmほど、断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰色の粘質土の単層である。遺構の重複関係はSR1001より新しいと判断される。SR1001およびSR1004出土遺物にもSK1010と同時期のものがわずかに含まれ、本遺構は流



62図 1区 SK1010 平断面図・出土遺物実測図

路②の部分的な落ち込みを捉えている可能性もある。

土器 出土遺物は、皿（430～434）、椀（435）、黒色土器椀（436）、杯（437）、羽釜（438）、鉢（439・440）がある。

430～434の土師質土器皿は、431は胴部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。432～434の底部の切り離しは、回転ヘラ切りである。436の黒色土器椀は、黒化処理は内面のみである。439の須恵器鉢は、焼成不良で還元が十分でなく褐色を呈する。口縁部は上位で屈曲し端部が水平方向に屈曲する。

時期 432～434の皿、杯両者ともに底部の切り離しが、回転ヘラ切りであることや、439の須恵器鉢の形状から、12世紀前半に投棄されたものと考えられる。

SX1007 (63図)

遺構 1区西側で検出した微高地に位置する不定形な落ち込みである。1区全体でみると微高地と考えられる西側では中世の包含層は削平され一切残存していない。削平が著しい西側でわずかにその堆みと埋土が確認できることから、詳細は不明ながら遺構として報告する。

土器 出土遺物は、杯（441・442）がある。442の土師質土器杯は、底部が糸切りによって切り離されている。

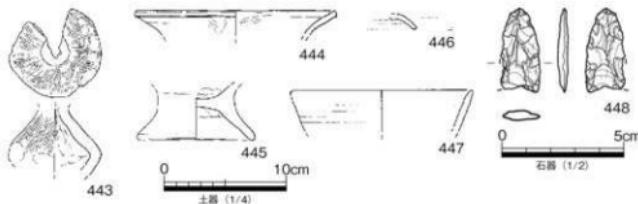
時期 442の特徴から13世紀以降に埋没したものと考えられる。



63図 1区 SX1007 平断面図・出土遺物実測図

1区柱穴 (64図)

建物の復元に至らなかった柱穴出土資料で、特徴的な遺物を報告する。壺（443）・広口壺（444）、台付鉢（445）、蓋（446）、杯（447）、サヌカイト製四基式石鏡（448）がある。SP1044掘方から出土した443は、ミニチュアの壺と考えられる。内面の下半はナデの痕跡が残り、上部は絞り目が明瞭に確認できる。445はSP1087から出土した台付鉢で脚部が大きく踏ん張る。447は、須恵器杯である。



64図 1区柱穴出土遺物実測図

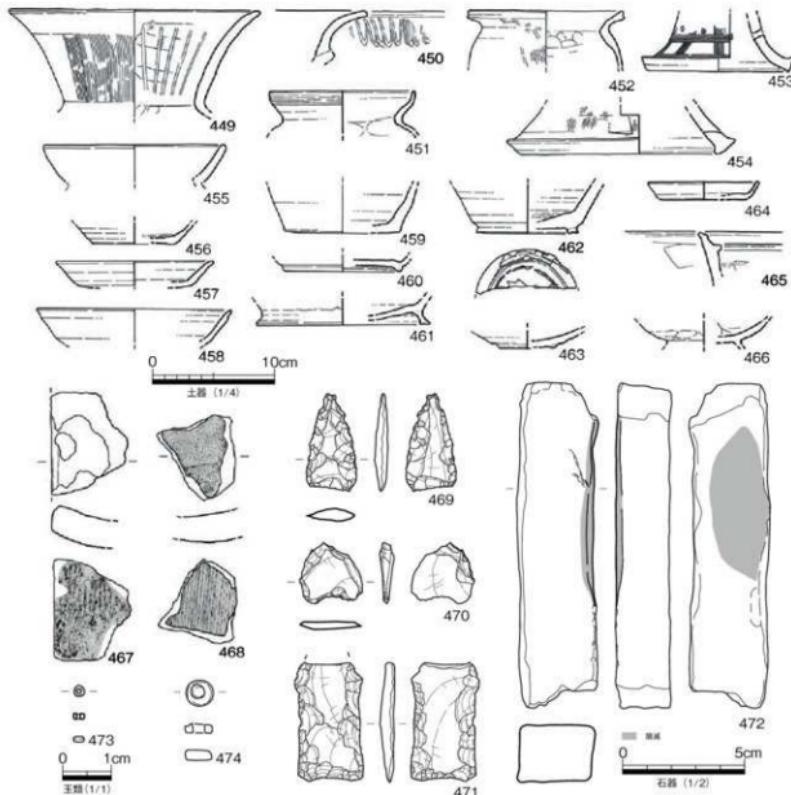
1区包含層(65図)

包含層資料で特徴的なものを抽出し、報告する。

土師器壺(449・450)、壺(451・452・455)、高杯(453・454)、須恵器杯(456～458)、壺(459)、須恵器杯(460～461)、瓦器椀(463)、土師質土器皿(464)、土師質土器足釜(465)、土師質土器椀(466)、平瓦(467・468)、石鑿(469)、二次加工のある剥片(470・471)、流紋岩製砥石(472)、ガラス製小玉(473)、滑石製小玉(474)がある。

449は大きく広がる広口壺で、古墳時代前期前半の所産とみられる。453の高杯は、脚部に櫛描による横線と縦線の文様を描き、円形スカシを縦位の分割ごとに穿孔している。脚端部は上下にやや拡張させる。吉備系の高杯とみられる。454の高杯は、脚部に台形状のスカシを穿孔している。1区でみられなかった弥生時代中期後半古相の資料である。461の須恵器杯は、大きく外側に長く細い高台をもつ。462の杯は、見込みに高台貼り付け時の痕跡とみられる爪の圧痕が、弧状に残る。

473の玉は、排土から出土したもので後代の混入の可能性も残される。



65図 1区包含層出土遺物実測図